

平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一四―九

平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、会社社屋新築工事に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

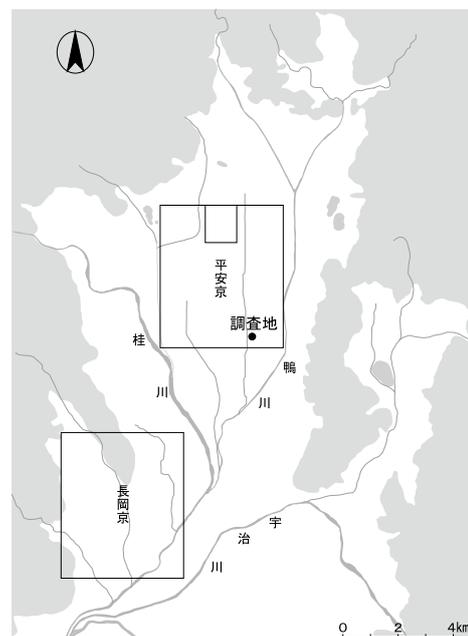
平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 遺 跡 名 | 平安京跡・御土居跡（文化財保護課番号 13 H 485） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市南区西九条北ノ内町6・7・8-1 |
| 3 | 委 託 者 | 株式会社ワコールホールディングス 代表取締役 塚本能交 |
| 4 | 調査期間 | 2014年5月21日～2014年9月26日 |
| 5 | 調査面積 | 1,521㎡ |
| 6 | 調査担当者 | 松吉祐希・木下保明・布川豊治・柏田有香 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「梅小路」・「京都駅」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 | 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付した。なお土器類は番号のみ、土製品は「土」、瓦類は「瓦」、石製品は「石」、銭貨は「銭」、金属製品は「金」、木製品は「木」を番号の前に付した。写真番号も同様である。 |
| 13 | 本書作成 | 松吉祐希・木下保明 |
| 14 | 執筆分担 | 松吉祐希：1～5
木下保明：4-(2) 地業155・419・477、4-(7) |
| 15 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 発掘調査の経過と方法	2
2. 位置と環境	4
(1) 調査地の位置と地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
(3) 周辺調査	5
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 第3面の遺構	13
(4) 第2面の遺構	13
(5) 第1面の遺構	27
4. 遺 物	30
(1) 遺物の概要	30
(2) 土器類	30
(3) 土製品	45
(4) 瓦類	46
(5) 石製品	49
(6) 銭貨・金属製品	50
(7) 木製品	51
5. ま と め	54
(1) 今回の調査区における歴史的変遷	54
(2) 建物1の上部構造と性格	57

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（北東から）
		2	堀3完掘状況（北から）
図版2	遺構	1	第2面全景（東から）
		2	建物1（東から）

- 図版3 遺構 1 地業155 礫上層検出状況（北から）
- 2 地業155 礫下層検出状況（北から）
- 図版4 遺構 1 地業155底面検出状況（北から）
- 2 礫上層遺物出土状況（北から）
- 3 土坑500検出状況（北から）
- 4 土坑500曲物内掘削状況（北から）
- 5 地業155 石2（北から）
- 図版5 遺構 1 地業370検出状況（北東から）
- 2 地業419検出状況（北東から）
- 3 地業477検出状況（北東から）
- 4 井戸371検出状況（北東から）
- 図版6 遺構 1 井戸35遺物出土状況（東から）
- 2 井戸170井戸枠内掘削状況（北から）
- 3 第3面全景（東から）
- 図版7 遺物 土器類1
- 図版8 遺物 土器類2
- 図版9 遺物 土器類3
- 図版10 遺物 土器類4
- 図版11 遺物 瓦類
- 図版12 遺物 土製品・石製品・銭貨・金属製品
- 図版13 遺物 木製品

挿 図 目 次

図1 調査位置図（1：2,500）	1
図2 調査区配置図（1：1,000）	2
図3 平安京・御土居と調査地点図（1：100,000）	4
図4 周辺調査位置図（1：5,000）	5
図5 基本層序柱状図	9
図6 調査区南壁土層断面図（1：80）	10
図7 調査区西壁土層断面図（1：80）	11
図8 第3面遺構平面図（1：300）	12
図9 第2面遺構平面図（1：300）	14

図10	建物1実測図(1:100)	15
図11	地業155実測図(1:50)	16
図12	地業155底面平面図(1:50)	17
図13	建物2・3実測図(1:50)	18
図14	建物4実測図(1:50)	19
図15	堀5・6・柱穴列7実測図(1:50)	20
図16	地業370実測図(1:50)	21
図17	地業419・477土層断面図(1:50)	22
図18	井戸35・133・168・170実測図(1:50)	23
図19	井戸314・371・392・394実測図(1:50)	24
図20	井戸494実測図(1:50)	25
図21	土坑42・157・171・312実測図(1:50)	26
図22	第1面遺構平面図(1:300)	28
図23	堀3セクション土層断面図(1:50)	29
図24	流路501、整地層出土土器実測図(1:4)	31
図25	地業155、土坑500、井戸314、建物2出土土器実測図(1:4)	33
図26	井戸494・394、土坑171出土土器実測図(1:4)	35
図27	建物1、土坑157、井戸392出土土器実測図(1:4)	37
図28	柱穴列7、地業477、井戸168・170、土坑42・312出土土器実測図(1:4)	39
図29	地業370・419、土坑499出土土器実測図(1:4)	41
図30	ピット462、井戸35・133、土坑481出土土器実測図(1:4)	43
図31	井戸371出土土器実測図(1:4)	44
図32	堀3、第1面直上出土土器実測図(1:4)	45
図33	出土土製品実測図(1:4)	46
図34	出土軒丸瓦拓影及び実測図(1:4)	46
図35	出土軒平瓦・鬼瓦拓影及び実測図(1:4)	48
図36	出土石製品実測図(1:4)	49
図37	出土銭貨拓影(1:1)	50
図38	出土金属製品実測図(1:2)	51
図39	出土木製品実測図(1:4)	52
図40	遺構変遷図1(1:500)	55
図41	遺構変遷図2(1:500)	56
図42	建物1作業工程図	58
図43	建物1復元図	60

写 真 目 次

写真1	調査前風景（北東から）	3
写真2	重機掘削状況（北西から）	3
写真3	中学生チャレンジ体験（北から）	3
写真4	御土居掘削状況（北東から）	3
写真5	重機掘削状況（西から）	3
写真6	夏期教室（北東から）	3
写真7	現地説明会（北西から）	3
写真8	地業155礫下層検出状況（北西から）	3

表 目 次

表1	周辺調査の主な検出遺構（発掘調査）	6
表2	周辺調査の主な検出遺構（試掘・立会調査）	7
表3	遺構概要表	13
表4	遺物概要表	30
表5	掘込地業の検出事例一覧表	59

平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡

1. 調査経過

(1) 調査の契機

本調査は、会社社屋新築工事に伴う発掘調査である。

調査地は京都市南区西九条北ノ内町6・7・8-1に所在し、平安京左京九条二坊十六町跡及び御土居跡にあたる(図1)。

工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という)が試掘調査を行った結果、御土居の堀や平安時代の遺構を確認した。そのため、文化財保護課は原因者に対して埋蔵文化財調査実施を指導し、調査が行われることとなった。調査は、委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

今回の調査区では、試掘調査や既往の周辺調査により、御土居の堀及び平安時代から鎌倉時代の遺構の存在が想定された。

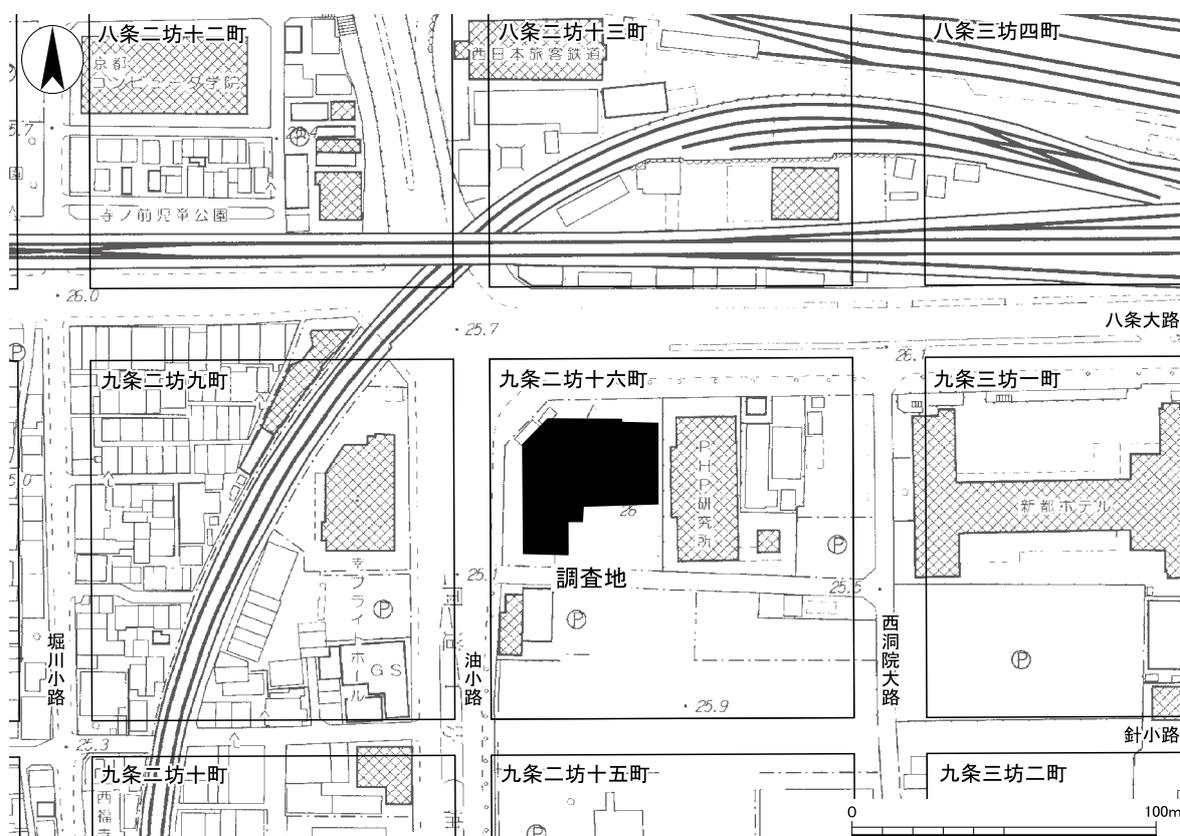


図1 調査位置図(1:2,500)

(2) 発掘調査の経過と方法

調査区は、文化財保護課の指導により設定した(図2)。調査総面積は1,521㎡である。

調査では、現代の盛土は重機を用いて掘削を行い、重機による掘削土は全て場外へ搬出処分した。現代の盛土の下面で近世の遺構面(第1面)を確認し、御土居の堀や素掘溝などの遺構を検出・掘削の後、6月26日に全景写真の撮影を行った。

さらに第1面の下層で平安時代の整地層(第2面)を確認した。第2面の上面で、建物や井戸などの遺構を検出・掘削の後、8月13日に全景写真の撮影を行った。また第2面で検出した遺構の中で、地業155の礫上層・地業370・土坑41の検出状況については、写真測量を行った。

第2面の調査終了後、平安時代の整地層を除去、基盤層となる砂礫層の上面(第3面)で自然流路を検出した。自然流路の埋土を掘削後、9月19日に全景写真の撮影を行った。調査で検出した遺構はすべて人力で掘削を行い、検出した遺構や土層断面は、図面作成・写真撮影などの記録をとった。調査後は埋め戻しを行わずに終了した。

調査期間は2014年5月21日から9月26日である。

なお、普及啓発活動の一環として、8月16日に第1面で検出した御土居の堀と第2面の調査成果について現地説明会を行った。現地説明会には約350名の参加があった。また、中学生チャレンジ体験、小中学生の夏期教室、大学の見学などの受け入れも行った。

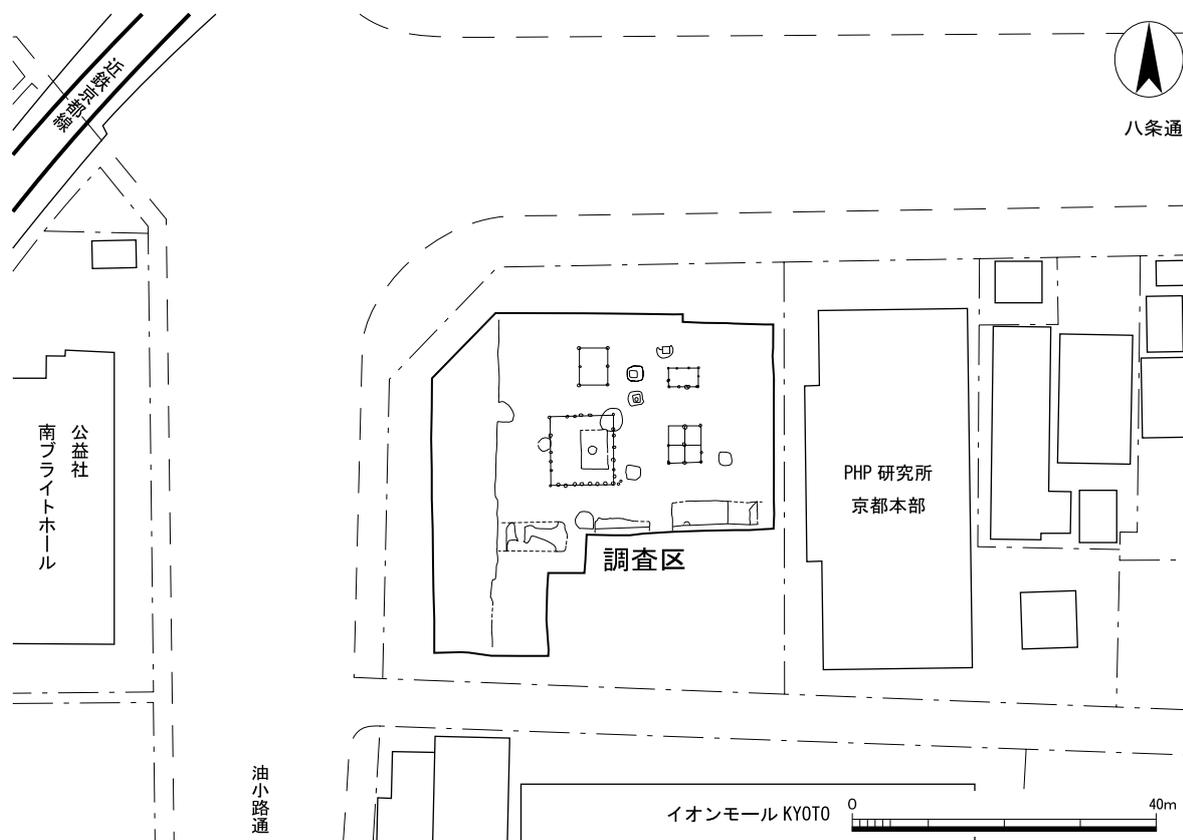


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



写真1 調査前風景（北東から）



写真2 重機掘削状況（北西から）



写真3 中学生チャレンジ体験（北から）



写真4 御土居掘削状況（北東から）



写真5 重機掘削状況（西から）



写真6 夏期教室（北東から）



写真7 現地説明会（北西から）



写真8 地業155磔下層検出状況（北西から）

2. 位置と環境

(1) 調査地の位置と地理的環境

調査地は京都盆地の北部にあたり、京都市の南西部に位置する。京都盆地の北部では、数万年前に扇状地が形成されたが、とくに調査地周辺は1万～6000年前にその古扇状地を削り込んだ谷に、鴨川による小規模な扇状地（塩小路層）が形成された¹⁾。塩小路層には、砂礫層が厚く堆積する。この砂礫層が、今回の調査の基盤層となる。

(2) 歴史的環境（図3）

平安遷都以前には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である烏丸町遺跡が知られる。烏丸町遺跡は調査地の南側から東側一帯に位置する。

延暦13年（794）に長岡京から平安京へ遷都が行われると、調査地周辺は平安京城となる。調査地は、北を八条大路、南を針小路、東を西洞院大路、西を油小路に囲まれた平安京左京九条二坊十六町の北西部に位置する。

まず文献史料における記述から知ることのできる、調査地周辺の様相を以下に記す。

今回の調査地である九条二坊十六町（以下「平安京左京」は省略）については、平安時代の様子を記した文献史料は知られてない。

調査地の北西に位置する八条二坊十二町は、平安時代後期（12世紀中頃）に、権中納言藤原師長が邸宅を構えており、この邸宅は「金色堂」と呼ばれる仏堂を有していた（九条家本『延喜式』付

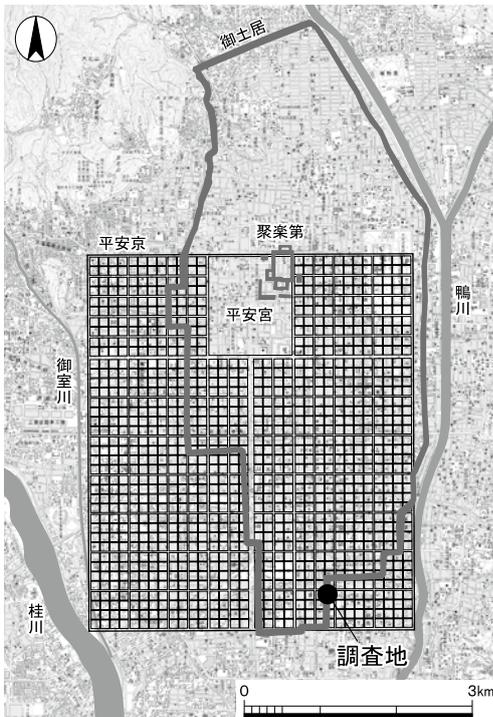


図3 平安京・御土居と調査地点図
(1 : 100,000)

図)。師長が保元の乱に連座して流罪された後には、中納言藤原顕長の八条堀河第が営まれたようである²⁾。この邸宅には、後白河天皇や六条天皇が方違えのために行幸している³⁾。顕長の孫である宗隆の代（13世紀前半）まで、この地に邸宅を構えていたと考えられるが、その後は土地を幾つかに分割されたようである。

調査地の西隣に位置する九条二坊九町は、中納言藤原家成が邸宅を構えており、長承2年（1133）には邸宅内に仏堂「八条堀川堂」を建立した⁴⁾。八条堀川堂には九体丈六仏などを安置していた⁵⁾。

このような邸宅内の仏堂は、調査地の北東に位置する八条三坊四町にも存在した。12世紀中頃に、関白藤原忠実がこの町の南西部に阿弥陀堂を建立しており、阿弥陀堂には、丈六の阿弥陀如来像を安置していた⁶⁾。

室町時代以降には、調査地周辺は田園化したと考え

られる。

安土・桃山時代になると、調査地周辺の属した九条村には、キリシタンが多数居住しており、元亀4年(1573)にはルイス・フロイスも京都の政情不安の際に九条村へ逃れ留まっている⁷⁾。その際のルイス・フロイスの書簡から、九条村周辺は田園地帯であったことが窺える。天正19年(1591)には、豊臣秀吉により御土居が造営された。御土居は、京都の街を囲む土塁と堀で、総延長約22.5kmにも及ぶ。

江戸時代になると、御土居の堀は次第に埋没し、調査地周辺は田畑となったようである。調査地の存在した西九条村は、『雍州府史』によると、藍や蔬菜の栽培が盛んであった。

(3) 周辺調査 (図4、表1・2)

次に考古学的な調査成果から、今回の調査地周辺の様相を以下に記す。

弥生時代から古墳時代には、烏丸町遺跡が知られるが、No.3～5・7～9 (以下Noは表1に対

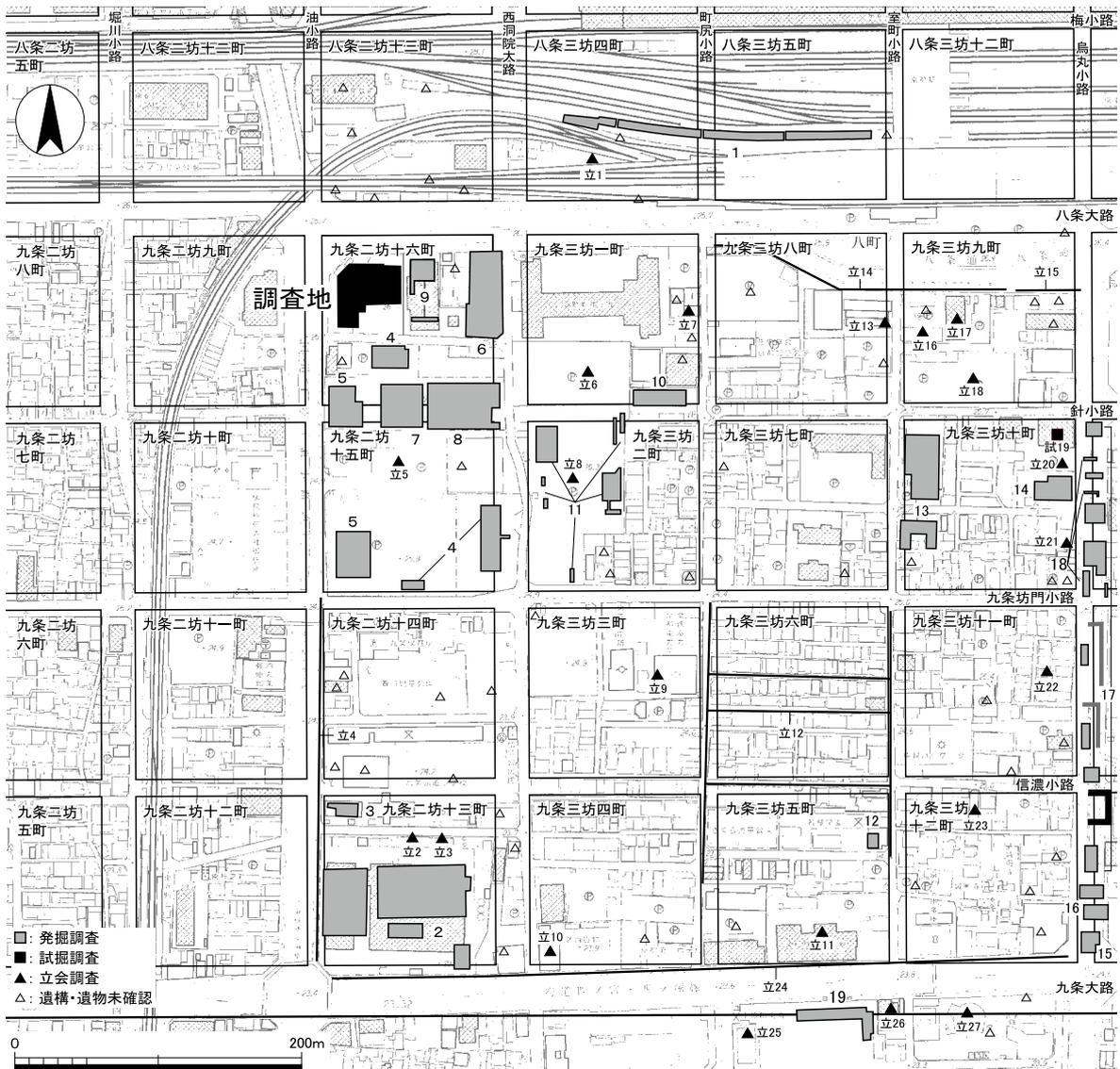


表1 周辺調査の主な検出遺構（発掘調査）

番号	調査地	条坊・区画関連	宅地関連	流路・耕作・湿地関連	文献
1	八条三坊四・五町	平安後期～室町の町尻小路路面・東側溝	平安後期の池・建物・泉・溝・土坑、鎌倉の泉・井戸・柱列・土坑、室町の井戸	平安後期の湿地、室町以降の耕作	『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
2	九条二坊十三町	平安前～中期の油小路東側溝、御土居堀	平安前～中期の池状遺構、鎌倉の建物・井戸・土坑・溝	平安前～中期の流路	「平安京左京九条二坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
3	九条二坊十三町	御土居堀		砂礫層から古墳の土師器・須恵器出土	「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
4	九条二坊十五・十六町	平安後期の十五町北五・六門、十六町北四・五門区画溝	平安後期の溝・柵・柱穴・土坑・堀、鎌倉～室町の井戸	砂礫層から弥生・古墳の遺物出土	「平安京左京九条二坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
5	九条二坊十五・十六町	御土居堀		砂礫層から弥生～古墳の土器出土	「平安京左京九条二坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
6	九条二坊十六町		平安前期の掘立柱建物、鎌倉～室町の井戸・柱穴、池	地山砂礫上の緑灰色微砂層から9世紀後半～10世紀初頭の遺物少量出土	「平安京左京九条二坊2」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
7	九条二坊十五・十六町		平安後期～鎌倉・室町の柱穴・土坑・井戸・池状遺構(洲浜・景石)	砂礫層から弥生土器・古墳の土師器・須恵器出土	「平安京左京九条二坊1」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
8	九条二坊十五・十六町		室町の井戸・溝	砂礫層から古墳の須恵器・埴輪片出土	「平安京左京九条二坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
9	九条二坊十六町		平安前期の池状窪地・土坑、平安末期～鎌倉の柱穴・井戸・土坑・溝・溝状遺構・池	砂礫上層から弥生・古墳の遺物出土	「平安京左京九条二坊」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
10	九条三坊一町		平安後期の地業、平安末期～鎌倉の甕倉・井戸・土坑・柱穴	古墳の流路	「平安京左京九条三坊一町跡」『平安京跡研究調査報告 第22輯』(財)古代学協会 2006年
11	九条三坊二町	平安後期の針小路路面・南側溝	平安後期の池・掘込み、鎌倉前～後半の井戸		「平安京左京九条三坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
12	九条三坊五町			弥生の流路	「平安京左京九条三坊五町」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年
13	九条三坊十町		平安の池・建物・井戸・溝・土坑、鎌倉の建物・井戸・溝・土坑	平安の流路、室町～江戸の耕作溝	『平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-15 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2015年
14	九条三坊十町		平安前～中期の建物・池・溝・土坑、鎌倉～室町の建物・塀・井戸・土坑		『平安京左京九条三坊十町』古代文化調査会 2006年
15	九条三坊十三町	平安後期の烏丸小路路面・東側溝	平安前期の窪地、鎌倉の井戸、室町後期～桃山前半の濠・柱穴		「九条三坊(1)」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
16	九条三坊十三町	平安後期の烏丸小路路面・側溝	室町後期の濠		「九条三坊(2)」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
17	九条三坊十三～十五町	平安後期～鎌倉前期の九条坊門小路北側溝・烏丸小路東側溝	平安中期の土坑、平安後期～鎌倉前期の土坑・柱穴・落込み		「平安京左京九条三坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
18	九条三坊十五町	烏丸小路東側溝、室町後期の濠	平安前期の井戸・土坑・溝		「平安京左京九条三坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
19	九条大路			縄文・弥生前期～飛鳥の落込み・流路、中世の耕作溝	『平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

表2 周辺調査の主な検出遺構（試掘・立会調査）

番号	調査記号	調査地	検出遺構	文 献
立1	08-HL47	八条三坊四町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立2	97-HL434	九条二坊十三町	平安末期～鎌倉の土坑、鎌倉前期の遺物包含層、中世の落込み	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
立3	00-HL37	九条二坊十三町	鎌倉の落込み、室町中～後期の遺物包含層・南北溝	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
立4	02-HL208	九条二坊十一町、油小路	平安末期～鎌倉の遺物包含層、油小路西側溝か	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
立5	07-HL14	九条二坊十五町	中世の遺物包含層、御土居	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立6	03-HL389	九条三坊一町	鎌倉中期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
立7	05-HL331	九条三条一町	鎌倉後期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立8	07-HL14	九条三坊二町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立9	84-HL316	九条三坊三町	古墳の流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立10	86-HL207	九条三坊四町	室町の遺物包含層、時期不明の流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
立11	88-HL168	九条三坊五町	室町の東西溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
立12	16-19	九条三坊五・六町	平安末期～室町の耕作溝	「左京九条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
立13	94-HL208	九条三坊八町	鎌倉・室町の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立14	93-HL332	九条三坊八・九町	鎌倉・江戸の遺物包含層・落込み・路面	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立15	93-HL380	九条三坊九町	平安後～末期の落込み、鎌倉～江戸の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立16	90-HL17	九条三坊九町	平安中期の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
立17	02-HL278	九条三坊九町	鎌倉末期・室町初期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
立18	00-HL213	九条三坊九町	鎌倉前期、室町前・中・後期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
試19	保試99-32	九条三坊十町	室町前期の土坑墓・土坑・南北溝・柱穴	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
立20	04-HL62	九条三坊十町	平安中期の遺物包含層、鎌倉前～後期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
立21	85-HL8	九条三坊十町	鎌倉の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立22	85-HL120	九条三坊十一町	鎌倉の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立23	97-HL247	九条三坊十二町	平安後期の落込み・遺物包含層、室町・江戸の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
立24	S60-51	九条四坊十二町、九条大路	弥生の遺物包含層、室町の井戸・土坑・堀、近世の九条大路側溝	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
立25	86-HL206	九条大路	弥生土器含む流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
立26	86-HL223	九条大路	室町の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
立27	88-HL77	九条大路	鎌倉～室町の土坑、下層に流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年

応)で、平安時代の基盤層である砂礫層から、弥生時代から古墳時代の遺物が出土している。

飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は検出していない。

平安時代前期から中期には、掘立柱建物、井戸、土坑の他に、窪地や流路、池の検出が多くみられる (No.2・6・9・14・15・17)。

平安時代後期から鎌倉時代には、建物、柵、柱列、柱穴、甕倉、建物の地業、井戸、土坑、池など (No.1・2・4・6・9～11・18) を検出している。平安時代後期には、遺構の数は急増し、宅地として利用されたことがわかる。また鎌倉時代になっても調査地周辺は平安時代から継続して宅地利用がなされたようである。

室町時代には、井戸、濠、溝 (No.8・16) を検出するのみで、遺構の数が減少する。

このように考古学的な調査から、調査地周辺は平安時代前期から中期にかけて、遺構の密度が低いことがわかる。後世に、これらの遺構が削平された可能性も考えられる。しかし、平安時代前期から中期にかけて、周辺に窪地や流路が存在したことや、文献史料における記述が少ないことから、調査地周辺は平安時代前期から中期には人間活動が希薄であったと指摘できる。平安時代後期になると、平安京左京八条一坊の南半部に平清盛の「西八条第」が築かれたことを嚆矢に、調査地の存在する八・九条周辺には貴族の邸宅が増加した。調査地周辺の調査においても、建物やそれに付随する池を検出できることから明らかである。また、調査地周辺の平安時代後期の邸宅には仏堂を有したものが多く文献資料から窺うことができる。

安土・桃山時代には、No.2・3・5で南北にはしる堀を検出している。この溝は幅17.5～20m、深さ1.5～2.0mで、豊臣秀吉により構築された御土居の堀である。調査地周辺は御土居の南端にあたり、堀の西側に土塁が築かれていた。すなわち、土塁の西側が洛中、東側が洛外である。堀からは、多量の木製品、陶磁器、瓦などが出土した。木製品の中には、キリスト教に関係するとみられるポルトガル語で記された木簡も出土している (No.2)。

江戸時代の様子は文献では確認できないが、周辺での発掘調査でも目立った遺構がみられないことから、洛外にあたるこの地は田畑となったと考えられる。また明治42年の地形図によると、東寺周辺に集落が広がるものの、調査地は田畑であったことがわかる。

註

- 1) 横山卓夫1988『平安遷都と鴨川つけかえ』法政出版
- 2) 『兵範記』仁安2年3月7日条
- 3) 『兵範記』保元2年4月21日、仁安2年正月7日条など
- 4) 『拾芥抄』東京図、九条家本『延喜式』付図
- 5) 『長秋記』長承3年8月21日条
- 6) 『兵範記』仁安4年2月3日条
- 7) 『日本耶蘇会年報』元龜4年4月26日付 ルイス・フロイス書簡

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5～7)

現地表面から0.9～1.1m (標高25.2～25.0m) までは、現代の盛土及びコンクリート基礎が調査区全体に広がっていた。その下層で、近世の遺物包含層 (第Ⅰ層、標高24.1m)、平安時代の整地層 (第Ⅱ層、標高24.0m)、砂礫層 (第Ⅲ層、標高23.8m以下) を確認した。また平安時代の整地層 (第Ⅱ層) は調査区東側にのみ存在しており、調査区西側では第Ⅰ層の直下で第Ⅲ層が認められた。なお、第Ⅰ層と第Ⅱ層の間には中世の遺物包含層が残存する場所もあった。第Ⅲ層は、鴨川の扇状地堆積である砂礫の堆積層で、少なくとも標高22.8mの深さまでは続いていることを、御土居の堀や井戸の底面で確認できた。

第Ⅰ層上面 (第1面) で近世の遺構を、調査区東側では第Ⅱ層上面、調査区西側では第Ⅲ層上面 (第2面) で古代から中世の遺構を検出した。第Ⅲ層上面 (第3面) では、流路を確認した。調査区全体は近・現代に大きく削平を受けており、遺構の範囲が確定できないものが多数認められた。

(2) 遺構の概要 (表3)

今回の調査では、第1面から第3面の3つの遺構面で遺構を検出した。第1面では御土居の堀や、17世紀以降の素掘溝、多数の耕作に伴う素掘小溝を検出した。第2面では、12世紀後半から14世紀前半の建物4棟、堀2条、柱列3条、地業3基、井戸9基、土坑、ピットなどを検出した。第2面で検出した遺構は、主に12世紀後半から13世紀前半、13世紀後半から14世紀前半の2時期に分けることができる。第3面では、9世紀初頭に埋没した流路や12世紀前半整地層を検出した。

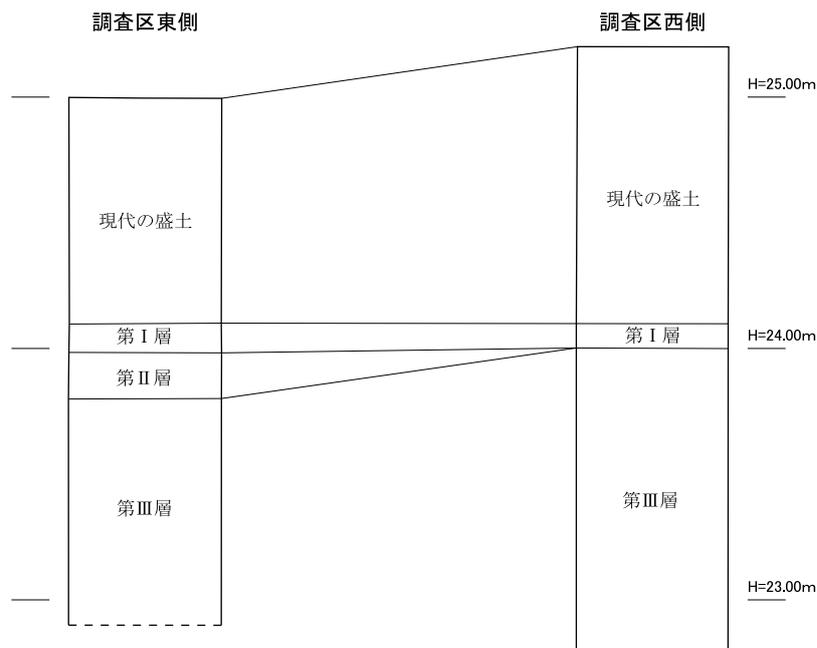


図5 基本層序柱状図

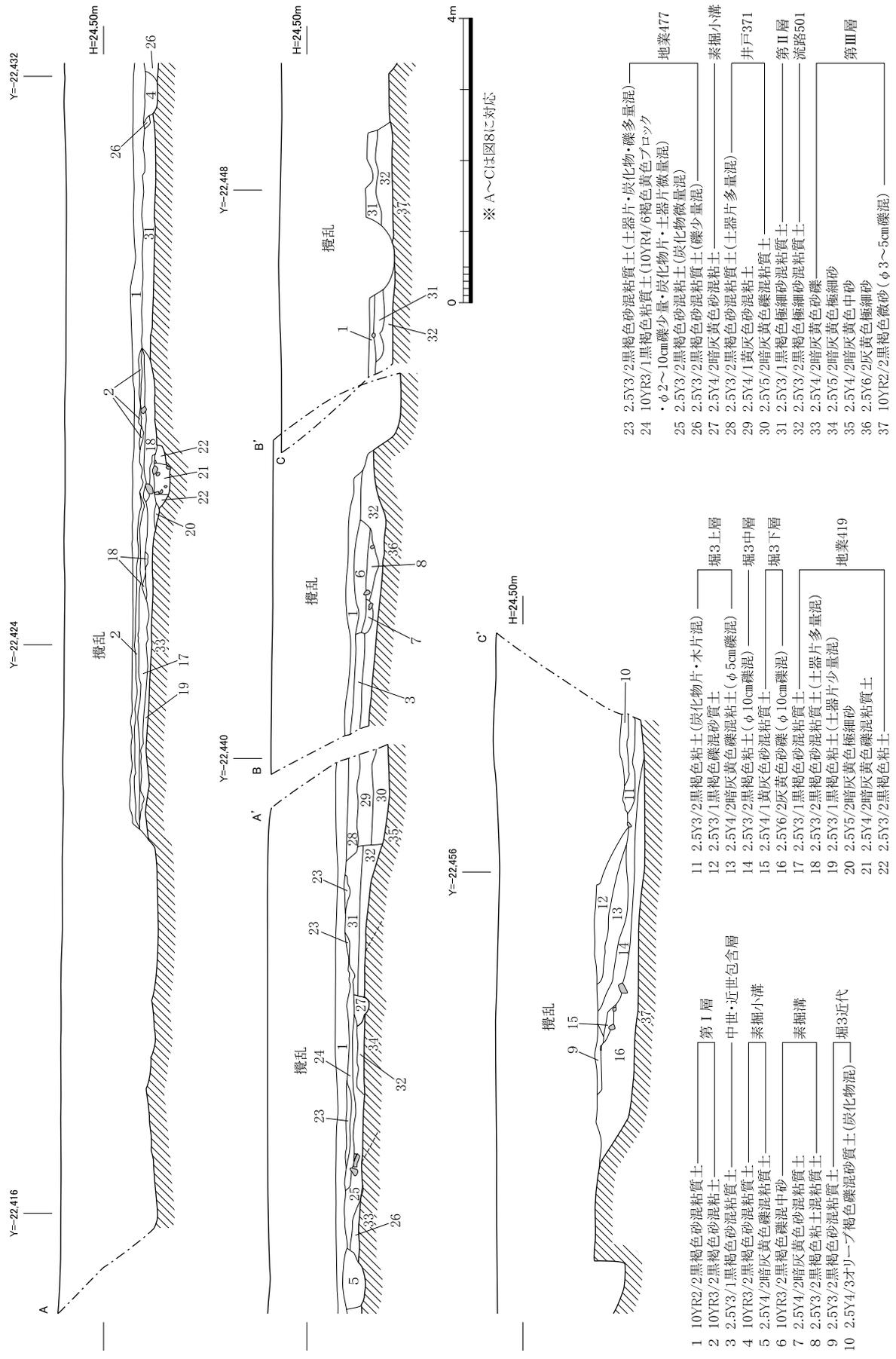


図6 調査区南壁土層断面図 (1:80)

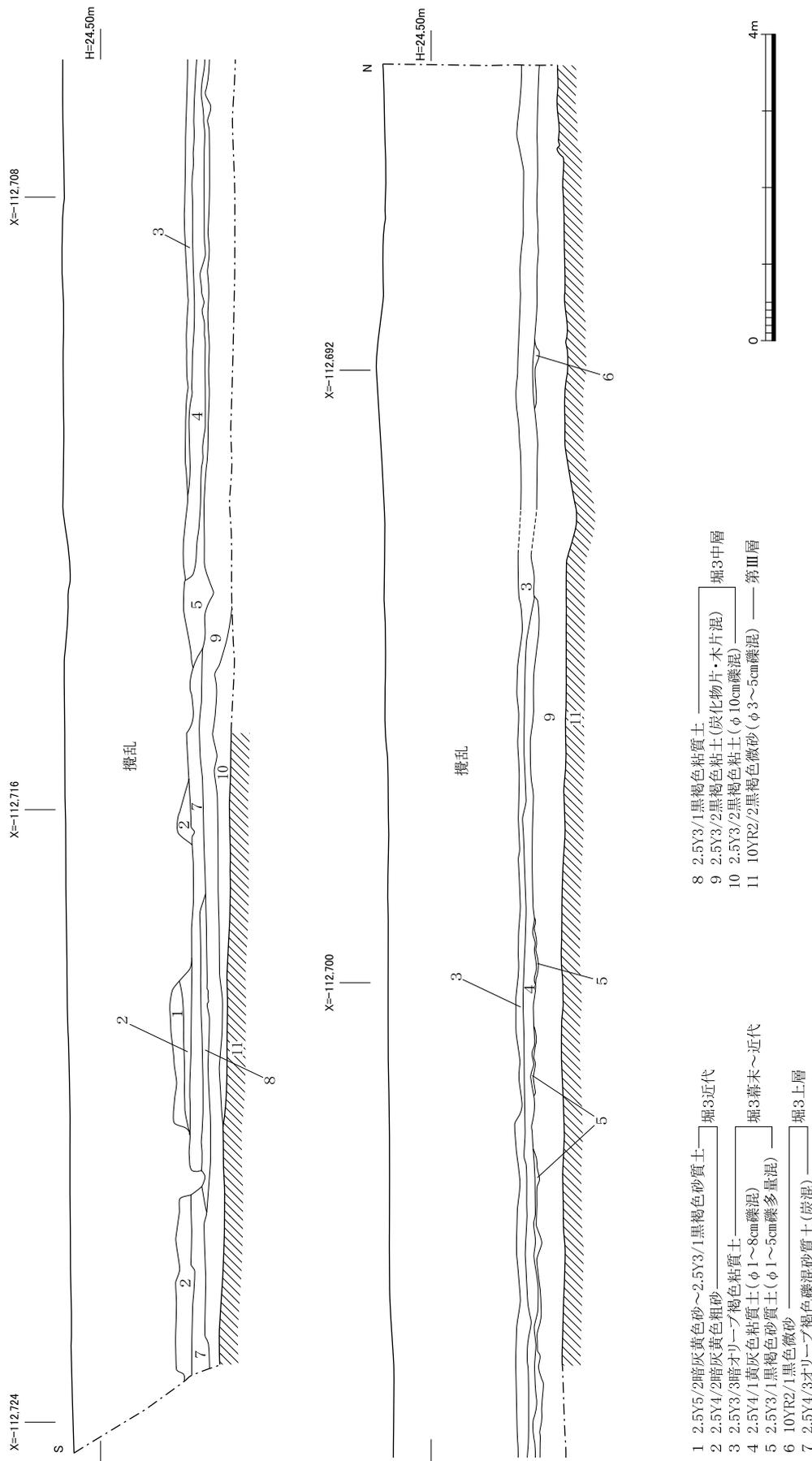


図7 調査区西壁土層断面図 (1 : 80)



図8 第3面遺構平面図 (1 : 300)

(3) 第3面の遺構 (図8、図版6-3)

第3面では、流路と整地層を検出した。

流路501 調査区の北東から南西にかけて流路を検出した。幅は8～13m、深さは0.15～0.20mである。流路の埋土からは、主に9世紀初頭の土師器や須恵器が出土しており、平安遷都直後に人為的に埋められたようである。この流路は、東に隣接する平成10年度に行われた調査の「池状を呈した凹地」とされた遺構の続きとみられる (表1-No.9)。

整地層 流路501の上面で、調査区東半を平坦に整地した黒褐色～オリーブ黒色砂混り粘土層を確認した (第Ⅱ層)。この整地層の厚さは0.1mほどであった。整地層からは、9世紀初頭や12世紀半ばの土器や石帯の巡方、馬歯やモモの種子などが出土した。このことから12世紀半ばに大規模な整地を行ったとみられる。

(4) 第2面の遺構 (図9、図版2-1)

第2面では、12世紀後半から14世紀前半の建物4棟、塀2条、柱列3条、地業3基、井戸9基、土坑、ピットなどを検出した。

建物1 (図10～12、図版2～4) 調査区中央で検出した、東半部に地業155を伴う東西8間、南北9間の建物である (図10)。建物1は、建物内部の中央東寄りの東西約3.5m、南北約5.2mの範囲で地面を0.15m掘り込み、その底面に拳大の礫を敷き詰め、建物の基礎 (地業155) としていた。

建物1の柱穴掘形は直径0.3～0.5mの円形を呈し、柱間は約1.0mである。柱穴の深さは西辺が約0.05m、北辺と東辺が約0.10m、南辺が約0.20mと、西辺の残存状態は悪く、南辺で比較的良好であった。柱穴からは12世紀末から13世紀前半の土師器皿が出土した。

地業155からは12世紀半ばから後半の土器が出土した。底面に敷かれた礫は上層・下層の2段に分かれる (図11)。礫上層は、礫の面を揃えずに敷きつめており、礫と礫の間には黄灰色砂混粘質土が突き固められていた。このことから、礫上層の上に、黄灰色砂混粘質土を盛っていたと推測できる。礫と礫の間からは、多数の土師器皿が出土した。礫下層は石の上面を揃え、ほぼ隙間なく敷いていた。礫下層では、明確な目地を確認することはできなかったが、地業範囲の四隅に比較的大きな礫を丁寧に敷いていることから、四周から礫を配置していったと考えられる。地業の西辺に

表3 遺構概要表

遺構面	時代	主要遺構
第1面	16世紀以降	堀、素掘溝、耕作溝
第2面	13世紀後半～14世紀前半	柱穴列、地業、井戸、土坑
	12世紀後半～13世紀前半	建物、塀、地業、井戸、土坑
第3面	9世紀	流路

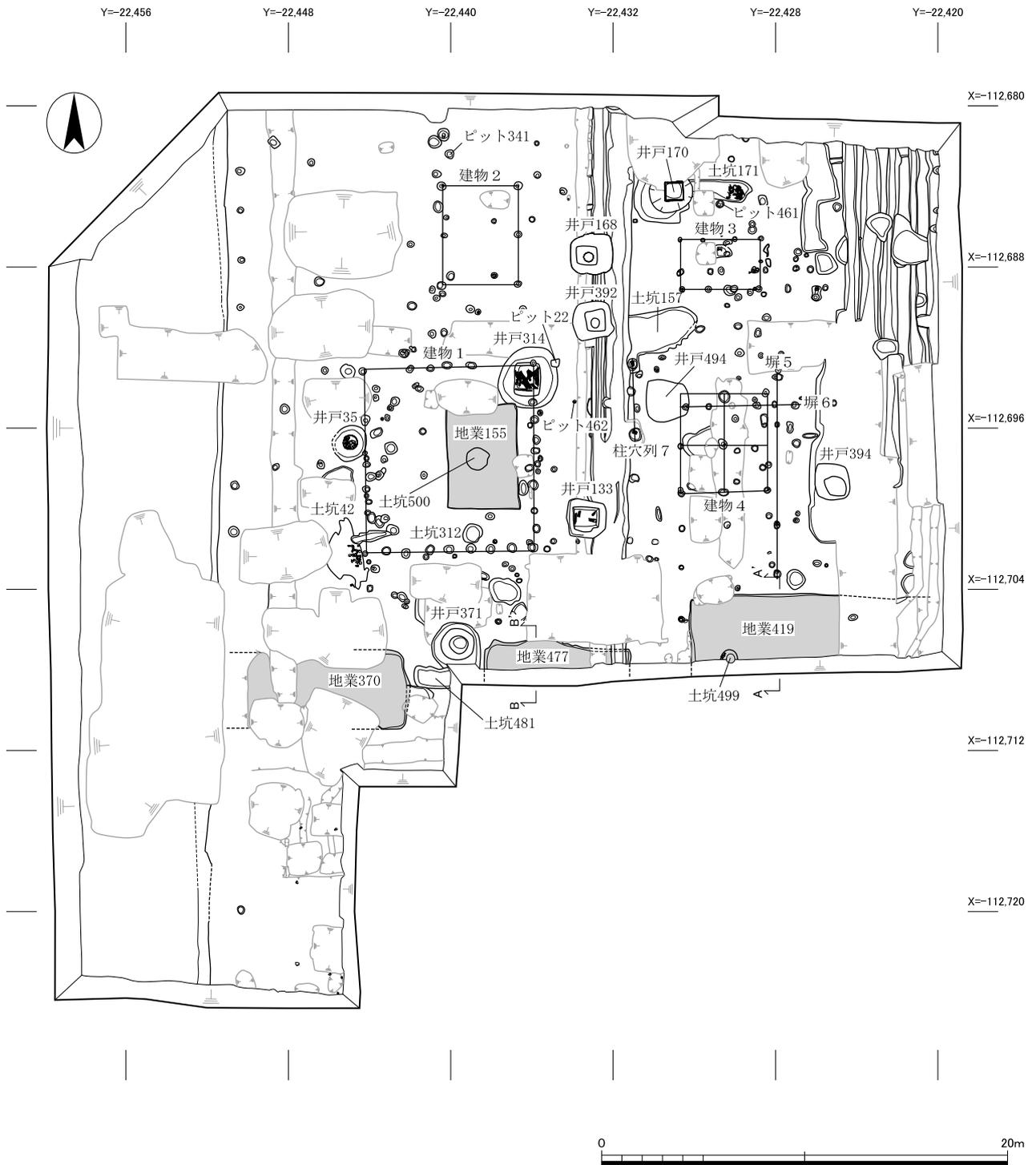
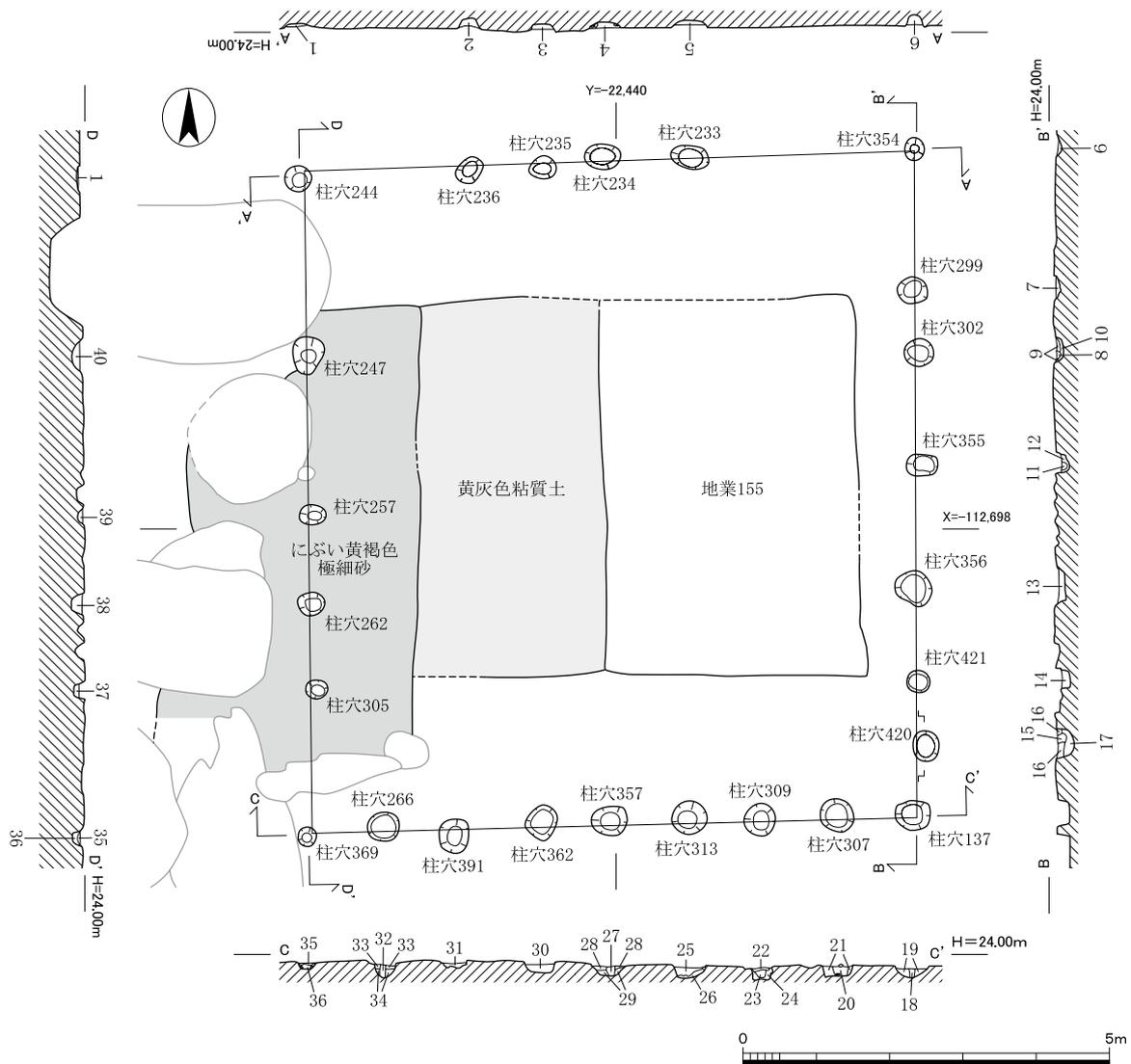


図9 第2面遺構平面図 (1 : 300)



- | | | |
|-------------------------|------------------------------|--------------------------|
| 1 5Y3/1オリブ黒色砂混粘質土 | 15 5Y2/2オリブ黒色砂混粘質土 | 29 2.5Y3/2黒褐色粘質土 |
| 2 2.5Y3/1黒褐色礫混砂質土 | 16 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土 | 30 2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘土 |
| 3 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土 | 17 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土(土器片混) | 31 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 |
| 4 2.5Y3/1黒褐色砂質土 | 18 5Y2/2オリブ黒色砂混粘質土(φ1cm礫多量混) | 32 5Y2/1黒色砂混粘土 |
| 5 2.5Y3/1黒褐色砂質土 | 19 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 | 33 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土 |
| 6 2.5Y3/2黒褐色粘土 | 20 5Y3/1オリブ黒色粘土(φ3cm礫・炭化物混) | 34 5Y3/1オリブ黒色砂混粘質土 |
| 7 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土(炭化物混) | 21 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 | 35 2.5Y3/2黒褐色粘土 |
| 8 5Y3/1オリブ黒色砂混粘質土(炭化物混) | 22 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 | 36 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 |
| 9 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 | 23 5Y3/2オリブ黒色砂混粘質土 | 37 2.5Y3/2黒褐色粘質土 |
| 10 5Y2/2オリブ黒色粘土 | 24 5Y3/1オリブ黒色粘土 | 38 5Y3/1オリブ黒色砂質土 |
| 11 2.5Y2/1黒色砂混粘質土 | 25 2.5Y3/1黒褐色粘質土 | 39 2.5Y3/2黒褐色砂質土(φ3cm礫混) |
| 12 2.5Y3/2黒褐色粘土 | 26 5Y2/1黒色粘土 | 40 2.5Y3/1黒褐色砂質土 |
| 13 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土 | 27 5Y3/2オリブ黒色粘土 | |
| 14 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土 | 28 5Y4/2灰オリブ色砂質土 | |

図10 建物1実測図 (1:100)

は、礫下層上面よりも2cm程度上で幅約8cmの板片を確認した(図11 西壁断面図参照)。礫上層を敷く際の木枠の横板と考えられる。この板片は、厚さ0.1mmと残存状態が悪く、西辺にのみ部分的に認められた。また地業堀形の底面には、地業の西辺中央と南側、東辺南側の3箇所、礫下層の礫より一回り大きい約30cmの石(石1~3)がそれぞれ平らな面を上にして据えられていた(図12)。石1と相対する位置である地業の東辺中央には、大きな石を据えていなかったが、南北6cm、東西3cmの角材が地面に突き刺さった状態で立っていた。石1~3は、整地土(第II層)を掘り込

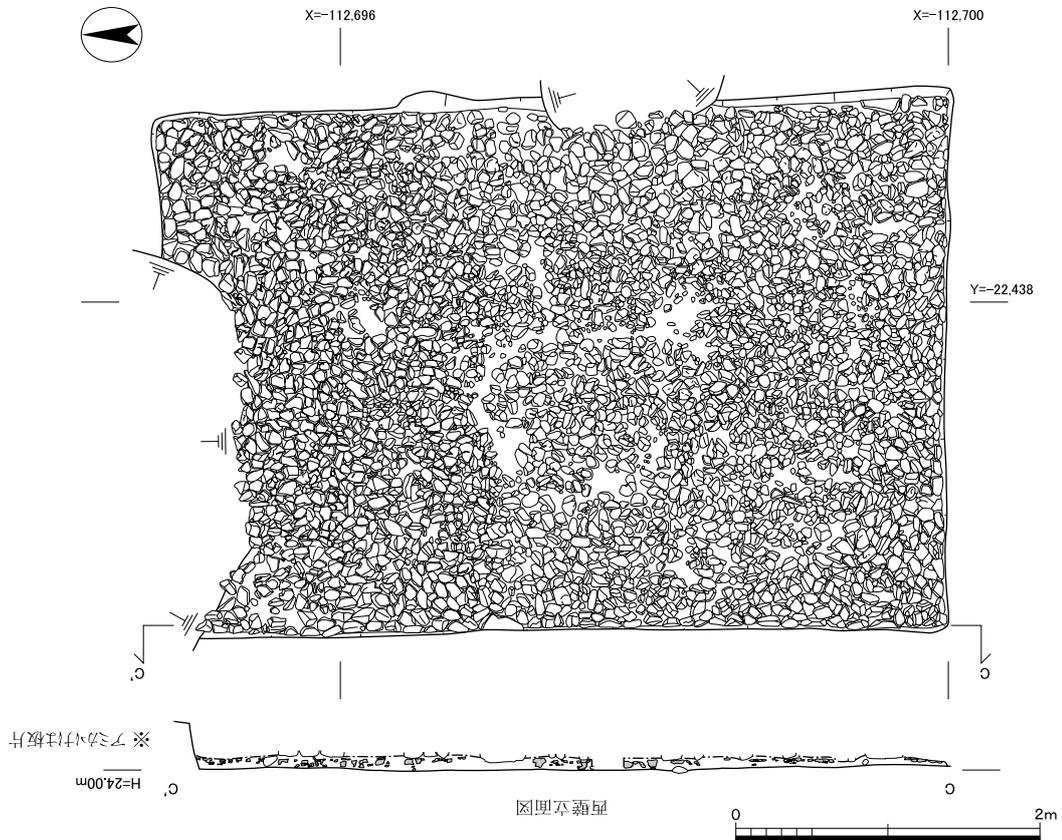
礫上層



※ アミかけは礫

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 2.5Y4/1黄灰色砂混粘質土 | 4 5Y3/2オリーブ黒色中砂、粘土ブロック |
| 2 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土 (φ5cm礫多量混) | 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 |
| 3 10YR3/1黒褐色砂混粘土 (φ5cm礫多量混) | |

礫下層



※ アミかけは板片

西壁立面図

図11 地業155実測図 (1 : 50)

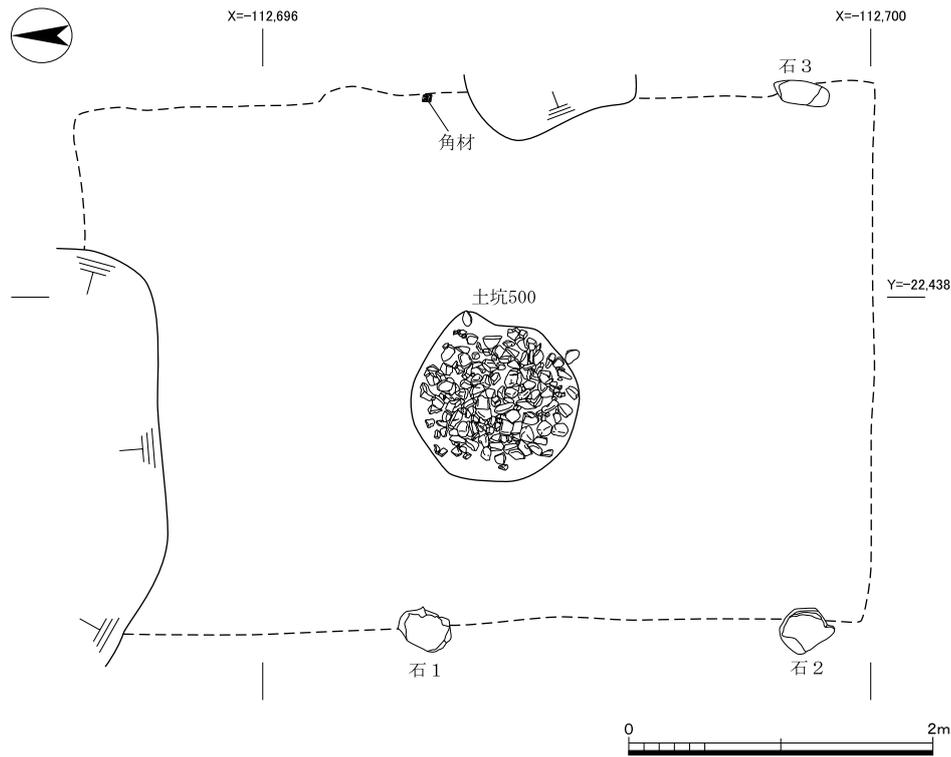


図12 地業155底面平面図（1：50）

み、地業範囲より外側に半分はみ出すように据えられていた。これらの3石及び角材に伴う遺構や遺物は検出できなかったため、機能については不明である。

地業掘形のほぼ中央には、直径約1mの土坑500を検出した。土坑500には、直径約80cm、高さ約10cmの曲物を正位置で据え付け、内部を礫と土とで埋め戻していた。地業の排水の役割をしたと考えられる。

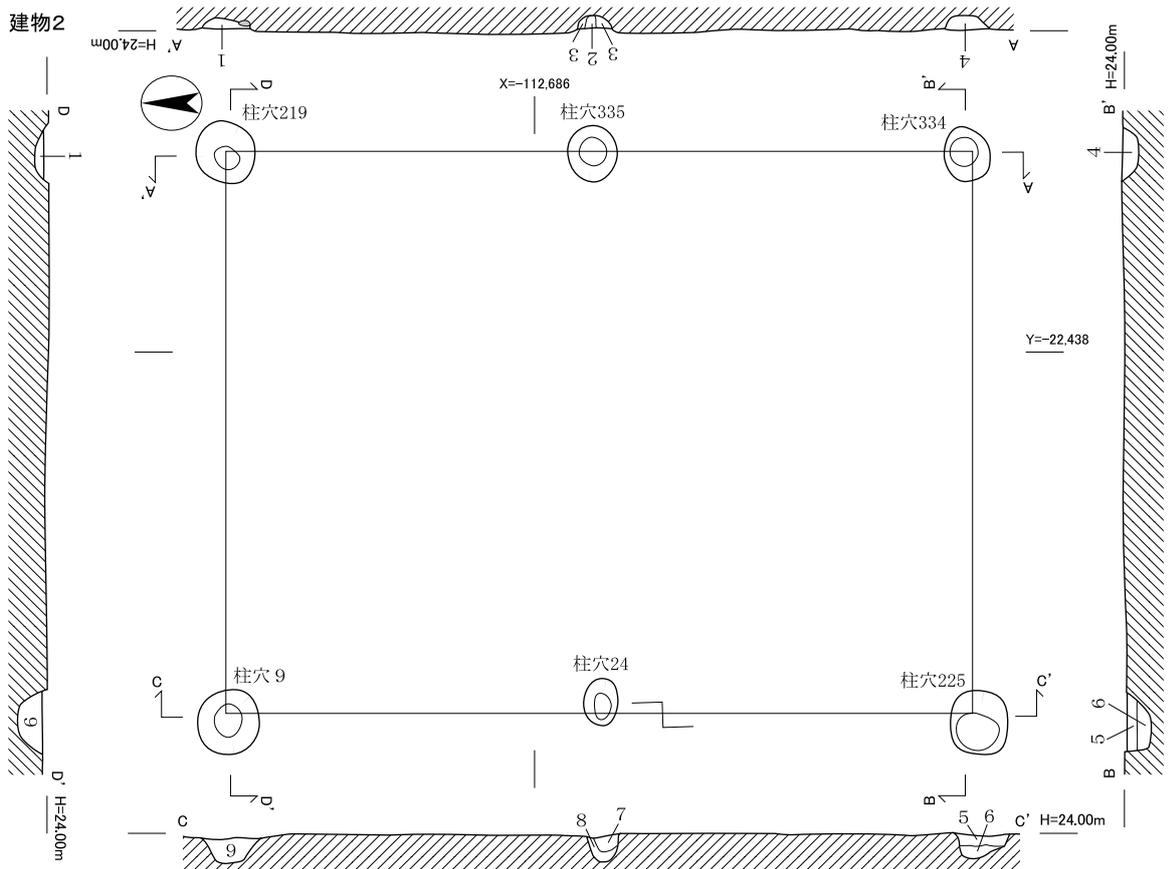
以上から、この地業は①整地土を地業の範囲分掘り込み、②土坑500を掘削し、③整地土を掘り込んで石1～3を設置し、④礫を比較的丁寧に敷いた（礫下層）後、⑤木柵を設置し、⑥さらにもう1段礫を敷いた（礫上層）とみられる。そして礫上層の上には、⑦盛土がなされたと推測できる。

また建物1の中央以西、地業155の西側には調査区一帯を造成した第Ⅱ層の整地層とは異なる整地土を確認した（図10）。地業155西辺から西2.7mまでは第Ⅲ層の砂礫層直上に、厚さ0.1mほどのオリブ黒色砂礫を堅固に突き固めていた。その上には黄灰色粘質土が一部に認められた。さらに地業155西辺の西2.7mラインから西6.2mまでの東西3.5m範囲には、にぶい黄褐色極細砂が0.02～0.03mの厚さで敷かれていた。

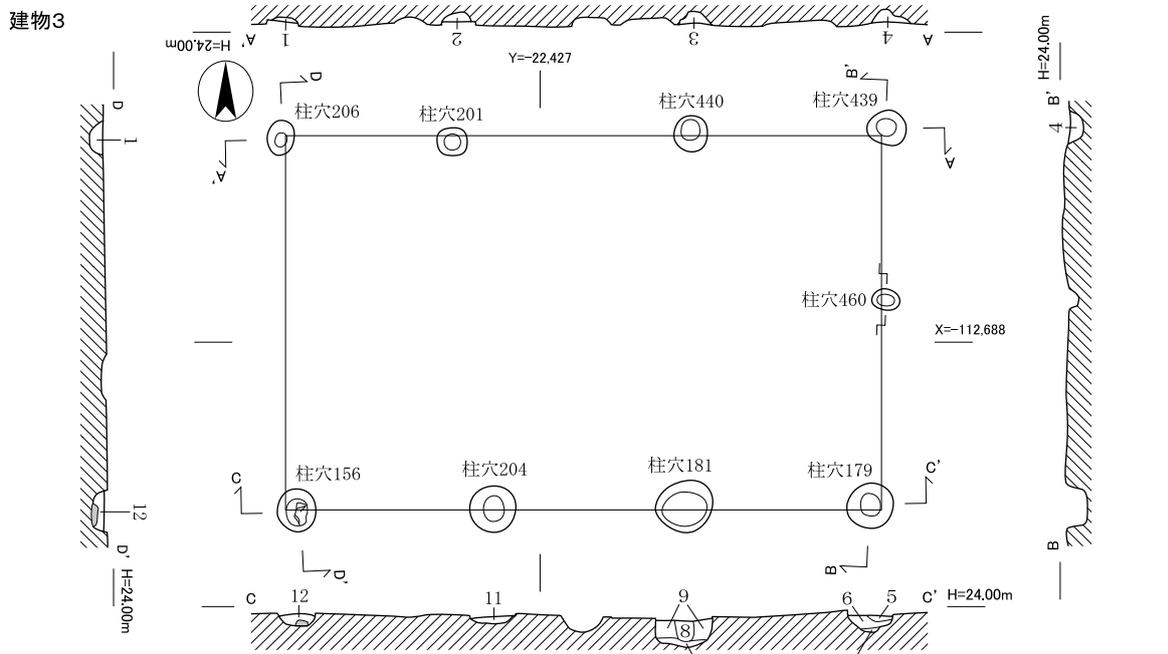
なお、建物1の上部構造と性格については、「5. まとめ（2）建物1の上部構造と性格」で考察する。

建物2（図13） 調査区北側中央で検出した東西1間、南北2間の掘立柱建物である。柱穴掘形は直径0.25～0.4mの円形を呈し、深さは0.1～0.2m、柱間は東西3.8m、南北2.4mである。建物2は、建物1と建物の東辺をほぼ揃えて南北に並ぶ。柱穴からは12世紀後半の土師器皿が出土した。

建物3（図13） 調査区北東部で検出した東西3間、南北2間の掘立柱建物である。柱穴掘形は

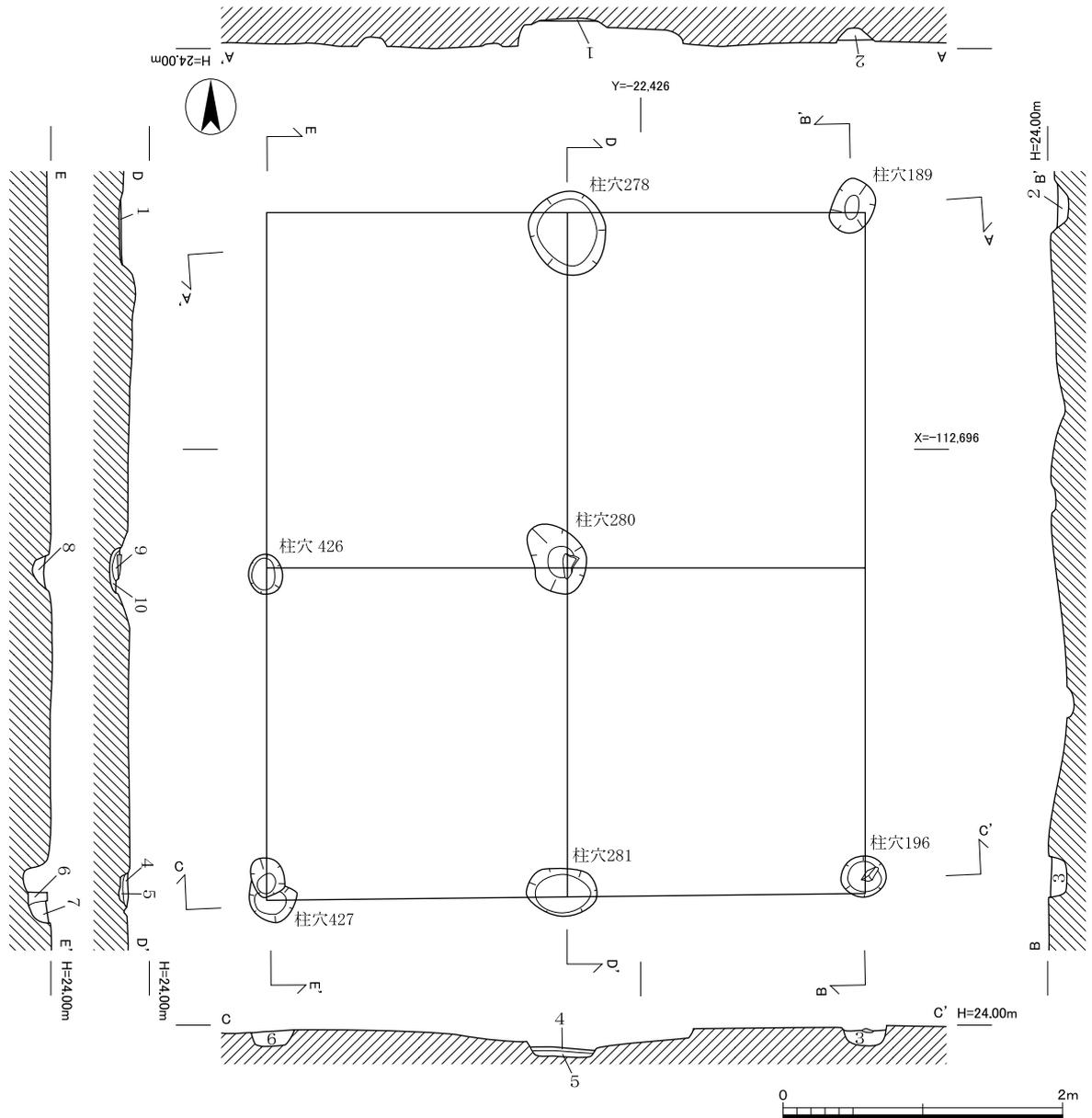


- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂混粘質土 | 4 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 |
| 2 2.5Y4/1黄灰色砂混粘質土
(炭化物・土器片混) | 5 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土 |
| 3 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土 | 6 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 |
| | 7 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土 |
| | 8 2.5Y6/1黄灰色砂質土 |
| | 9 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土 |



- | | |
|---|---|
| 1 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土 | 7 5Y2/2オリーブ黒色粘土混細砂 |
| 2 2.5Y3/1黒褐色粘土
(2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土ブロック混) | 8 2.5Y3/2黒褐色極細砂混粘土(土器片混) |
| 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 | 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂混粘土
(φ5cm礫・土器片・炭化物片混) |
| 4 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土(炭化物片混) | 10 5Y2/2オリーブ黒色粘土 |
| 5 2.5Y3/2黒褐色粘土 | 11 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土(粘性強・土器片・炭化物片混) |
| 6 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土(土器片・炭化物片混) | 12 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土(粘性強・土器片・炭化物片混) |

図13 建物2・3実測図(1:50)



- | | | |
|------------------------|---------------------|----------------------|
| 1 2.5Y4/2暗灰黄色砂混シルト | 5 10YR4/2灰黄褐色極細砂混粘土 | 9 2.5Y3/1黒褐色極細砂混粘土 |
| 2 2.5Y3/2黒褐色粘土(土器片混) | 6 5Y3/2オリーブ黒色砂混粘質土 | 10 10YR4/2灰黄褐色極細砂混粘土 |
| 3 2.5Y3/2黒褐色粘土混砂質土 | 7 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土 | |
| 4 10YR3/1黒褐色砂混粘土(炭化物混) | 8 2.5Y3/2黒褐色粘土 | |

図14 建物4実測図(1:50)

直径0.2~0.3mの円形を呈し、深さは0.05~0.2m、柱間は1.2~1.5mである。とくに北辺の柱穴は非常に浅く、後世の削平を大きく受けていると考えられる。建物3は、建物2と建物の南辺をほぼ揃えて東西に並ぶ。

建物4 (図14) 調査区中央東寄りで検出した東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は直径0.3~0.5mの円形を呈し、深さは0.1~0.2m、柱間は東西2.1m、南北2.4mである。建物4は、建物3と東西の幅がほぼ同一で、建物の中軸を揃えて南北に並ぶ。

塀5 (図15) 調査区東側で検出した南北方向の柱穴列である。建物4の東辺から0.4mの位置で、南北に並ぶ柱穴4基を確認したが、中央の柱穴2基は検出することはできなかった。本来は少

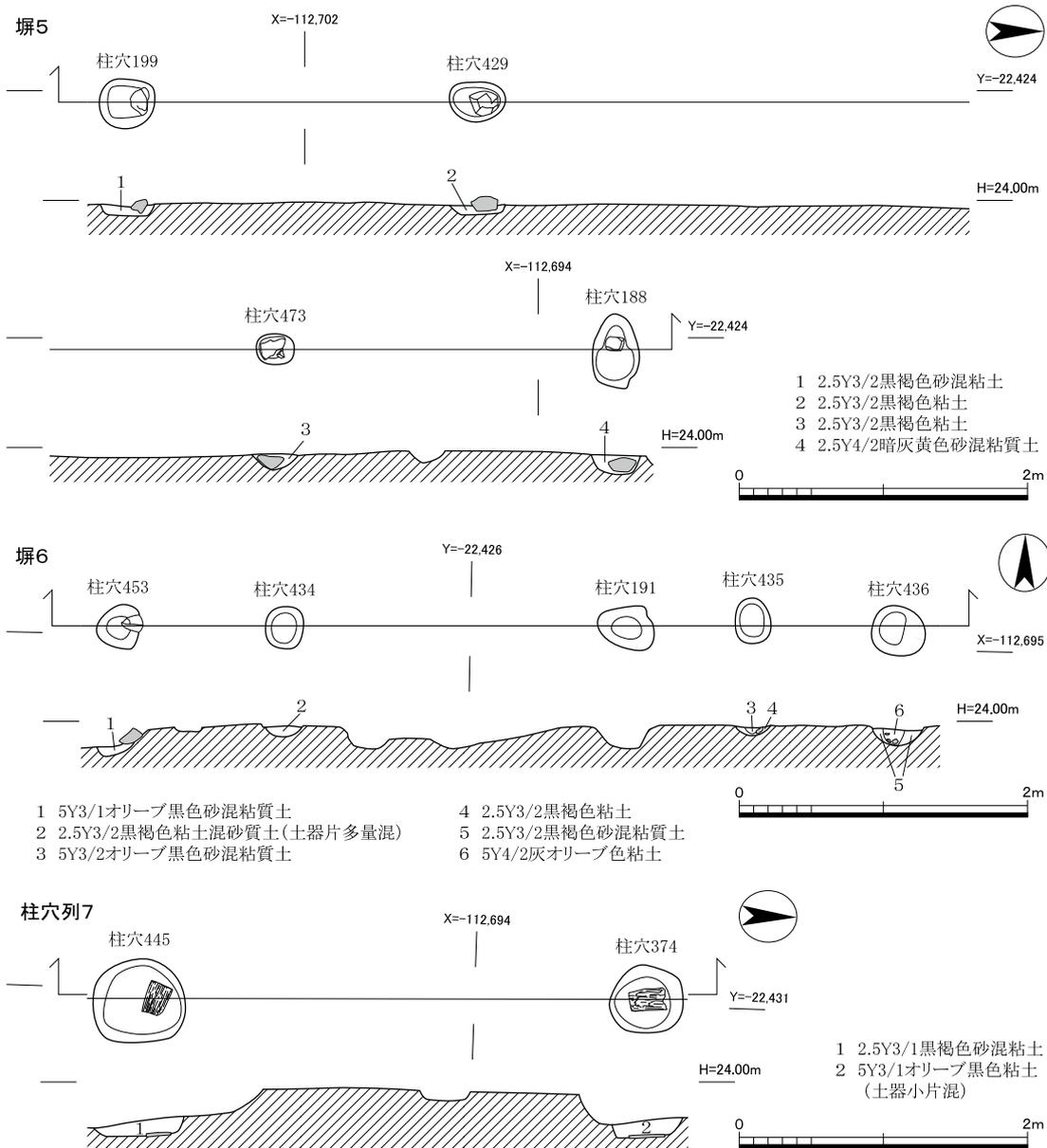


図15 塀5・6・柱穴列7実測図(1:50)

なくとも6基の柱穴が存在したと推測する。柱穴掘形は直径0.3～0.5mの円形を呈し、深さは0.1m、柱間は2.4mである。すべての柱穴内には検出面で拳大の礫が確認できた。

塀6(図15) 調査区東側で検出した東西南北方向の柱穴列5間分である。柱穴掘形は直径約0.3mの円形を呈し、深さは0.1m、柱間は0.9～1.1mである。建物4及び塀5と重複して検出したが、柱穴は重複していないため、遺構から先後関係を知ることはできない。

柱穴列7(図15) 調査区で検出した中央で南北に並ぶ柱穴列である。柱穴掘形は直径0.5～0.6mの円形を呈し、深さは約0.15m、柱間は3.4mである。これらの柱穴の底面には、長さ20cm、幅15cmほどの板材を敷いていた。柱の地盤沈下を防ぐための礎板と考えられる。この柱穴列は塀または建物の一部とみられるが、周囲にこれらと組み合う柱穴を確認することができなかった。また北側の柱穴374は土坑157の底面で検出した。柱穴374からは、瓦器椀が出土した。

ピット22 (図9) 調査区中央の井戸314と重複して検出した。東西0.4m、南北0.3mの東西にやや長い隅丸方形を呈し、深さは約0.05mである。検出状況から、ピット22は井戸314よりも新しいといえる。埋土からは、金銅製玉が出土した。

ピット341 (図9) 調査区北側中央の建物2の北側で検出したピットである。直径0.4mの円形を呈し、深さは約0.2mである。埋土からは、砥石が出土した。

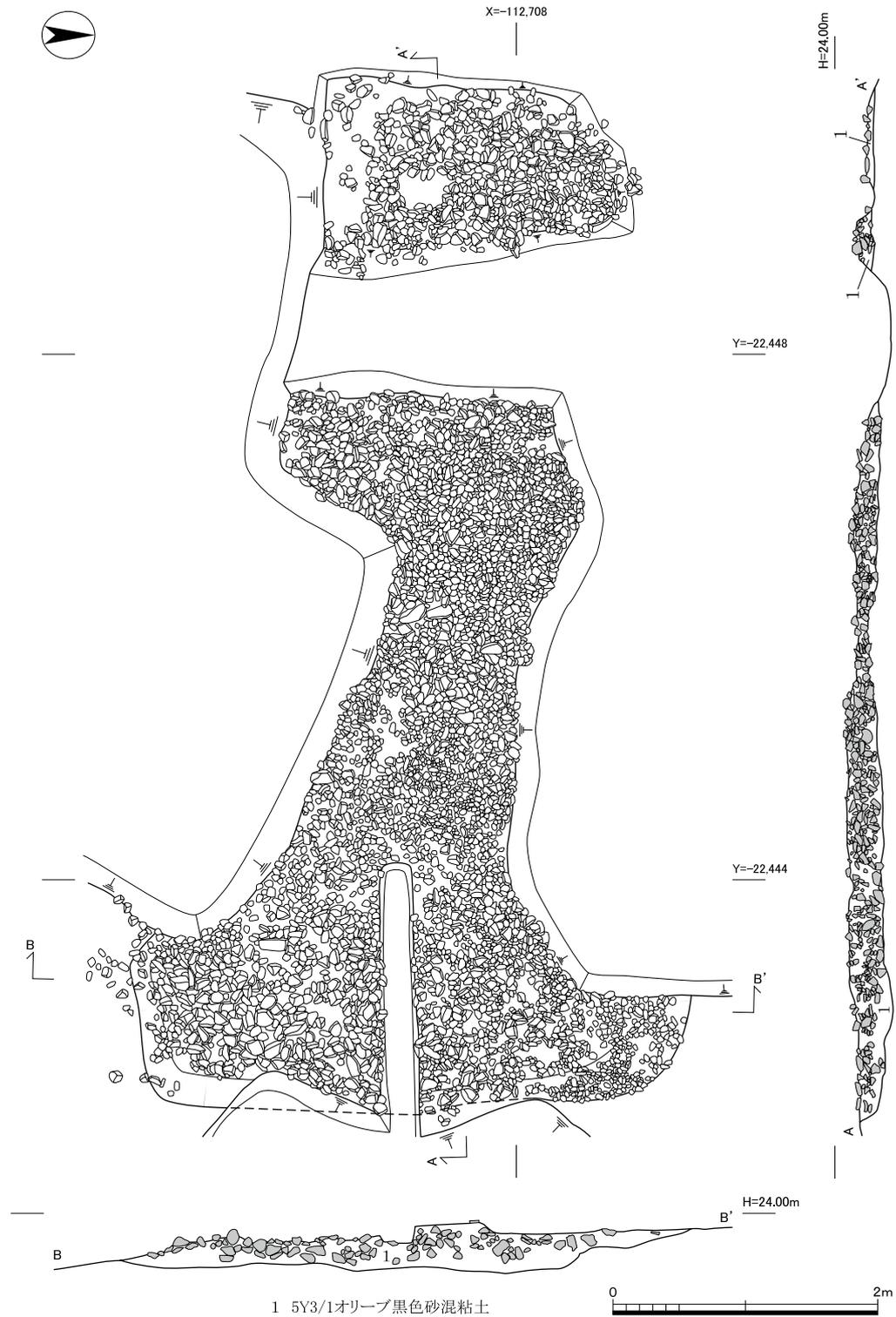


図16 地業370実測図 (1 : 50)

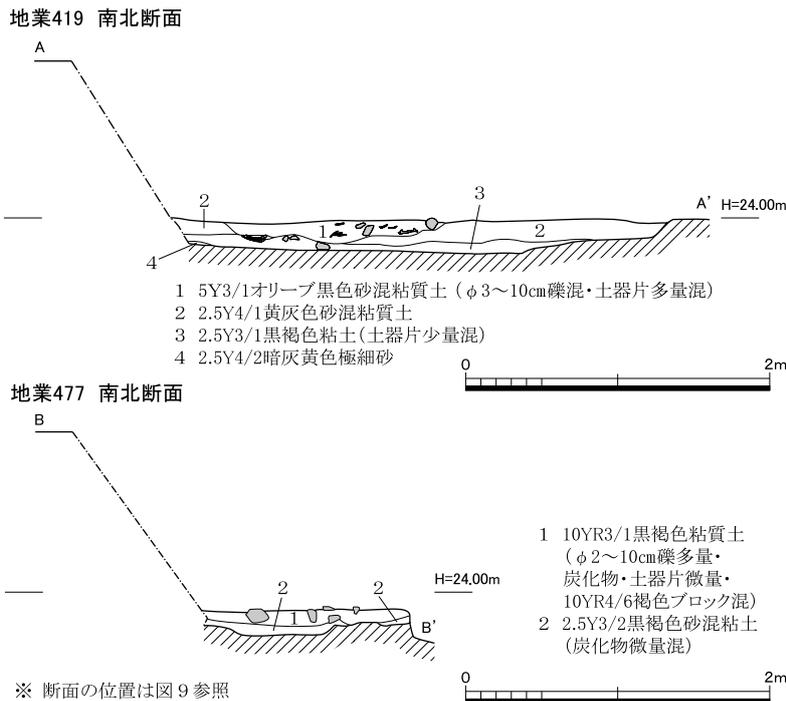


図17 地業419・477土層断面図(1:50)

地業370(図16、図版5-1) 調査区西側で検出した建物の基礎地業である。地業の北東隅、東辺、南東隅を検出したが、西辺は近現代の攪乱による削平のために、確認できなかった。また北辺、南辺も、東端付近を除き、大きく削平を受けている。地業370は南北3.4m、東西7.8m以上の方形と想定する。整地層(第Ⅱ層)を深さ0.2m掘り込み、5~10cmの礫を2段ほど入れる。礫は面を揃えず無造作に詰められていた。埋土からは、主に13世紀末から14世紀前半の土師器が出土した。

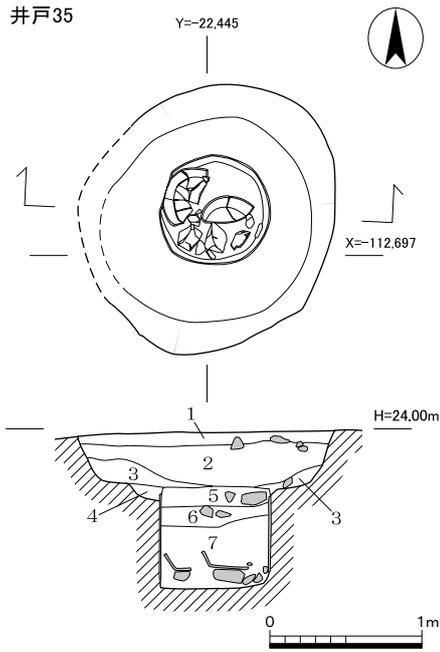
地業419(図17、図版5-2) 調査区南端東側で検出した建物の基礎地業である。調査区内では、地業の南辺は調査区外に位置し、また東辺は近現代の攪乱による削平のために、地業の北辺と西辺のみ検出した。地業419は南北3.3m以上、東西7.3m以上の方形である。整地層(第Ⅱ層)を深さ0.2m掘り込み、土や礫で埋め戻す。埋め戻された土には大量の13世紀末から14世紀前半の土器片が混入していた。地業堀形の底面では、西辺近くに直径0.8mの土坑499を検出した。地業155に伴う土坑500と同様、土坑499の内部には曲物が正位置で置かれ、礫と土とで埋め戻す。この曲物はヒノキとみられる。土坑499からは、土器、種子、炭化米などが出土した。

地業477(図17、図版5-3) 調査区南端中央で検出した建物の基礎地業である。地業の北辺、東辺、西辺を検出したが、南辺は調査区外に位置するために確認できなかった。地業477は南北1.4m以上、東西7.2mの方形である。整地層(第Ⅱ層)を深さ0.2m掘り込み、地業419と同様に土器片が多く含まれた土や礫で埋め戻す。埋土からは、13世紀後半から14世紀初頭の土師器が出土した。

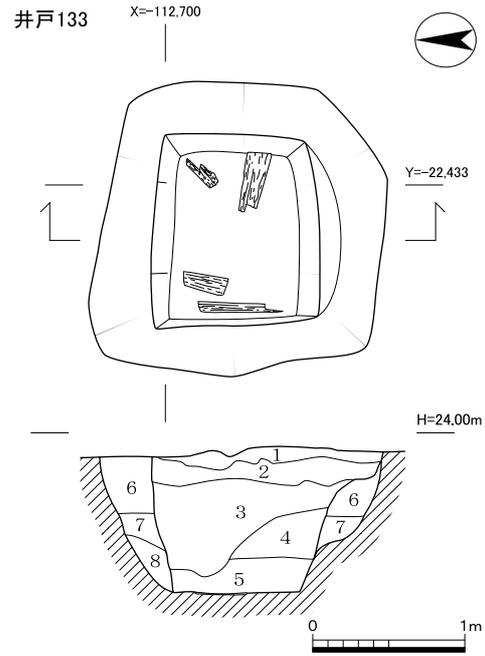
地業155・370・419・477のいずれにおいても、地業上面で建物の柱痕跡などは確認できなかった。これらは後世の削平により失われたと考えられる。

ピット461(図9) 調査区北東部の土坑171のすぐ南側で検出したピットである。直径0.4mの円形を呈し、深さは約0.1mである。このピットの検出面で拳大の礫を確認した。埋土からは、土錘が出土した。

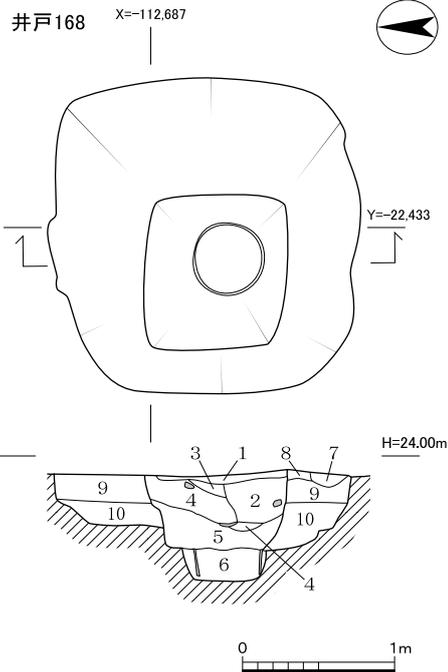
ピット462(図9) 調査区中央の建物1の東側で検出したピットである。東西0.25m、南北0.2mの東西にやや長い楕円形を呈し、深さは約0.1mである。埋土からは、瓦器椀が出土した。



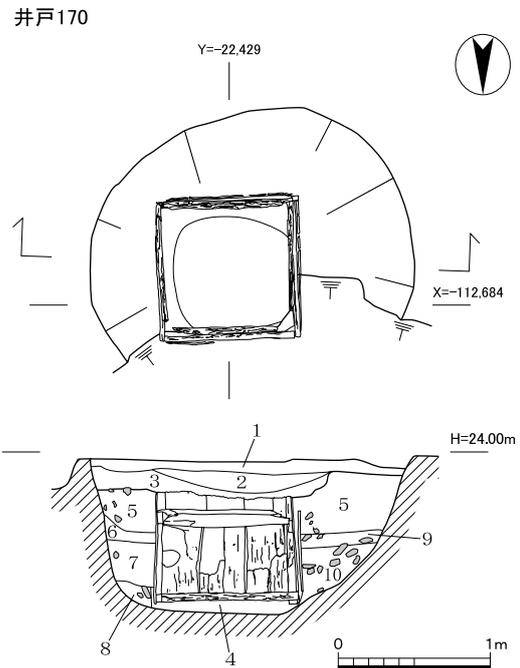
- 1 2.5Y3/2黒褐色砂質土
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂混砂質土(φ1~3cm礫多量混)
- 3 5Y3/1オリーブ黒色砂混砂質土
- 4 10YR3/1黒褐色粘土混中砂
- 5 7.5Y2/1黒色砂混粘質土(φ10cm礫混)
- 6 5Y3/1オリーブ黒色砂混粘土(φ10cm礫混)
- 7 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土混粗砂



- 1 5Y2/2オリーブ黒色砂混粘質土
- 2 5Y3/1オリーブ黒色砂混粘質土(炭化物混)
- 3 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土
- 4 5Y2/1黒色砂混粘土
- 5 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土
- 6 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土(φ5~10cm礫混)
- 7 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土(粘土ブロック混)
- 8 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質土(礫土器片混)
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘土(10YR2/2黒褐色細砂ブロック混)
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色砂混粘質土
- 4 10YR2/2黒褐色砂混粘土(φ3cm礫・炭化物混)
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土
- 6 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂混粘土
- 7 2.5Y5/1黄灰色粗砂(φ3cm礫多量混)
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂混粘土(炭化物混)
- 10 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土

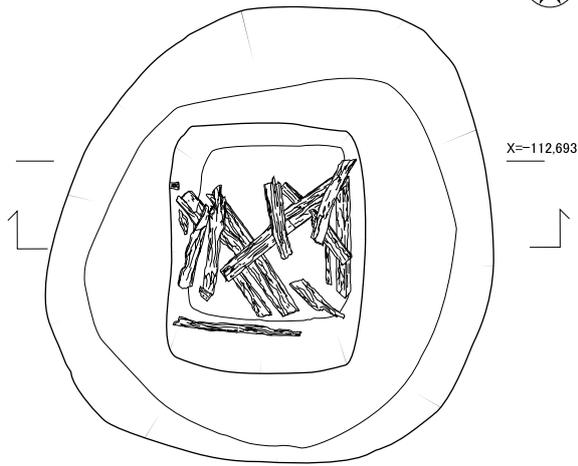


- 1 2.5Y3/2黒褐色粘土混砂質土
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂質土
- 3 2.5Y2/1黒色砂混粘質土(φ3~5cm礫多量混・土器小片混)
- 4 2.5Y3/1黒褐色粗砂混粘質土
- 5 2.5Y4/1黄灰色砂混粘土
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂
- 7 10YR3/1黒褐色粘土混砂質土
- 8 10YR3/2黒褐色砂質土
- 9 10YR3/1黒褐色粘土混砂質土
- 10 10YR3/2黒褐色粘土ブロック混砂質土(φ5cm礫混)

図18 井戸35・133・168・170実測図(1:50)

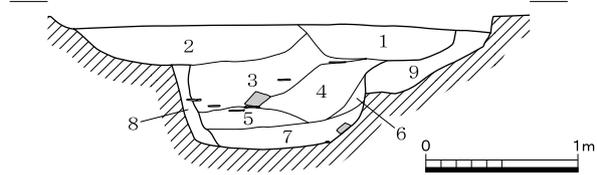
井戸314

Y=-22,436



X=-112,693

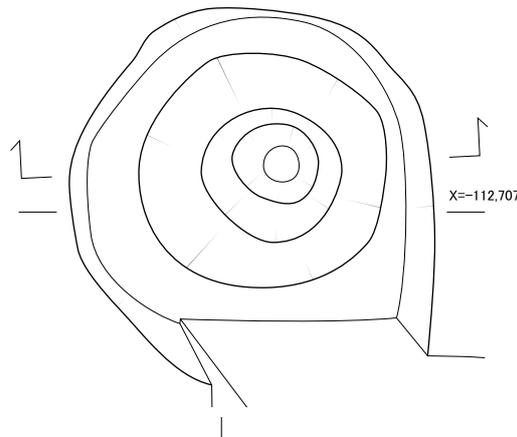
H=24.00m



- 1 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土(φ1~5cm礫多量混)
- 3 2.5Y3/1黒褐色礫混粘土(φ1~5cm礫多量混)
- 4 2.5Y3/2黒褐色砂混粘土
- 5 2.5Y3/1黒褐色粗砂(粘土ブロック混)
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂(2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック混)
- 7 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂(2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック・礫混)
- 8 2.5Y3/1黒褐色粘土
- 9 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土

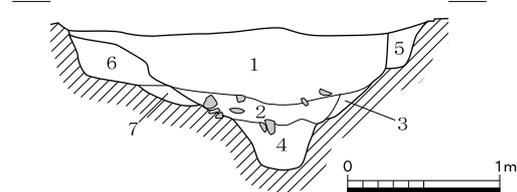
井戸371

Y=-22,440



X=-112,707

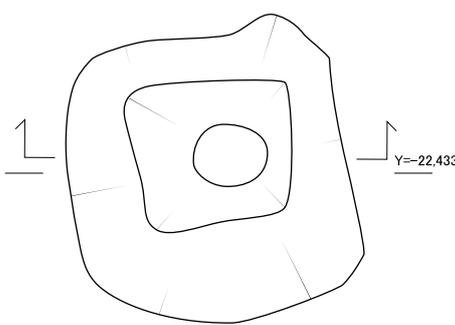
H=24.00m



- 1 10YR3/1黒褐色砂混粘質土
(φ3cm礫・土器片・φ3~5cm粘土ブロック混)
- 2 2.5Y3/2黒褐色粗砂混粘土
- 3 5Y3/1オリーブ黒色砂混粘土(φ2cm礫混)
- 4 2.5Y4/1黄灰色粘土混粗砂
- 5 10YR3/2黒褐色砂混粘土
- 6 10YR3/1黒褐色砂混粘土
- 7 5Y4/1灰色砂混粘土(φ2cm礫混)

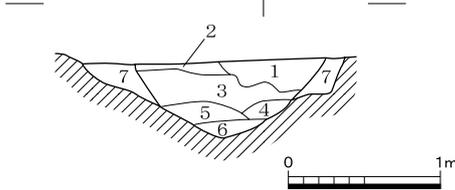
井戸392

X=-112,691



Y=-22,433

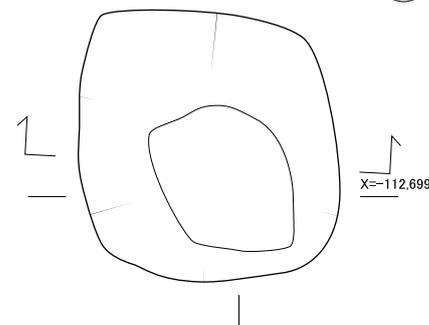
H=24.00m



- 1 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土
- 2 2.5Y3/2黒褐色粘土混砂質土
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂混粘土
- 4 2.5Y3/1黒褐色粘土
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土混極細砂
- 7 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土

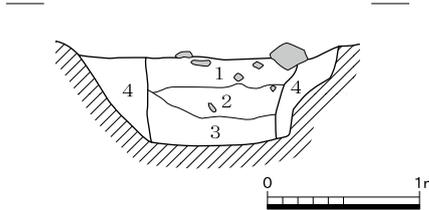
井戸394

Y=-22,421



X=-112,699

H=24.00m



- 1 5Y3/2オリーブ黒色砂混粘質土(φ3~10cm礫混)
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土(φ3~10cm礫混)
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土
- 4 2.5Y3/1黒褐色粘質土

図19 井戸314・371・392・394実測図(1:50)

井戸35 (図18、図版6-1) 調査区中央の西寄りで検出した井戸である。建物1の西辺の柱列に近接する。掘形は直径1.7mの円形で、深さは約1m、内部には直径0.7m、高さ0.55mのクスノキの一本を削り抜いて井筒としていた。井戸枠内の底面で、約20cmの自然石を数石と瓦器火鉢を検出した。埋土からは、13世紀末から14世紀前半の土器が出土した。

井戸133 (図18) 調査区中央で検出した井戸である。掘形は一辺1.9mの隅丸方形で、深さは0.9m、井戸枠は遺存していなかったが、底面に井戸枠の側板とみられる板片を確認した。井戸133・168・392は南北にほぼ直線状に並ぶ。埋土からは、14世紀前半の土師器やモモの種子2個が出土した。

井戸168 (図18) 調査区中央の北寄りで検出した井戸である。掘形は一辺2mの隅丸方形で、井戸枠は遺存していなかった。底部には直径0.4m、高さ0.2mの曲物が水溜め用に据えられていた。検出面から底部までの深さは0.8mである。埋土からは13世紀後半から14世紀初頭の土師器皿や瓦質土器の羽釜、滑石製鍋が出土した。

井戸170 (図18、図版6-2) 調査区北端で検出した井戸である。掘形は直径2.1mの円形で、深さは1.1m、掘形の北端は現代の攪乱により消失している。掘形の内部には一辺約0.9m、高さ0.7~0.8mの方形縦板横棧組の井戸枠が遺存していた。井戸枠内の下半では、5~30cmの自然石を大量に検出した。埋土からは、13世紀後半から14世紀初頭の土師器皿や施釉陶器、瓦質土器の羽釜が出土した。

井戸314 (図19) 調査区中央で検出した井戸である。掘形は南北3m、東西2.8mの南北にやや長い楕円形で、深さは0.9m、井戸枠は遺存していなかったが、井戸枠の側板とみられる板片を多数確認した。井戸314は、建物1の北東隅の柱穴及び地業155と重複している。平面や土層断面の状況から、井戸314は建物1より古いといえる。埋土からは、12世紀前半から後半の土師器や、ネズミなどによる食痕がみられるモモの種子1個が出土した。

井戸371 (図19、図版5-4) 調査区南端の中央で検出した井戸である。掘形は2.5mの不整円形で、深さは1m、井戸枠は遺存していなかった。埋土からは、14世紀前半の土師器皿や軒瓦などが出土した。

井戸392 (図19) 調査区中央で検出した井戸である。掘形は一辺2mの隅丸方形で、深さは0.6m、井戸枠は遺存していなかった。埋土からは、12世紀後半から13世紀初頭の土器が出土した。

井戸394 (図19) 調査区中央の東寄りで検出した井戸である。掘形は一辺1.7~1.8mの隅丸方形で、深さは0.7m、井戸枠は遺存していなかった。埋土からは、12世紀後半から13世紀初頭の土

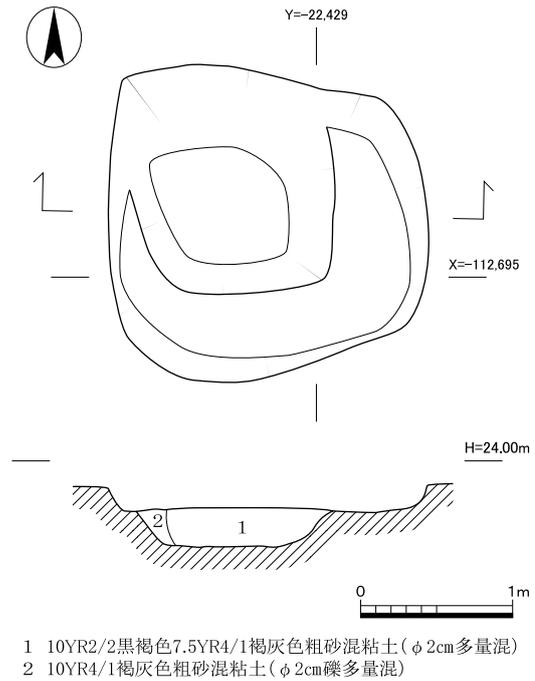


図20 井戸494実測図 (1:50)

師器皿、輸入陶磁器などが出土した。

井戸494(図20) 調査区中央で検出した井戸である。掘形は一辺2.1mの隅丸方形で、深さは約40cm、井戸枠は遺存していなかったが、井戸枠の側板とみられる板片を確認した。埋土からは、12世紀後半から13世紀初頭の土師器皿、輸入青磁皿やモモの種子2個などが出土した。1個のモモの種子には、ネズミなどによる食痕がみられた。

なお、今回検出した井戸の深さは、いずれも検出面から0.8~1m(標高23.1~22.9m)と浅く、基盤層となる砂礫層(第Ⅲ層)から湧水していたようである。現在は、掘削した井戸底面の標高(標高23.1~22.9m)での湧水がみられないことから、古代の湧水レベルは現在よりも高かったと

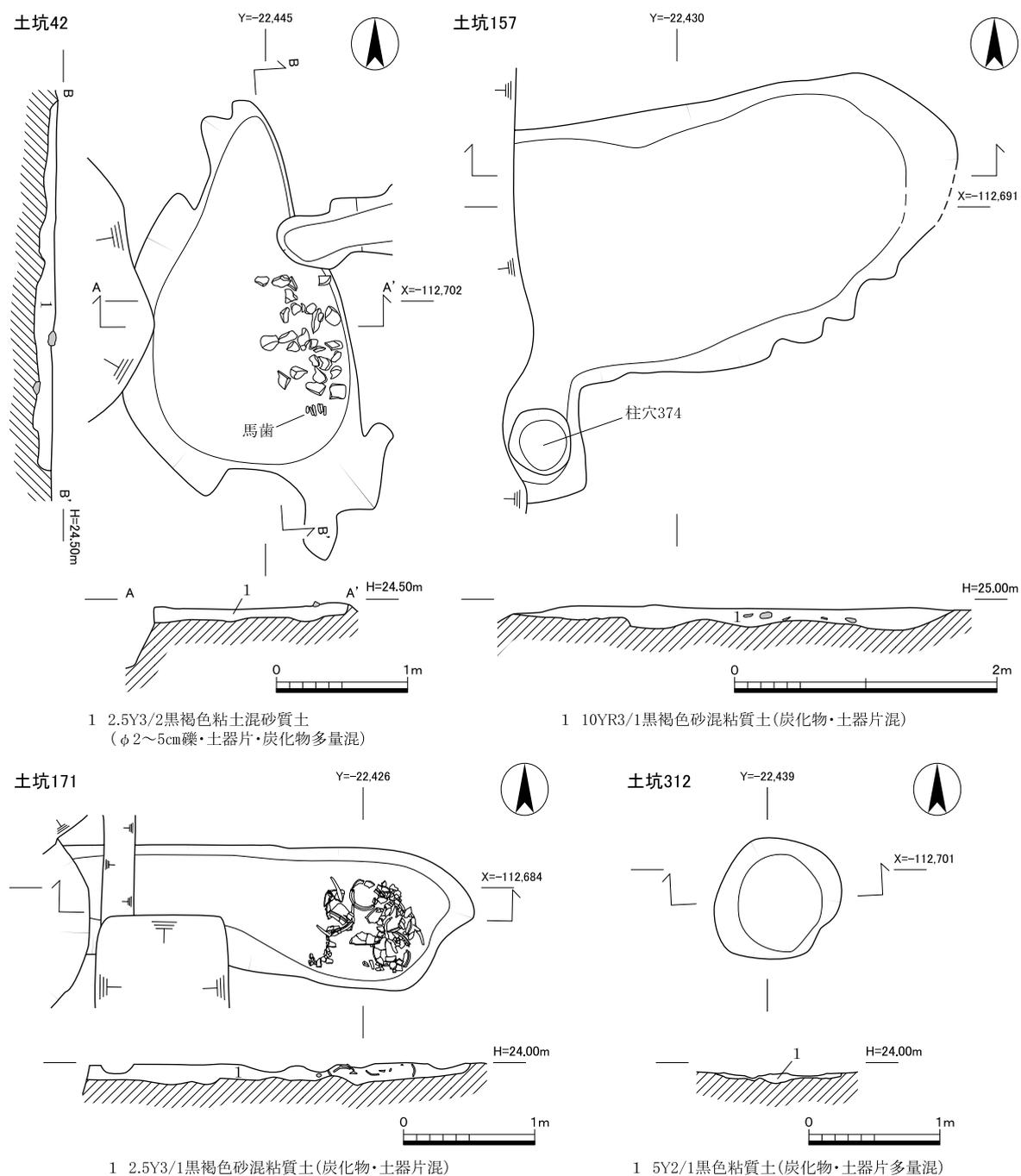


図21 土坑42・157・171・312実測図(1:50)

推測できる。

土坑42(図21) 調査区中央西寄りで検出した土坑である。東西1.5m、南北2.8mの不整円形で、深さは0.1mである。埋土からは、馬歯、13世紀後半から14世紀初頭の土師器皿、白色土器高杯が出土した。

土坑157(図21) 調査区中央で検出した土坑である。東西3.4m以上、南北1.8mの不整楕円形で、深さは0.15mである。土坑の西半は、後世の溝により削平される。土坑157の底面で柱穴374を検出した。埋土からは、12世紀末から13世紀前半の土師器皿が大量に出土した。

土坑171(図21) 調査区北端で検出した土坑である。東西3.1m以上、南北1.1mの東西に長い隅丸長円形で、深さは0.1～0.2mである。土坑171の西端は井戸170と重複して検出したが、平面や土層断面の状況から、土坑171は井戸170よりも古いといえる。埋土からは、12世紀後半から13世紀初頭の土師器皿や瓦質土器の三足付羽釜が6個体分出土した。

土坑312(図21) 地業155の南で検出した土坑である。東西1m、南北0.9mの不整円形で、深さは0.1mである。埋土は炭化物を非常に多く含む黒色粘質土である。埋土からは、13世紀後半から14世紀初頭の土師器皿が出土した。

土坑481(図9) 調査区中央南側の土坑41と重複して検出した土坑である。東西2m以上、南北1mで、深さは0.1mである。平面や土層断面の状況から、土坑481は土坑41よりも新しいといえる。埋土からは、白磁碗が出土した。

(5) 第1面の遺構(図22、図版1-1)

調査区西側で堀、調査区中央で素掘溝、堀より東側の調査区全体で多数の素掘小溝を検出した。

堀3(図23、図版1-2) 調査区西端で検出した南北方向に縦断する堀の東肩である。その検出位置から、安土桃山時代に造営された御土居の堀と断定した。堀の西肩は調査区外に位置する。堀とともに御土居を構成する土塁は、堀の西側に存在しており、こちらも調査区外に位置する。今回検出した堀の東西幅は8.5m以上、深さは約0.75mで、南北長は45mである。堀の埋土からは、主に17世紀から19世紀の染付、焼締陶器、施釉陶器などの土器類、漆器碗や人形、箸などの木製品が大量に出土した。また、堀の最上層から中層にかけて、ヒトやウシ、イヌ、ネコの骨が出土した。

出土遺物から、御土居の堀は17世紀前半には埋まり始め、明治時代には完全に埋没したと考えられる。また明治時代には、埋没した堀の上面に堀形幅1.5mの南北溝を掘削し、幅1mの側板を嵌め込み溝として利用していた。

溝80(図22) 調査区中央で検出した南北方向に縦断する溝である。溝の幅は0.6m、深さは0.2mである。埋土からは、土器や景德元寶や寛永通寶などの錢貨が出土した。

素掘小溝(図22) 堀3の東側で素掘小溝を多数検出した。堀の東側は御土居の外で、洛外にあたる。埋土からは、17・18世紀代の土器が出土した。

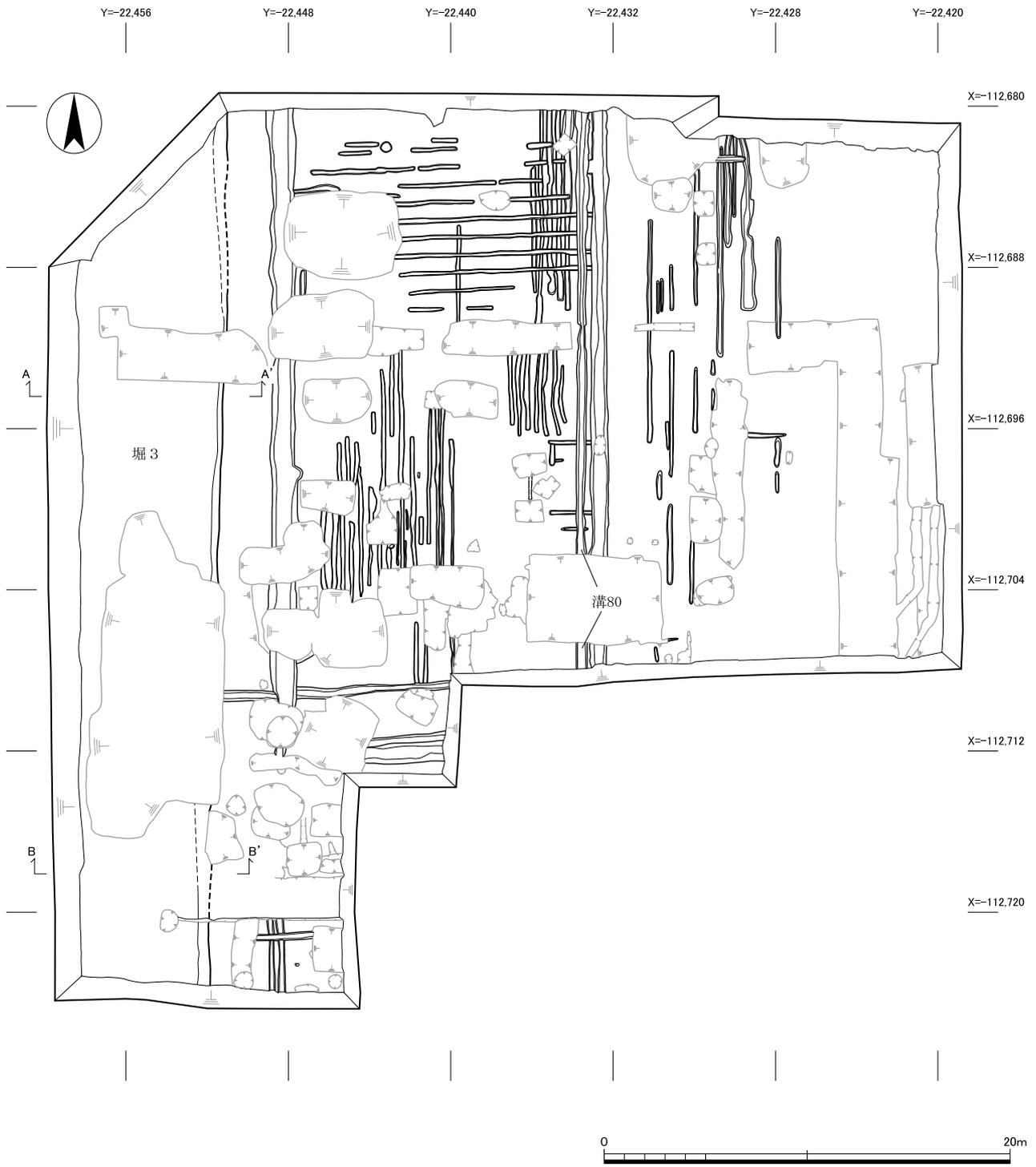


図22 第1面遺構平面図 (1 : 300)

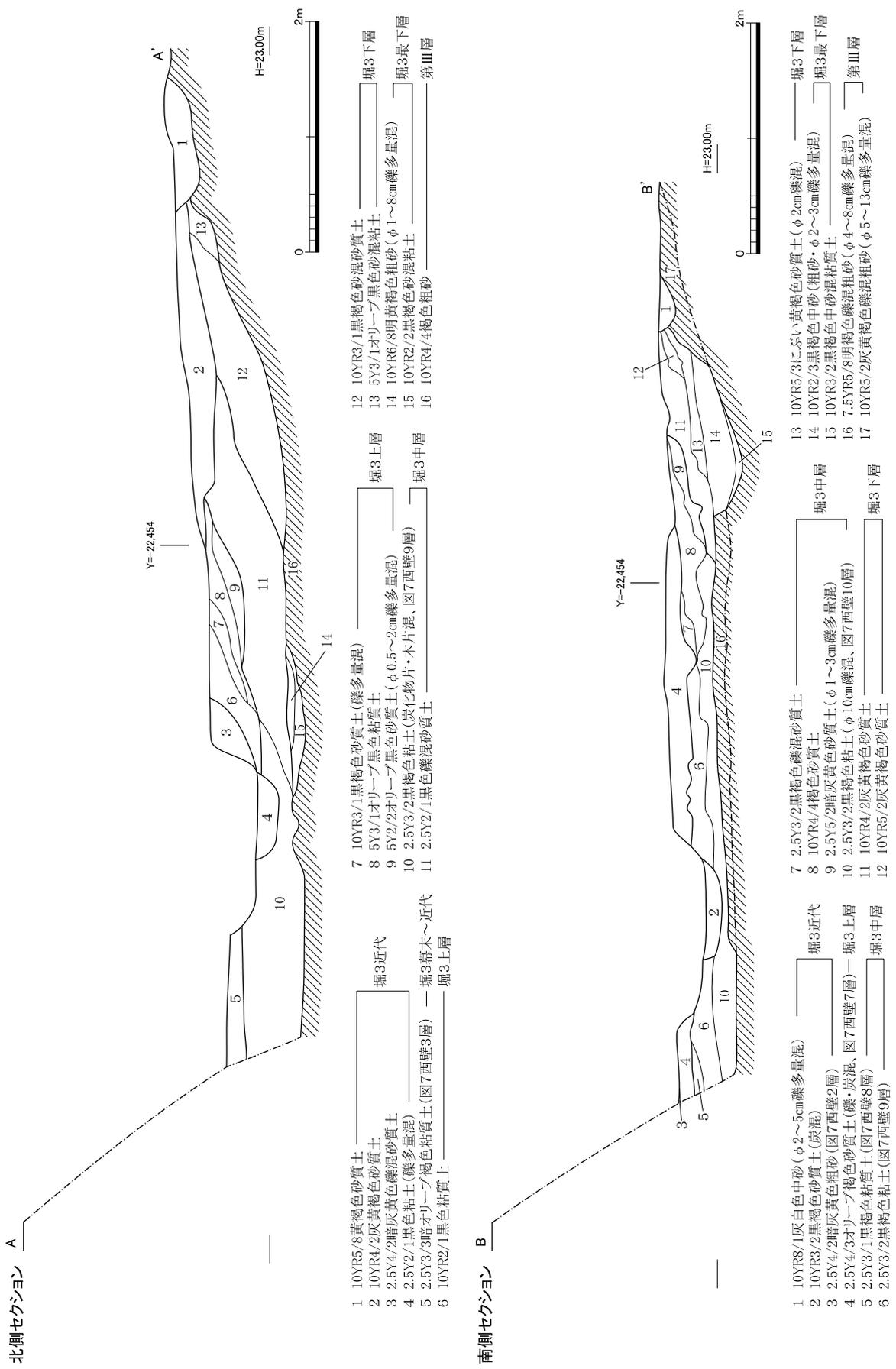


図23 堀3セクション土層断面図 (1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表4)

今回の調査では、遺物整理コンテナ92箱分の遺物が出土した。内訳は土器類・瓦類84箱、木製品6箱、金属製品1箱、骨1箱である。

今回検出した主な遺構の基盤層となる砂礫層(第Ⅲ層)からは、縄文土器、弥生土器、磨製石器が数点出土した。第Ⅲ層の上面(第3面)で検出した流路の埋土からは、9世紀初頭の土師器、須恵器などが出土した。

古代の整地層(第Ⅱ層)からは9世紀初頭や12世紀半ばの土師器、須恵器、施釉陶器や石帯が出土した。第Ⅱ層の上面(第2面)の遺構群からは12世紀後半から14世紀初頭の土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器・瓦などが出土した。

中近世の遺物包含層(第Ⅰ層)の上面(第1面)で検出した遺構からは主に近世の染付・焼締陶器、施釉陶器などの土器類、銭貨が出土した。とくに御土居の堀からは、漆器碗や人形、箸などの木製品が大量に出土した。

(2) 土器類 (図24～32、図版7～10)

1) 9世紀初頭の土器

流路501(図24-1～6、図版7) 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器などの8世紀末から9世紀初頭の土器が出土した。平安時代の初めに流路501を埋め戻したとみられる。

1は土師器杯B。口径16.7cm、器高6.0cmである。底部内面はミガキ、体部内面はナデ後ミガキ、

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品		石製品1点		
9～11世紀	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土製品、銭貨、骨		土師器4点、須恵器2点、土製品1点、銭貨4点		
12～14世紀	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器、土製品、瓦、石製品、金属製品、木製品、骨、種子		土師器195点、須恵器6点、黒色土器2点、瓦器19点、緑釉陶器1点、灰釉陶器1点、輸入陶磁器8点、土製品6点、瓦20点、石製品5点、金属製品3点、木製品1点		
17世紀	土師器、磁器、染付、焼締陶器、輸入陶器、瓦、土製品、銭貨、木製品、骨		土師器6点、染付1点、焼締陶器1点、銭貨1点、木製品25点		
合計		110箱	313点(18箱)	1箱	91箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より18箱多くなっている。

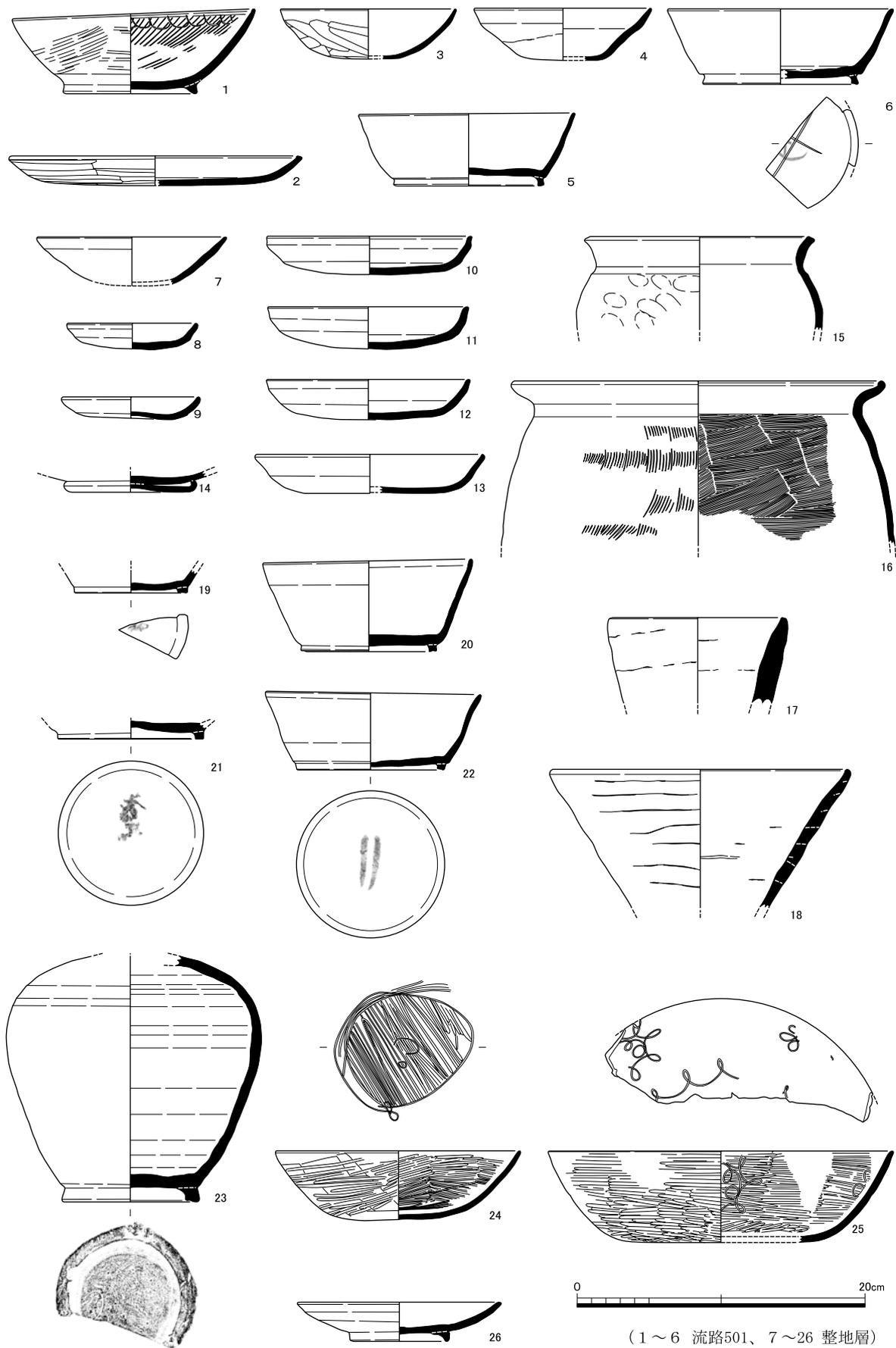


图24 流路501、整地層出土土器実測図（1：4）

口縁部ヨコナデ、外面はケズリの後やや右上がりのミガキを施す。内面には体部に放射状暗文を、口縁部に連弧状暗文を施す。河内産とみられる。底部には高台を貼り付ける。2は土師器皿L。口径19.9cm、器高2.1cmである。口縁部はヨコナデ、外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。口縁端部は内面にわずかに肥厚する。3は土師器椀A。口径12.1cm、器高3.5cmである。口縁部はヨコナデ、外面はヘラケズリ、内面はハケ目を施す。色調はにぶい橙色を呈す。胎土は径1mmの赤色粒子を含むものの、密である。4は土師器椀A。口径12.2cm、器高3.7cmである。外面には粘土紐の痕跡が確認できる。内面に煤が付着する。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。

5は須恵器杯B。口径14.9cm、器高5.1cmである。口縁端部は丸くおさめる。体部外面に一部自然釉が付着する。底部は焼成時に生じた焼き膨れがみられ、底部外面には粘土小塊が付着する。内外面ともに回転ナデを施し、底部ヘラ切り。胎土は非常に精緻で、焼成も良好である。6は須恵器杯B。口径15.6cm、器高5.3cmである。内外面ともに回転ナデを施し、底部はヘラ切り。底部外面には×と線刻した後、墨書する。

2) 12世紀半ばの土器

整地層(図24-7~26、図版7・8) 土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁などが出土した。19・22・25など、9世紀初頭の土器も入るものの、12世紀前半に整地を行ったとみられる。

7は土師器杯N。口径13.1cmである。口縁部から内面はヨコナデ、外面はオサエを施す。口縁部内面に煤が付着する。内面はにぶい黄橙色、外面は灰黄褐色を呈す。胎土には角閃石をよく含む。8~13は土師器皿N。これらは口径8.9~9.4cm、器高1.6~1.9cmの小型(8・9)と、口径12.6~15.7cm、器高2.7~3.0cmの大型(10~13)に分けられる。11は完形、9・10は口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。10は口縁端部を上方に摘み上げる。8・10は口縁部外面にヨコナデによる段が明瞭に確認できる。口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。11は径1mmの長石や雲母を、9は径1~3mmの白色・赤色砂粒を、10は径5mmの白色・赤色砂粒を、胎土によく含む。色調は8~10が灰白色を、11~13がにぶい黄橙~浅黄橙色を呈す。14は土師器皿Acとその上に別個体の皿Nとみられる土師器の底部が貼り付く。これらの土器は、焼成時に融着したと考えにくいため、皿Nとみられる土師器の底部に皿Acを故意に貼り付けたと考えられる。皿Acの口径は8.8cm、器高0.8cmである。口縁部が内側に屈曲する。口縁部はヨコナデ、底部外面はオサエを施す。色調は黄灰色を呈す。皿Nとみられる土師器の底部内面はナデで調整される。15・16は土師器甕。15は口径15.2cmである。ハケ目はなく、河内産とみられる。口縁部は外反し、口縁端部は面をつくる。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。色調は明赤褐色を呈す。16は口径25.4cmである。口縁部は外反し、端部を内側に屈曲させ丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、外面はハケ後ナデ、内面は右上がりハケ目を施す。色調は灰黄色を呈す。

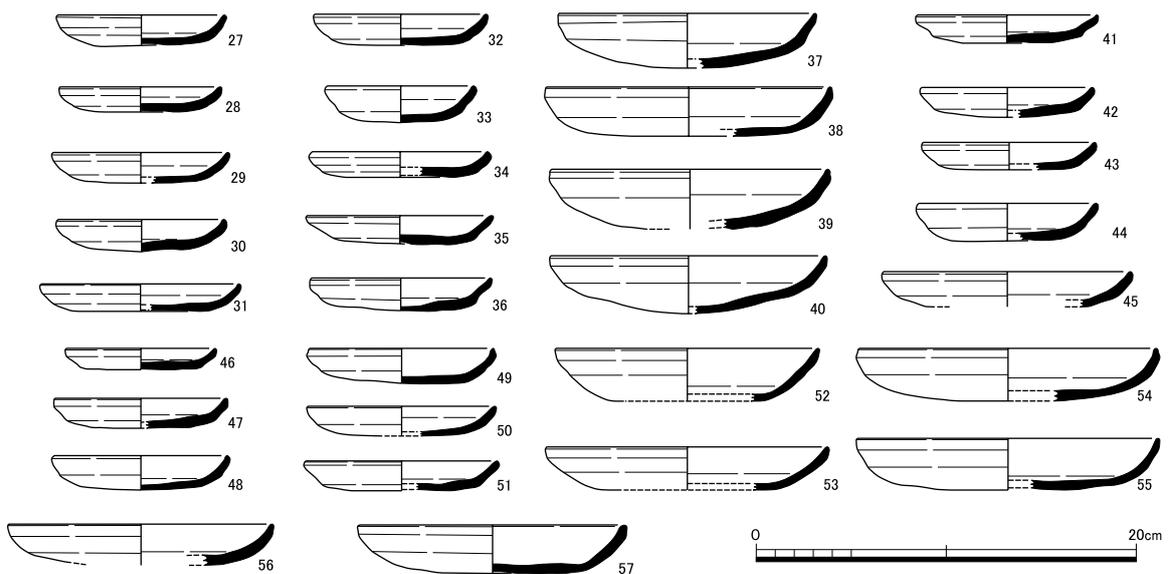
17は製塩土器。口径11.8cmである。内外面ともに粘土紐の痕跡を確認できる。内面はナデ、外面はオサエを施す。胎土は径2mmの長石・石英をよく含み、粗い。色調はにぶい黄橙色を呈す。18は製塩土器とみられる。口径20.4cmである。内外面ともに粘土紐の痕跡が明瞭に残る。口縁部がラッ

パ状に大きく開き、口縁端部はやや内湾する。内外面ともにナデ、口縁部はヨコナデを施す。色調はにぶい黄橙色を呈す。

19は須恵器杯Bの底部。底部外面に墨書が確認できるが、文字は解読困難であった。内外面ともに回転ナデを施し、底部ヘラ切り。色調は灰色を呈す。20は須恵器杯B。口径14.4cm、器高9.3cmである。内外面ともに回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。胎土には径2mmの長石をよく含む。色調は灰色を呈す。21は須恵器杯Bの底部。底径10.0cmである。底部及び高台のみ残存する。底部外面には墨の痕跡が確認できることから、硯として転用したとみられる。22は須恵器杯Bの底部。口径10.0cm、器高5.5cmである。底部外面中央には墨書がみられる。この墨書は、長さ3.3~3.5cm、幅0.3cmの直線を2本引く。内外面ともに回転ナデを施し、底部ヘラ切り。胎土は径1mmの長石をよく含むが非常に精緻である。23は須恵器長頸壺の体部。口縁部から頸部を欠損する。口縁から頸部は欠損するが、底部内面に直径約3.5cmの円形に自然釉が付着することから、口径も同程度と考えられる。肩部外面と底部内面に自然釉が付着する。高台は焼成時に粘土が付着、さらに全体的にゆがみが認められる。内外面ともに回転ナデ、見込み部は不定ナデを施し、底部は糸切り。胎土は非常に精緻で、色調は灰色を呈す。

24は黒色土器碗。外面はにぶい黄橙色、内面は黒色を呈す、いわゆる内黒である。口縁部ヨコナデ、外面はケズリ後に粗くミガキ、内面は横位からやや右上がりミガキを施す。見込み部は、斜方向のミガキとらせん状の暗文を施す。25は黒色土器碗。口径23.8cm、器高6.4cmである。口縁部外面には煤が付着する。内外面ともに横位ミガキを施す。底部内面にはらせん状暗文、体部には文様化したとみられるらせん状暗文を施す。

26は灰釉陶器皿。口径15.2cm、器高2.8cmである。灰白色の胎土をもつ器壁の内外面に、オリーブ黄色の釉を施す。見込み部中央には、底径とほぼ同じ直径6.7cmの円形状に釉がたまる。焼成時に、皿を重ねたとみられる。底部外面には墨の痕跡が確認できることから、硯として転用したとみ



(27~40 地業155、41~45 土坑500、46~55 井戸314、56・57 建物2)

図25 地業155、土坑500、井戸314、建物2出土土器実測図(1:4)

られる。

3) 12世紀半ばから13世紀前半の土器

地業155(図25-27~40、図版8) 土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、白磁、焼締陶器などの主に12世紀半ばから後半の土器が出土した。

27~40は土師器皿N。これらは口径7.7~10.4cm、器高1.3~2.0cmの小型(27~36)、口径13.5~14.8cm、器高2.6~3.2cmの大型(37~40)に分けられる。27~36は比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部断面は三角形を呈する。口縁部を2段にヨコナデし、底部内面は仕上げナデを施す。底部は無調整である。37~40は口縁部を2段にヨコナデする。色調は、いずれもにぶい黄橙色~灰黄色を呈す。

土坑500(図25-41~45) 土師器皿が出土した。

41~45は土師器皿N。41~44は口径9.0~9.3cm、器高1.5~2.0cmの小型である。比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部断面は三角形を呈する。口縁部を2段にヨコナデし、底部内面は仕上げナデを施す。底部は無調整である。45は口径13.0cm、器高1.9cmで、口縁部を2段にヨコナデした大型の皿である。色調は灰黄色を呈す。

井戸314(図25-46~55) 土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、青磁、白磁、焼締陶器などの主に12世紀前半から後半の土器が出土した。

46~55は土師器皿N。口径7.8~10.0cm、器高1.1~1.9cmの小型(46~51)、口径13.8~15.8cm、器高2.3~2.8cmの大型(52~55)に分けられる。54は内面見込み部に、49は口縁部内面の一部に煤が付着する。いずれも内面はナデ、外面は指オサエ、口縁部はヨコナデで調整する。色調は、50・53が灰白色、それ以外がにぶい黄橙~浅黄橙色を呈す。

建物2(図25-56・57) 柱穴から土師器皿が出土した。出土遺物は少ないが、これらは12世紀後半を示す。

56・57は土師器皿N。56は口径13.8cm、残存器高2.2cm、57は口径13.9cm、器高2.6cmである。57は口縁部を一部欠損するのみでほぼ完形である。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。56は雲母・赤色砂粒を、57は雲母を、胎土によく含む。色調はいずれもにぶい黄橙を呈す。

井戸494(図26-58~70) 土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、白磁などの主に12世紀後半から13世紀初頭の土器が出土した。

58~69は土師器皿。58は土師器皿Ac。口径8.7cm、器高1.5cmである。口縁部を内側に屈曲させる。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。59~69は土師器皿N。口径8.0~9.9cm、器高1.4~2.0cmの小型(59~64)と口径13.6~13.8cm、器高2.4~3.5cmの大型(65~69)に分けられる。比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。いずれも口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。色調はにぶい橙~にぶい黄橙色を呈する。

70は白磁皿。口径10.6cm、器高2.7cmである。口縁端部には切り込みを入れ、輪花形とする。色調は、胎土・釉ともに灰白色である。

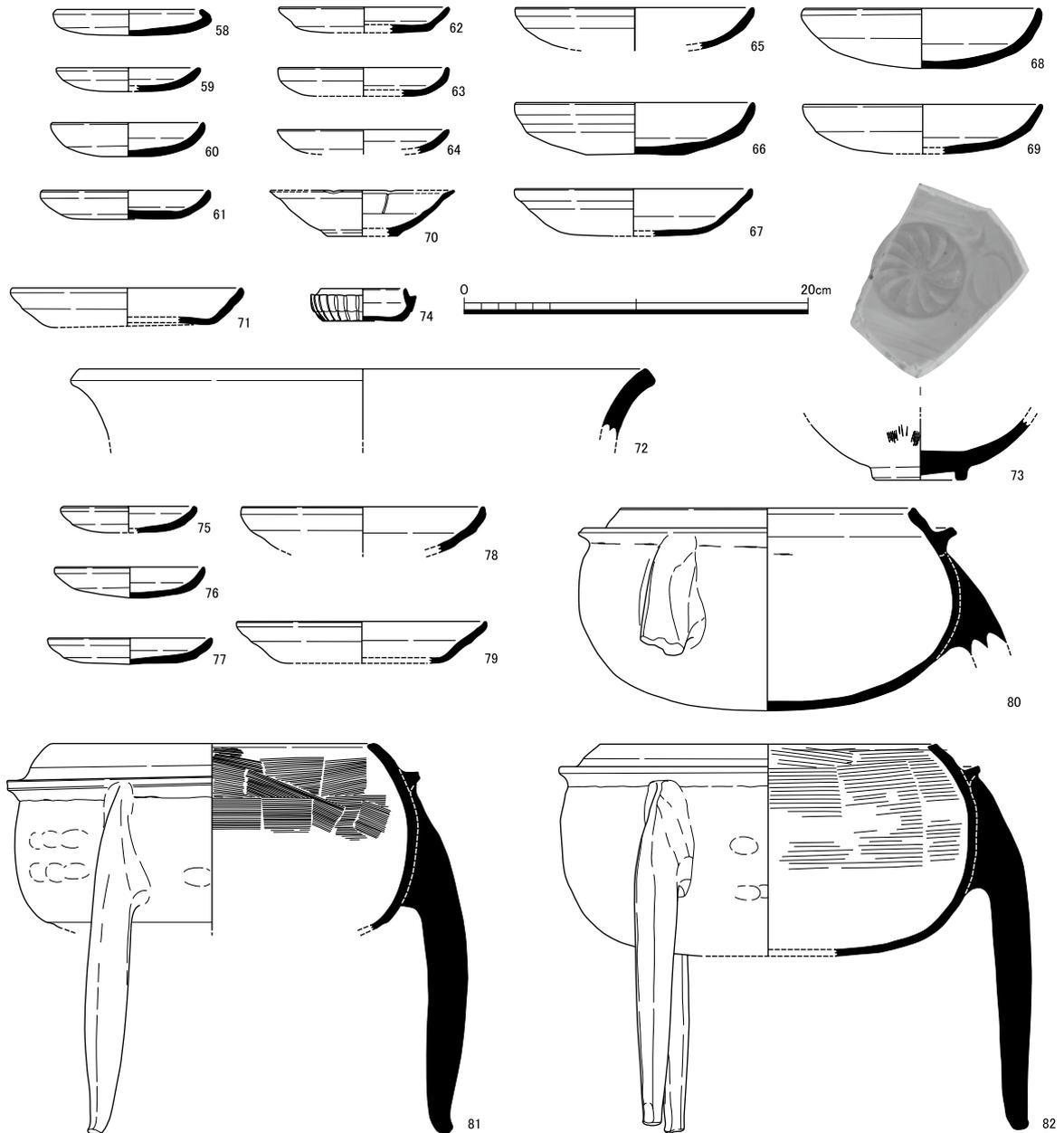
井戸394（図26-71～74、図版8） 土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、青磁、焼締陶器などの主に12世紀後半から13世紀初頭の土器が出土した。

71は土師器皿N。口径13.3cm、器高2.3cmの大型である。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。胎土に雲母をよく含む。

72は瓦質土器甕の口縁部。口縁部は外反し、端部に面をつくる。内外面ともにヨコナデを施す。

73は青磁碗の底部。底径は5.1cmである。外面の一部には0.5cmほどの直線を陰刻する。内面見込み部には、花文などの文様を陰刻する。底部外面を除く、内外面ともに施釉する。色調は灰白色の胎土に、明オリーブ灰色の釉を施す。

74は磁器合子の身。口径4.9cm、器高1.9cmで、完形である。外面に上下2段の切り込みを入れる



(58～70 井戸494、71～74 井戸394、75～82 土坑171)

図26 井戸494・394、土坑171出土土器実測図（1：4）

ことで、平面は輪花形を呈する。内面と外面の上半部に灰白色の釉を施す。

土坑171（図26-75～82、図版8）土師器、黒色土器、瓦器、青磁、白磁、焼締陶器の主に12世紀後半から13世紀初頭の土器が出土した。

75～79は土師器皿N。口径7.6～9.4cm、器高1.5～1.8cmの小型（75～77）と、口径14.0～14.4cm、器高2.4～2.7cm以上の大型（78・89）に分けられる。79の口縁端部はやや内湾し、上方に尖る。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。75・77・78にはヨコナデによる段が確認できる。77には雲母を、79には径1～2mmの長石・雲母を、胎土によく含む。

土坑171からは、6個体分の瓦質土器羽釜の口縁部を確認した。そのうち、残存状態の良好な3個体を図化した。80～82は瓦質土器羽釜。80は口径17.0cm、器高11.9cmである。脚部は3本とも欠損するが、欠損部の破面にも煤が付着しているため、脚部が欠損してからも使用したものとみられる。口縁はやや長く、内傾する。断面方形の低い鏝を貼り付ける。内面は磨滅のため調整不明だが、口縁部はヨコナデ、外面はナデを施す。内外面ともに煤が付着する。81は口径19.0cm、口縁部から脚部の器高22.9cmである。口縁はやや長く、内傾する。断面台形の鏝を貼り付ける。脚部は2本が完存しているが、1本は欠損する。羽釜の底部外面には、型押し痕跡が認められるが、それより下部は残存しない。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面上半は横位から右下がりハケ目を施す。脚部はナデを施す。口縁部内面、脚部外面の下端5cmほど以外にはすべて煤が付着する。82は口径19.6cm、口縁部から脚部の器高22.8cmである。口縁はやや長く、内傾する。断面方形のやや高い鏝を貼り付ける。脚は3本すべてが完存する。羽釜の底部外面には、型押し痕跡が認められる。口縁部内面、脚部内面の下端5cmほど以外にはすべて煤が付着する。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面上半は横位ハケ目、内面下半はナデを施す。脚部はナデを施す。

建物1（図27-83～88）柱穴から土師器皿が出土した。出土遺物は少ないが、これらは12世紀末から13世紀前半を示す。

83～88は土師器皿N。いずれも口縁部のみ残存する。これらは口径9.6cmの小型（83）と、口径12.2～13.7cmの大型（84～88）に分けられる。83は口縁端部に面をつくり、87は上方に摘み上げやや尖る。88は口縁部がやや外反する。83は口縁部内外面に煤が付着していた。いずれも内面はナデ、外面は指オサエ、口縁部はヨコナデを施す。83・86・87の外面にはヨコナデによる段が明瞭につく。色調は84・88が灰白色、それ以外はにぶい黄橙～浅黄色を呈す。88は柱穴236から、84は柱穴309から、85・87は柱穴315から、83・86は柱穴376から、それぞれ出土した。

土坑157（図27-89～110、図版8・9）大量の土師器皿、須恵器、瓦器、白磁、焼締陶器などの主に12世紀末から13世紀前半の土器が出土した。

89～107は土師器皿。89は口径8.0cm、器高1.7cmで、完形である。口縁は大きく外反する。内外面ともに回転ナデで調整、底部には糸切り痕跡がみられる。色調は灰白色を呈す。

90は土師器皿Ac。口径7.7cm、器高1.5cmで、完形である。口縁部は大きく内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。胎土には石英・雲母・赤色砂粒をよく含む。色調は灰黄色を呈す。91～106は土師器皿N。これらは口径8.4～9.4cm、器高1.3～

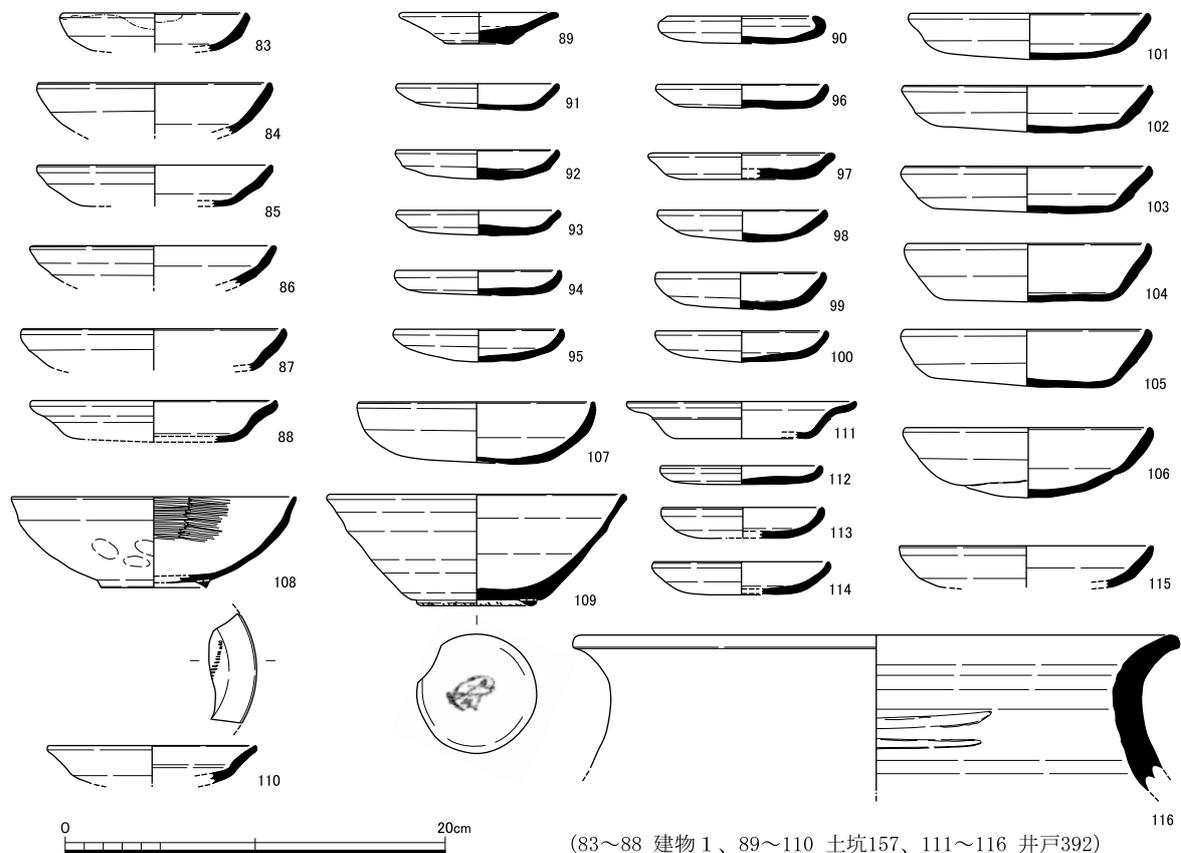
2.0cmの小型（91～100）と、口径12.2～12.9cm、器高2.5～3.7cmの大型（101～106）に分けられる。91～96・99・100は完形、102は口縁部を一部欠損するのみでほぼ完形である。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。外面には、ヨコナデにより段のつくものが多い。また106の下部には、調整とは別の段が確認できた。おそらく粘土が生乾きの段階で、小型皿などをあてて底部を押し出したとみられる。そのために器高は3.7cmとやや深い。胎土は、とくに92・98が雲母を、102が雲母・赤色砂粒をよく含む。

107は土師器皿S。口径12.2cm、器高3.3cmの中型皿である。口縁部を一部欠損するのみでほぼ完形である。口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。

108は瓦器椀。口径14.9cm、器高4.8cmである。底部には0.4mmほどの高台をナデにより貼り付ける。外面は指オサエ、内面は横方向のミガキを施す。

109は山茶椀。美濃産。口径15.5cm、器高5.9cmである。口縁端部は丸くおさめる。底部中央に墨書がみられるが、画かれた文字または絵については不明である。内外面ともに回転ナデを施し、底部は糸切りである。底部には0.3mmほどの高台をナデにより貼り付ける。高台には籾殻痕が多数みられることから、高台の粘土が生乾きの内に籾の上へ置かれたと考えられる。色調は灰白色を呈す。

110は青磁皿。見込み部に列点文が直線状に施される。灰白色の胎土の内外面ともに施釉されており、色調はオリーブ灰色を呈す。



(83～88 建物1、89～110 土坑157、111～116 井戸392)

図27 建物1、土坑157、井戸392出土土器実測図（1：4）

井戸392（図27-111～116、図版9）土師器、緑釉陶器、瓦器、灰釉陶器、焼締陶器などの土器が出土した。井戸392からは、図示したものの他に青磁の小片や美濃産山茶碗が出土した。これらの出土遺物から、井戸392は13世紀初頭には埋まったとみられる。

111～115は土師器皿。111は土師器皿A。口径12.0cm、器高2.0cmである。口縁部は大きく外反し、口縁端部はわずかに上方に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。色調は灰白色を呈す。112～115は土師器皿N。口径8.4～9.2cm、器高1.0～1.8cmの小型（112～114）、口径13.2cm、器高2.2cmの大型（115）に分かれる。口縁端部は上方にのびるが、114の口縁端部はわずかに内反する。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。色調は、いずれもにぶい黄橙色を呈す。

116は須恵器甕の口縁部。口径は31.4cmである。内面には、ヘラ様による沈線2本が認められる。体部外面をタタキの後、ナデ消して口縁部をつくる。口縁部は回転ナデ、内面はナデを施す。色調は灰色を呈す。

4) 13世紀後半から14世紀前半の土器

柱穴列7（図28-117、図版9）柱穴からの出土遺物は少ない。

117は瓦器碗。口縁14.1cm、器高5.1cmである。底部を一部欠損する。口縁部はヨコナデ、内外面に粗くミガキを、底部内面にらせん状暗文を施す。柱穴列7の柱穴374から出土した。13世紀後半から14世紀初頭を示す。

地業477（図28-118～122）土師器、須恵器、瓦器、青磁、焼締陶器などの主に13世紀後半から14世紀初頭の土器が出土した。

118～121は土師器皿。118は土師器皿Ac。曲がり少なく端部はほぼ直立する。口縁部はヨコナデ調整、底部には成形時の指跡が残る。色調は灰白色を呈す。119～121は土師器皿N。119は口径6.9cm、器高1.0cmの小型、120は口径11.8cm、器高2.0cm、121は口径12.2cm、器高2.4cmの大型である。比較的平坦な底部から口縁部が外上方にのびる。口縁部・内部はヨコナデを施し、底部は未調整である。色調は、119・120が浅黄橙色、121は灰白色を呈す。

122は、瓦質土器の羽釜。口縁の下に鐳が貼り付けられる。口縁は直立し、端部は強くナデたため、中央が窪んでいる。口縁部をヨコナデ、内面はヨコナデの後板状の工具で丁寧にナデを施す。色調は内面が灰白色、外面は黒褐色を呈す。

井戸168（図28-123～130）土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、白磁などの主に13世紀後半から14世紀初頭の土器が出土した。

123～129は土師器皿N。これらは口径8.0～8.8cm、器高1.2～2.0cmの小型（123～125）、口径12.0～13.2cm、器高1.9～2.6cmの大型（126～129）に分けられる。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。125、129の外面には、ヨコナデにより段が明瞭につく。128は口縁部を一部欠損するのみでほぼ完形である。色調は、123・125・129が灰黄色を、124・126～128がにぶい黄橙色～浅黄色を呈す。胎土は、124が径1～3mmの長石を、125が雲母をよく含む。

130は瓦質土器羽釜。口径14.7cmである。外面に断面三角形の鐳を貼り付ける。内面はハケ、外

面はオサエ、口縁部はヨコナデを施す。口縁部は内傾し、口縁端部は面をつくる。

井戸170 (図28 - 131 ~ 139) 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、青磁、焼締陶器などの主に13世紀後半から14世紀初頭の土器が出土した。

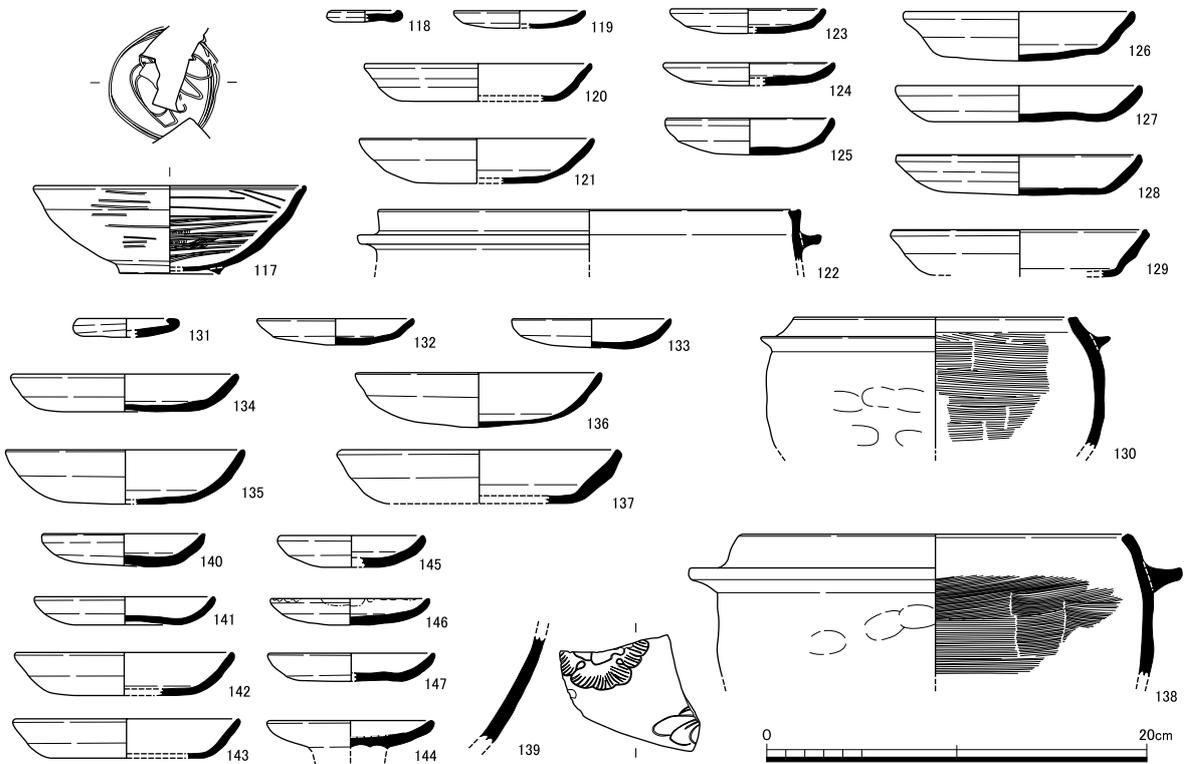
131 ~ 137は土師器皿。131は土師器皿Ac。口縁端部を内側に強く屈曲させる。口縁部から内面はヨコナデ、外面はオサエを施す。色調は灰白色を呈す。

132 ~ 137は土師器皿N。これらは口径8.3cm、器高1.4 ~ 1.6cmの小型 (132・133)、口径11.8 ~ 14.5cm、器高2.0 ~ 2.9cmの大型 (134 ~ 137) に分けられる。いずれも内面はナデ、外面は指オサエ、口縁部はヨコナデを施す。ヨコナデによる段が132・133・136は1段、137は2段、明瞭につく。132・133は胎土に雲母をよく含む。色調は、132・133・137が灰黄色を、134がにぶい黄橙色を、135・136が灰白色を呈す。

138は瓦質土器羽釜の口縁部。口径20.2cmである。口縁部はやや長く内傾し、口縁端部は面をつくる。外面に断面台形の高い鏝を貼り付ける。外面には煤が付着する。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面は横位ハケを施す。

139は緑釉陶器壺の体部片。内面は回転ナデ、外面はミガキの後、施文し施釉する。花文は線刻される。褐灰色の非常に精緻な胎土に、オリーブ灰色の釉を施す。内面に釉の垂れた痕跡が確認できる。

土坑42 (図28 - 140 ~ 144、図版9) 土師器、須恵器、焼締陶器などの主に13世紀後半から14世紀初頭の土器が出土した。



(117 柱穴列7、118~122 地業477、123~130 井戸168、131~139 井戸170、140~144 土坑42、145~147 土坑312)

図28 柱穴列7、地業477、井戸168・170、土坑42・312出土土器実測図 (1 : 4)

140～143は土師器皿N。これらは口径8.4～9.4cm、器高1.5～1.8cmの小型（140・141）と、口径11.4～11.8cm、器高2.1～2.3cm以上の大型（142・143）に分けられる。140は口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。141は底部の歪みが甚だしい。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。143は胎土に雲母をよく含む。色調は浅黄色～にぶい黄橙色を呈す。

144は白色土器高杯の杯部。口径8.6cmで、脚部は欠損する。内外面ともに回転ナデを施す。見込み部は剥離しており調整は不明である。色調は灰黄色を呈す。

土坑312（図28 - 145～147） 土師器、焼締陶器の主に13世紀後半から14世紀初頭の土器が出土した。

145～147は土師器皿N。145は口径7.4cm、器高1.7cm、146は口径8.4cm、器高1.4cm、147は口径8.6cm、器高1.5cmで、いずれも小型である。146は口縁部の内外面に煤が付着する。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。色調は、いずれもにぶい黄橙を呈す。

地業370（図29 - 148～155、図版9） 土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、瓦器、白磁、青磁、焼締陶器などの12世紀代から14世紀前半にかけての土器が出土した。主となる土器は13世紀末から14世紀前半を示す。

148～154は土師器皿。148は口径6.6cm、器高1.2cmの小型である。ロクロによって成形されており、底部に回転ヘラ切りの痕跡がある。また、底面に板状圧痕がみとめられる。底部内面中央に仕上げナデを施す。色調は灰白色を呈す。

149は土師器皿Ac。口径4.8cm、器高1.1cmである。口縁が内側に折れ曲がる。口縁部・内面はヨコナデ調整、底部は無調整である。色調は灰白色を呈す。150～154は土師器皿N。これらは口径8.4cm、器高1.7cmの小型（150）、口径11.4～15.0cm、器高2.0～3.15cmの大型（151～154）に分けられる。いずれも比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁部・内面はヨコナデ、底部内面は仕上げナデを施す。底部は無調整である。色調は灰黄色を呈す。

155は土師質土器の小型羽釜。口径5.2cm、器高2.3cmである。口縁部直下に断面三角形の鏝が付き、体部・底部は半球状になる。口縁部内側に浅い沈線がめぐる。口縁部はヨコナデ、底部内面は仕上げナデを施す。他は無調整である。色調は浅黄橙色を呈す。

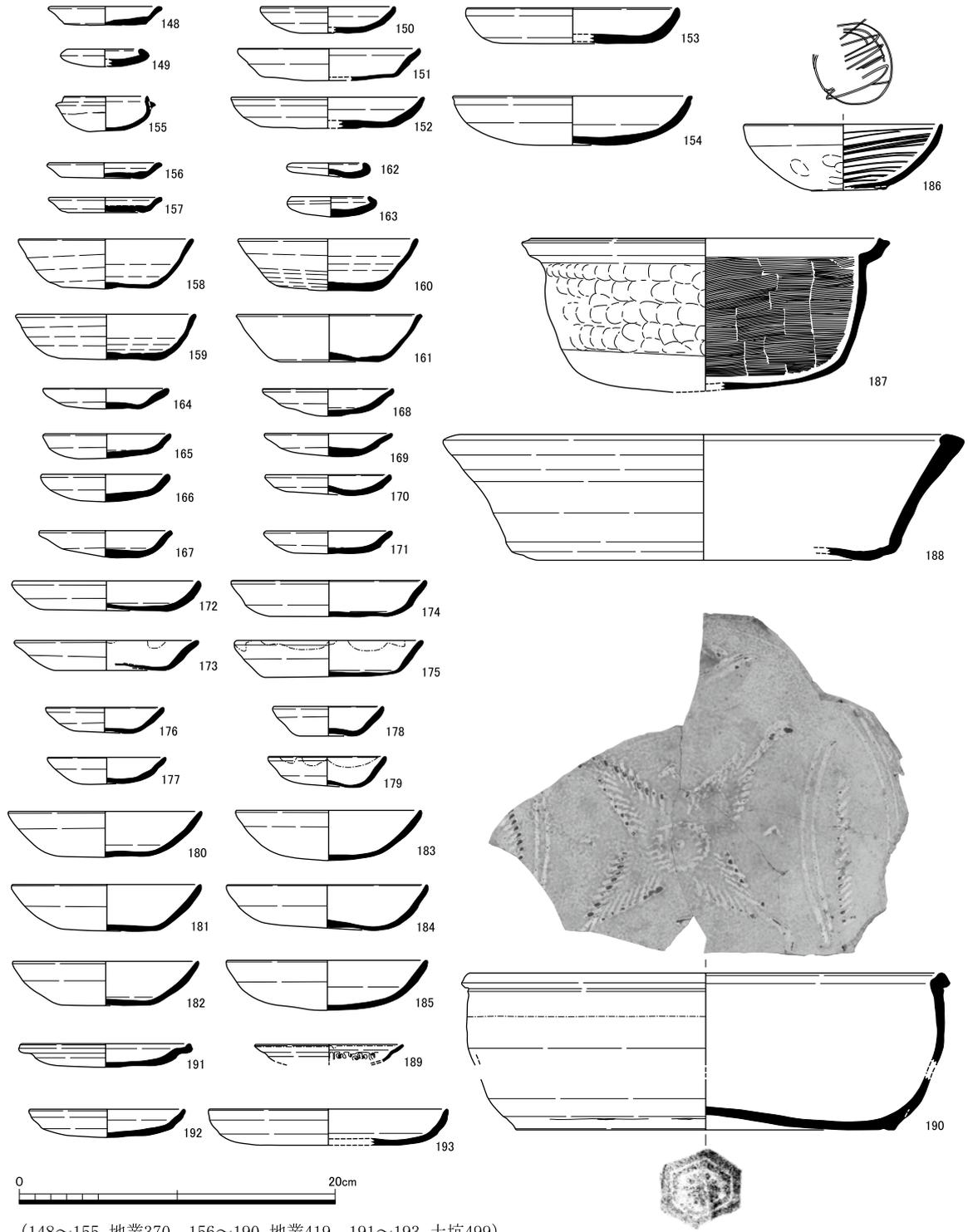
地業419（図29 - 156～190、図版9・10） 土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、褐釉陶器、焼締陶器などの主に13世紀末から14世紀前半の土器が出土した。

156～185は土師器皿。156・157は口径7.0cm、器高1.0cmの小型である。平坦な底部から口縁部が短く外湾して立上る。158～161は口径10.9～11.6cm、器高2.9～3.3cmの杯状の大型皿である。平坦な底部から口縁部が外上方にのび、口縁端部は丸みをおびる。底部内面中央に仕上げナデを施す。底面には板状圧痕がみとめられる。ロクロによって成形されており、底部は回転ヘラ切りを施す。焼成は非常に良好である。色調は灰白色を呈す。

162・163は土師器皿Ac。口縁が内側に強く折れ曲がる。162は口径4.5cm、器高1.0cm、163は口径4.9cm、器高1.3cmである。口縁部・内面はヨコナデ調整、底面に成形時の指オサエ痕が残る。164～175は土師器皿N。これらは口径7.8～8.2cm、器高1.3～1.8cm小型（164～171）、口径11.4～11.7

cm、器高1.9～2.3cmの大型（172～175）に分かれる。これらは比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。いずれも口縁部・内部はヨコナデ、底部内面は仕上げナデを施す。底部は未調整である。173・175は口縁部に油煙の跡が残る。色調は、灰黄色・にぶい黄橙色を呈す。

176～185は、土師器皿S。これらは口径6.9～7.4cm、器高1.7～2.0cm小型（176～179）と、口径11.7～12.6cm、器高2.8～3.2cm大型（180～185）に分けられる。小型の皿は底部から外上方に



(148～155 地業370、156～190 地業419、191～193 土坑499)

図29 地業370・419、土坑499出土土器実測図（1：4）

のび、口縁端部はわずかに立上る。底部中央がわずかに窪む。体部に指圧痕が残る。179は口縁部に油煙の跡が残る。大型の皿は比較的小さい底部から口縁部が大きく外上方にのびる。いずれも口縁部・内面はヨコナデ調整、底部内面は仕上げナデを施す。底部は未調整である。色調は、いずれも灰白色を呈する。

186は、瓦器の椀。口径12.4cm、器高4.2cmである。体部は内湾気味に上方にのびる。底部に低く扁平な高台が付く。底部内面に暗文を描く。体部に指圧痕が残る。口縁部はヨコナデ、内面はヨコナデの後ヘラミガキを施す。

187は、瓦質土器の鍋。平坦な底部から体部が内湾しながら立ち上がり、頸部で外方に屈曲する。口縁部は短く、口縁端部は張り出す。口縁部をヨコナデ、内面はヨコナデの後板状の工具で丁寧にナデ調整を施す。体部外面には指オサエの跡が残る。底部は未調整である。色調は内面が灰白色、外面は黒褐色を呈す。188は、瓦質土器の盤。口径30.7cm、器高8.0cmである。平坦な底部から外上方に体部・口縁部がのびる。口縁端部を内側につまみ出す。口縁部と体部内面は回転を利用したナデ、底部内面は丁寧に仕上げナデを施す。体部外面は無調整、底部には靱殻痕が密に残る。色調は黄灰色を呈す。

189は白磁皿の口縁部片。口径9.3cmである。ミガキの後に施釉を行う。花葉文は、型押しにより施される。胎土・釉の色調は灰白色を呈す。

190は、輸入陶器の黄釉褐彩陶器の盤。口径30.0cm、器高10.0cmである。中央が窪んだ底部から口縁部が内湾して上方にのび、口縁端部は外側に曲げ外側に平坦面をもつ。口縁部と内面に黄釉を施し、内面に褐彩で幾何学文様を描く。底部中央に二重亀甲文とその中に花文を墨書する。

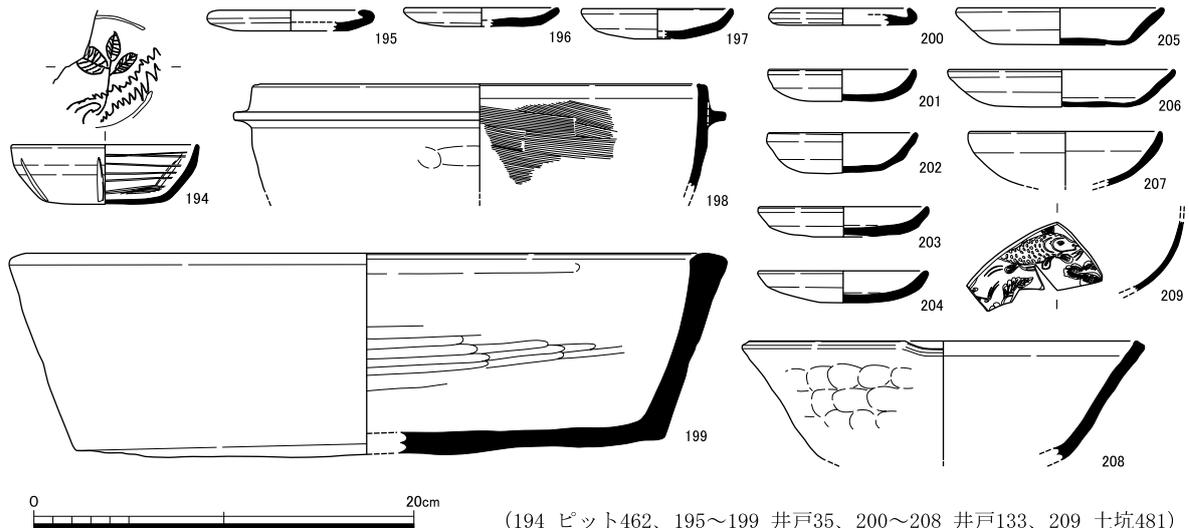
土坑499 (図29 - 191 ~ 193) 土師器皿が数点出土した。

191 ~ 193は土師器皿。191は土師器皿A。口径10.6cm、器高1.5cmである。口縁部と内面はヨコナデ、底部内面は仕上げナデを施す。192・193は土師器皿N。口径9.8cm、器高1.8cmの小型(192)と、口径15.0cm、器高2.3cmの大型(193)に分けられる。比較的平坦な底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部断面は三角形を呈する。口縁部に2段ナデを施す。底部内面は仕上げナデを施すが、底部は未調整である。色調はにぶい黄橙色を呈す。

ピット462 (図30 - 194、図版10) 194は瓦器椀。口径9.6cm、器高3.1cmである。口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面はオサエ後にナデ、底部内面はナデ後に暗文及び線刻を施す。内面は粗くミガキが、底部内面には2本の波状文が暗文として施される。さらに底部内面の中央には、3葉を付けた枝が線刻される。外面には縦に浅い沈線を施し、輪花形とする。現在は3本の沈線が確認できるが、本来は6本存在したとみられる。

井戸35 (図30 - 195 ~ 199、図版10) 土師器、瓦器、緑釉陶器、焼締陶器などの主に13世紀末から14世紀前半の土器が出土した。

195 ~ 197は土師器皿。195は土師器皿Acの口縁部片。口縁部は内側につよく屈曲する。色調は灰白色を呈す。196・197は土師器皿N。196は口径8.0cm、器高1.0cm、197は口径7.8cm、器高1.6cmの小型である。いずれも内面体部から口縁部はヨコナデ、外面オサエ内面はナデを施す。外面には



(194 ピット462、195～199 井戸35、200～208 井戸133、209 土坑481)

図30 ピット462、井戸35・133、土坑481出土土器実測図（1：4）

ヨコナデによる段がつく。196は雲母を、197は径1～2mmの長石や雲母を、胎土に含む。

198は瓦質土器羽釜の口縁部。口径23.2cmである。内面はやや右下がりのハケ目、口縁部ヨコナデ、外面はオサエを施す。断面が丸みを帯びた台形の鐶を貼り付ける。199は瓦器火鉢。口径35.8cmの円形で、器高10.8cmで、完形である。脚部の痕跡はみられない。外面及び口縁部内外面は、器壁が剥離しており、調整は不明である。体部内面はミガキ、底部内面はナデを施す。色調は暗灰色を呈す。井戸35の底部で幾つかに割れた状態で出土した。

井戸133（図30 - 200～208、図版10） 土師器、瓦器、灰釉陶器、青磁、白磁、焼締陶器などの主に14世紀前半の土器が出土した。

200～207は土師器皿。200は土師器皿Ac。口縁部は内側に屈曲させる。内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面はオサエを施す。色調は灰白色を呈す。201～206は土師器皿N。口径7.6～8.8cm、器高1.6～2.2cmの小型（201～204）と、口径10.7～11.8cm、器高2.0cmの大型（205・206）とに分けられる。202・208は完形である。内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面はオサエを施す。205・206は底面を平坦につくり、底面から口縁部の屈曲が明瞭である。色調は、201・204～206がにぶい黄橙～浅黄色を、202・203が灰白色を呈す。

207は土師器皿S。口径10.1cm、器高2.9cmである。色調は灰黄色を呈す。

208は瓦器鉢。片口部が、一部欠損する。口縁端部には面をつくる。内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面はオサエを施す。灰色を呈す。

土坑481（図30 - 209） 土師器、白磁などの土器が出土した。

209は白磁碗の体部片。外面はミガキ後に、内面は施文後に、白色の釉を施す。内面には魚や葉などの文様が陽刻される。

井戸371（図31 - 210～238、図版10） 土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、青磁、白磁、焼締陶器などの主に14世紀前半の土器が出土した。

210～234は土師器皿。210は口径7.2cm、器高0.9cmである。内外面ともに回転ナデを施し、底部

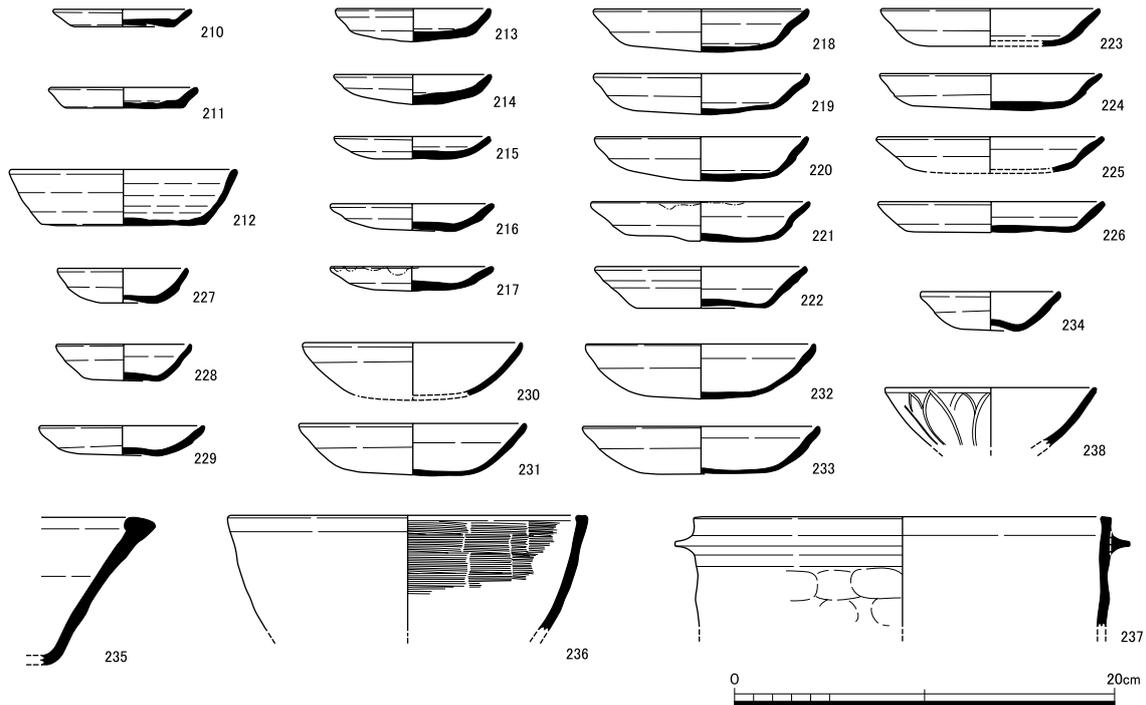


図31 井戸371出土土器実測図（1：4）

ヘラ切り。色調は灰白色を呈す。211は口径7.6cm、器高1.1cmで、完形である。212は口径11.8cm、器高3.0cmである。いずれも口縁部から内面は回転ナデを施し、底部はヘラ切り。色調は灰白色を呈す。

213～226は土師器皿N。口径8.0～8.6cm、器高1.2～1.8cmの小型（213～217）と、口径11.0～11.8cm、器高1.7～2.2cm以上の大型（218～226）に分けられる。215は口縁端部に面をつくり、219は口縁端部を上方に摘み上げる。217は口縁部の内外面に煤が付着する。218・221・224・226は口縁部がやや外反する。225も口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめる。220は底部を丸くつくり、222は底部が上方にやや突出する。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。216の外面にはヨコナデによる段が明瞭につく。色調は、216が褐灰色、それ以外がにぶい黄橙色を呈す。

227～233は土師器皿S。これらは口径6.6～8.6cm、器高1.6～1.9cmの小型（227～229）、口径11.8～12.4cm、器高2.6～3.4cmの大型（230～233）に分けられる。227は完形である。228・229は底部がやや突出する。いずれも口縁部はヨコナデ、外面は指オサエ、内面はナデを施す。いずれも色調は、灰白色を呈す。

234は土師器皿Sh。口径7.2cm、器高2.1cmである。口縁部から内面はヨコナデ、外面は指オサエ、底部内面はナデを施す。色調は灰白色を呈す。

235は瓦器鉢。口縁端部は玉縁状とする。色調は灰白色を呈す。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はナデを施す。236は瓦器火鉢。口径18.6cmである。口縁端部は内側へわずかに肥厚する。外面に煤が付着する。口縁部はヨコナデ、外面はオサエ、内面はヨコハケを施す。色調は灰色を呈す。237は瓦質土器羽釜の口縁部。口径21.0cmである。断面が丸みを帯びた台形の鑊を高く貼り付

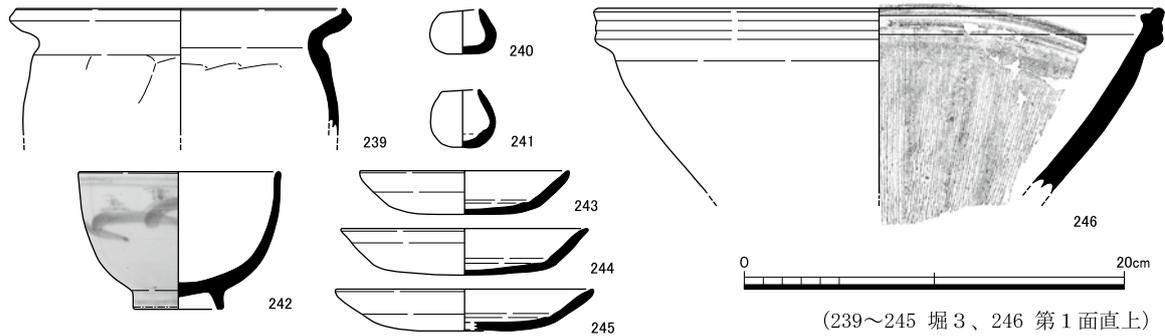


図32 堀3、第1面直上出土土器実測図（1：4）

ける。内面は磨滅のため調整不明だが、口縁部ヨコナデ、外面はオサエを施す。色調は褐灰色を呈す。

238は輸入の青磁椀。口径11.0cm。外面に花文を表現する。灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉を施す。

5) 17世紀以降の土器

堀3（図32 - 239～245）土師器、瓦器、染付、施釉陶器、焼締陶器などの大量の土器が出土した。

239は土師器羽釜の口縁部から体部。口径17.4cmである。体部は肩が張らず、口縁部は強く外反し、端部に面をつくる。外面全体に煤が付着する。口縁部ヨコナデ、内外面ともにナデを施す。色調は浅黄橙色を呈す。240・241は土師器小型壺。240は口径2.1cm、器高2.4cm、241は口径2.0cm、器高3.0cmで、いずれも完形である。外面はナデ、内面はヨコナデを施す。

242は染付椀。口径10.7cm、器高7.3cmである。内外面ともに施釉する。底部外面にも施釉されることから、1630年代頃までに製作された初期伊万里である。

243～245は土師器皿。243は口径11.0cm、器高2.3cm、244は口径13.0cm、器高2.5cm、245は口径13.6cm、器高2.2cmである。口縁部から内面はヨコナデ、外面はナデ、見込みナデを施す。243は胎土に角閃石や雲母をよく含む。色調は、いずれも浅黄色を呈する。

239～243は堀3の埋土中層から、244・245は上層から出土した。今回の調査では、堀肩部のみの検出のため、堀の詳細な埋没時期は不明であるが、江戸時代前期には埋没し始めていたと考えられる。

第1面直上（図32 - 246）246は焼締陶器の播鉢。堺・明石系。口径30.0cmである。口縁部は肥大させ、外面には3段、内面には1段の粘土を貼り付けて段とする。色調はにぶい赤褐色を呈す。

(3) 土製品（図33 - 土1～7、図版12）

土1は灰釉の風字硯。残存長7.3cm、厚さ1.3cm。曲線状の突帯により、二面に分けられる。灰白色の胎土に、灰オリーブ色の釉を施す。第2面直上から出土した。

土2は土製紡錘車。復元径5cm、厚さ0.6cmの円形板の中央に復元径0.5cmの円孔を穿つ。流路501から出土した。

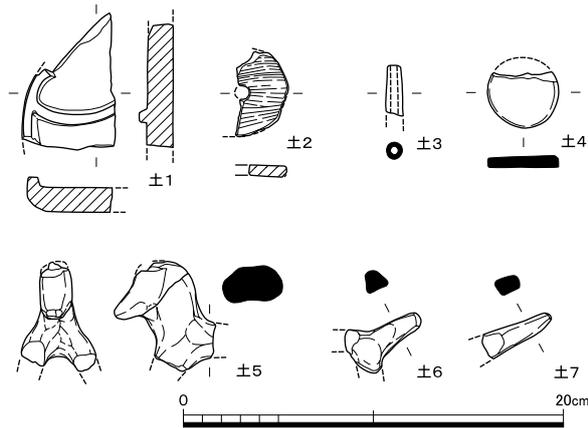


図33 出土土製品実測図（1：4）

土3は土錘。片方の端部を欠損する。残存長2.7cm、最大幅1.0cmである。中央に0.4cmの円孔を穿つ。色調はにぶい黄橙色を呈す。ピット461から出土した。

土4は土製円板。直径3.8cm、厚さ0.5～0.6cmの円形板である。地業370から出土した。

土5～7は土馬。土5は土馬の頭から頸部。ナデにより成形される。頭部は、耳を貼り付けられた後、顔を貼り付ける。色調は灰白色を呈す。第3面直上から出土した。土6は土馬の尻尾。ナデにより成形される。尻尾の断面形は隅丸三角形である。色調はにぶい黄橙色を呈す。地業155から出土した。土7は土馬の尻尾。ナデにより成形される。尻尾の断面形は横方向に長い方形である。色調はにぶい橙色を呈す。地業419から出土した。

（4）瓦類（図34・35、図版11）

1）軒丸瓦（図34－瓦1～5、図版11）

瓦1は複弁八葉蓮華文。蓮子は1+6で、蓮華文の周りに界線と珠文がめぐる。瓦当部裏面上半はナデ、下半はケズリを施す。胎土は密で、色調は灰色で、硬質である。12世紀前半。山城産。地業370から出土した。

瓦2は複弁八葉蓮華文軒丸瓦。蓮子は1+8で、蓮弁周囲には蓮弁に沿って輪郭線がめぐる。瓦当部裏面はナデを施す。胎土は密で、色調は灰色で、硬質である。播磨産。鎌倉時代。井戸170掘形から出土した。

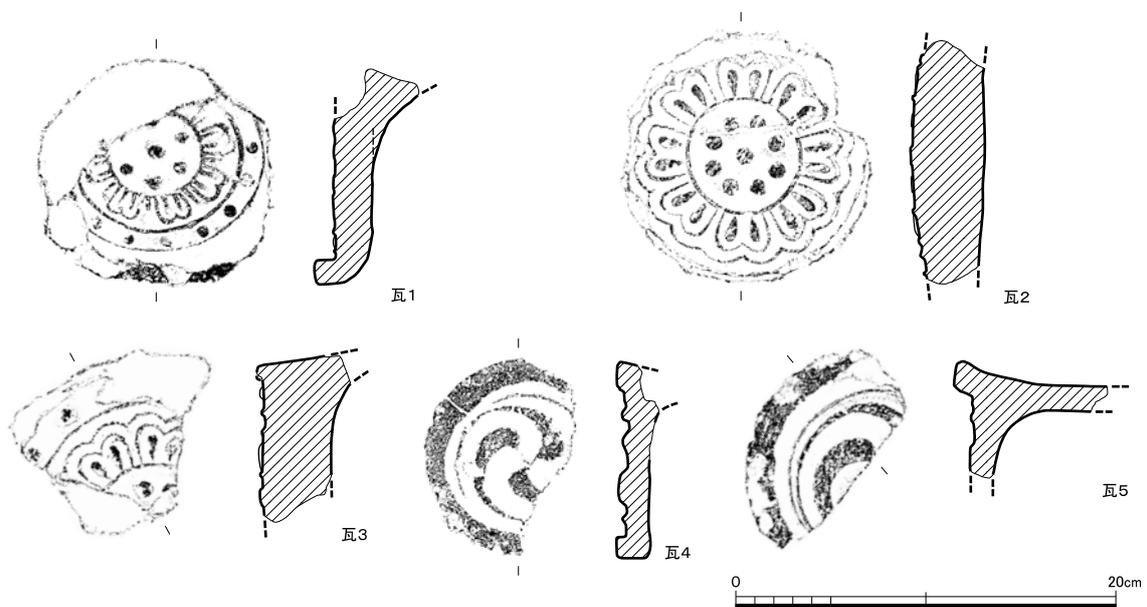


図34 出土軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）

瓦3は複弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁周囲には蓮弁に沿って輪郭線が巡る。外区には弁間と蓮弁の中央に珠文を配す。瓦当部裏面ナデを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は灰色で、硬質である。播磨産。鎌倉時代。堀3の最下層から出土した。

瓦4は巴文軒丸瓦。右巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部も互いに接しない。瓦当部裏面上端に、丸瓦を当て、粘土を付加し接合した痕跡が残る。瓦当部裏面はナデを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調はにぶい黄橙色、やや軟質である。鎌倉時代。地業370から出土した。

瓦5は巴文軒丸瓦。右巻き巴文を配する。瓦当部裏面上部に浅い溝を付け、丸瓦を挿入し、上下に粘土を付加して接合する。瓦当部裏面ナデを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、灰色、硬質である。時期不明。播磨産。地業370から出土した。

2) 軒平瓦 (図35-瓦6~19、図版11)

瓦6は唐草文軒平瓦。唐草文は左から右へ偏行する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込む。曲線顎。瓦当凹面端部ヨコケズリ、裏面タテナデを施す。平瓦部凹面布目、凸面タテナデを施す。平瓦部凸面には直線状のヘラ記号がある。胎土はやや砂粒を含み、色調は灰色で、硬質である。山城産。12世紀前半。現代の攪乱から出土した。

瓦7は唐草文軒平瓦。唐草は各单位が離れる。平瓦部凹面布目、凸面ナデ、側面ヨコケズリを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は黄灰色で、硬質である。12世紀前半。山城産。地業370から出土した。

瓦8は唐草文軒平瓦。唐草は各单位が離れる。平瓦部凹面布目のちナデ、凸面ナデを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は灰色で、硬質である。瓦当部成形は貼り付け。12世紀代。産地不明。

瓦9は斜格子文軒平瓦。格子は2重線で、菱形をなす。2重の界線がみられる。曲線顎。瓦当凹面端部ケズリ、顎部凸面ケズリ、裏面ナデを施す。平瓦部凹面布目、凸面ナデを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は灰色で、硬質である。12世紀前半。山城産。地業370から出土した。

瓦10は左巻き2巴文と雁行文を交互に配する。巴文の頭部は離れ、尾部は互いに接する。曲線顎。平瓦部凹面布目、凸面ナデを施す。胎土はやや砂粒を含み、色調は灰白色で、硬質である。山城産。12世紀前半。地業477から出土した。

瓦11は唐草文軒平瓦。平瓦部凸面ナデ、凹面布目、側面ヨコケズリを施す。瓦当凹面端部ケズリ、側面ナデを施す。胎土は密で、色調は灰色、硬質である。山城産。12世紀後半。整地層から出土した。

瓦12は斜格子文軒平瓦。格子は2重線で、菱形をなす。曲線顎。顎部凸面ケズリ、裏面ナデを施す。平瓦部凹面布目、凸面ナデ。胎土は密で、色調は灰白色、やや軟質である。山城産。12世紀後半。ピット448から出土した。

瓦13は斜格子文軒平瓦。曲線顎。胎土は密で、色調は黄灰色、硬質である。山城産。12世紀後半。井戸170井戸枠内から出土した。

瓦14は剣頭文を配する。段顎。瓦当部布目、瓦当凹面端部ケズリ、顎部凸面ケズリ、裏面ヨコナデ、平瓦部凹面布目、凸面オサエ、側面ケズリを施す。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色で、硬質

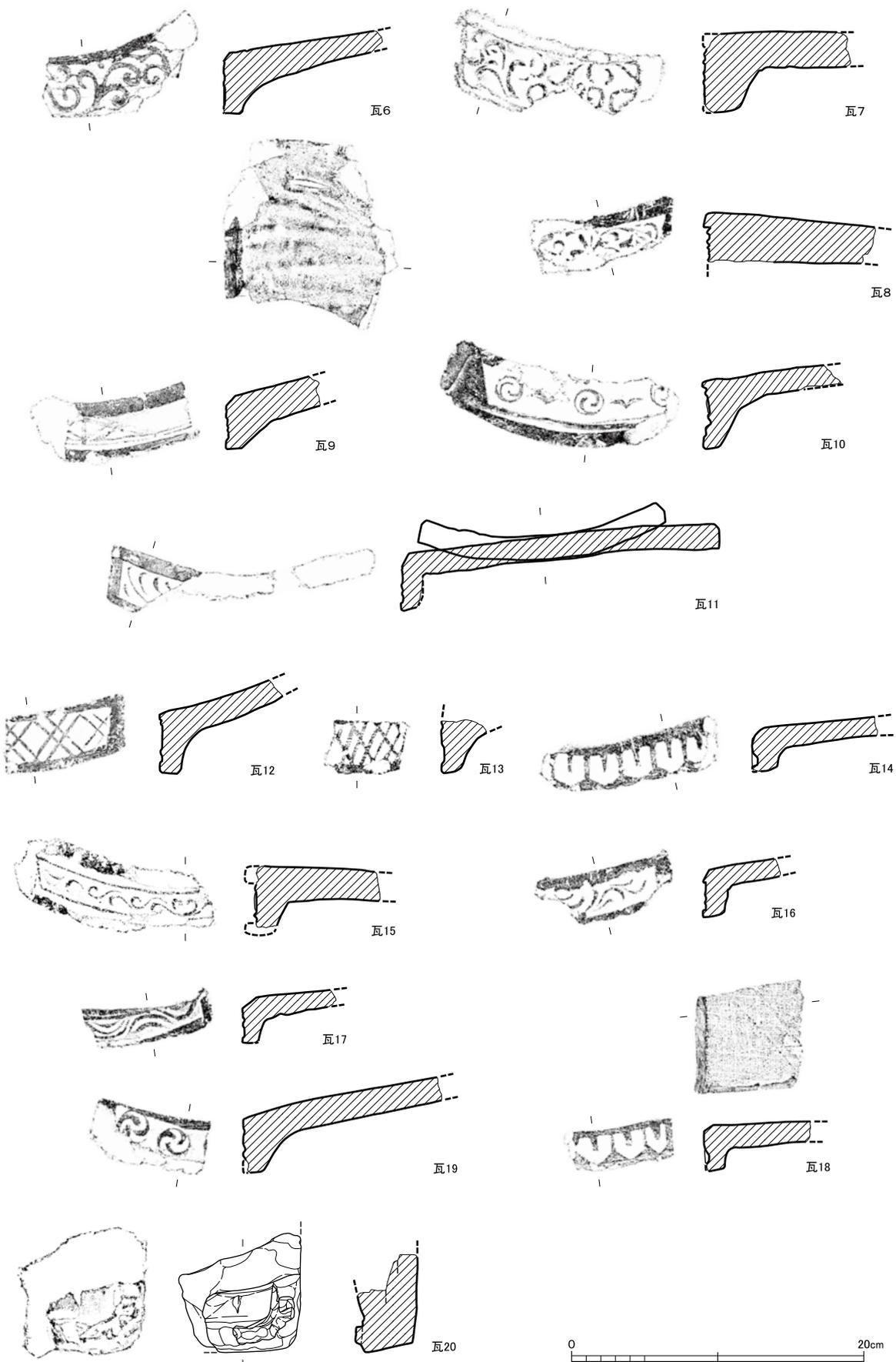


図35 出土軒平瓦・鬼瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

である。山城産。12世紀後半。第2面から出土した。

瓦15は均整唐草文軒平瓦。中心飾りは上向きのC字形で、その両側に唐草文が展開する。唐草は各单位が離れ、主葉は強く巻き込む。段顎。平瓦部凸面ケズリの後ナデ、凹面布目の後ナデ、顎部凸面ナデ、裏面ケズリを施す。胎土は砂粒をよく含み、色調は灰色で、硬質である。鎌倉時代。堀3下層から出土した。

瓦16は唐草文軒平瓦。唐草は各单位が離れ、主葉・支葉ともに巻きが弱い。段顎。瓦当凹面ケズリ、顎部凸面・裏面ケズリを施す。平瓦部凸面ナデ、凹面布目、端部ヨコケズリを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は暗灰色で、硬質である。鎌倉時代。井戸170井戸枠内から出土した。

瓦17は唐草文軒平瓦。唐草は各单位が離れ、巻きが弱い。曲線顎。瓦当面に布目が残る。瓦当凹面端部ケズリ、顎部裏面から平瓦凸面にかけてナデ、平瓦部凹面に布目が残る。胎土は砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色で、やや軟質である。鎌倉時代。井戸170から出土した。

瓦18は剣頭文軒平瓦。段顎。端部の剣頭文は若干小さい。瓦当凹面端部ケズリ、瓦当部端部ヨコケズリを施す。顎部凸面ヨコケズリ、裏面ヨコナデを施す。平瓦部凸面ナデ、凹面に布目が残る。平瓦部凹面には3条の沈線がある。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は灰黄色で、硬質である。山城産。12世紀後半。井戸170から出土した。

瓦19は巴文軒平瓦。右巻き3巴文を連続して配する。巴文の頭部は離れるが、尾部は互いに接する。曲線顎。顎部裏面から平瓦部凸面にかけてナデ、側面ケズリを施す。胎土は砂粒や小礫を含み、色調は灰色で、硬質である。山城産。12世紀後半。土坑414から出土した。

3) 鬼瓦 (図35 - 瓦20、図版11)

瓦20は鬼瓦。鬼瓦の隅に当たるが、詳細な位置や文様は不明である。裏面・側面はケズリ。胎土は密で、色調は灰白色、硬質である。播磨産。地業370から出土した。

(5) 石製品 (図36 - 石1 ~ 6、図版12)

石1は石製帯金具の巡方。長さ3.6cm、幅3.9cmのやや横に長い方形で、厚さ0.65cm、重さ21.6gである。表面には、各角4箇所につき2つずつ穿孔される。隣り合う2つの孔は、それぞれ孔の下部が通じており、紐を通すことのできる仕組みとなっている。右上角には3つの孔が確認できる。一番下の孔は、下部が他の孔と通じていないため、穿孔に失敗したと考えられる。整地層から出土した。

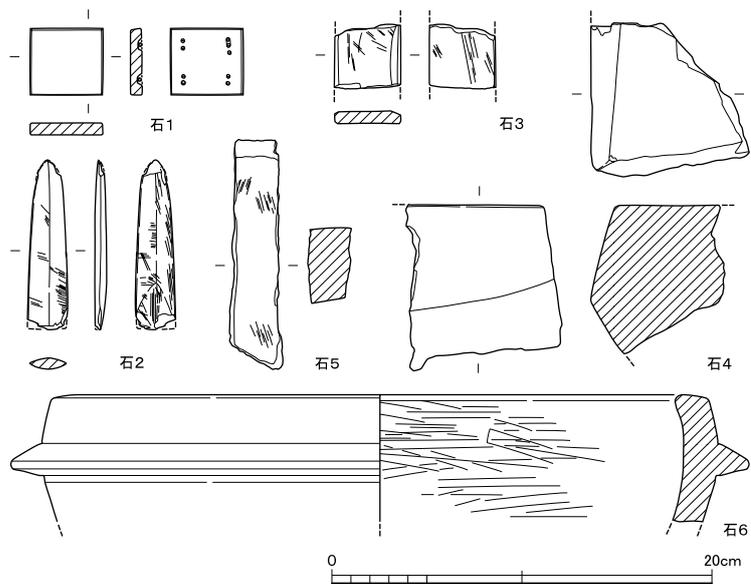


図36 出土石製品実測図 (1 : 4)

石2は磨製石鏃。基部は欠損する。残存長9.0cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmで、重さ15.5gである。表裏面の中央に鏑が入る。第Ⅲ層上面から出土した。

石3～5は砥石。石3は上部・下部ともに欠損している。残存長3.4cm、幅3.5cm、厚さ0.7cmである。上面・下面・右側面が砥面となる。ピット341から出土した。石4は多角形を呈する。一辺の長さは上面が5.4cm、左上面5.0cm、左下面3.5cm、厚さ7.9cmである。欠損する2辺以外の3辺は砥面となる。整地層から出土した。石5は、長さ12.2cm、幅2.6cm、厚さ4.0cmである。左右の側面は欠損しており、現状では幅の狭い上面のみが砥面となる。井戸35から出土した。

石6は滑石製鍋の口縁部。口径31.6cm。内外面ともにはケズリ擦痕が認められる。内外面には煤が付着する。井戸168から出土した。

(6) 銭貨・金属製品 (図37・38、図版12)

1) 銭貨 (図37—銭1～5、図版12)

銭1は神功開寶。直径2.6cmの円形で、中央に一辺0.6cmの正方形の孔を穿つ。重さは2.426gである。銭文は時計回りに表記される。「功」のつくりは「力」でなく「刀」となる。裏は無紋である。和同開珎、萬年通寶に次ぐ皇朝十二銭のひとつで、天平神護元(765)年に鑄造された。第2面の遺構面直上から出土した。

銭2は元豊通寶。直径2.4cmの円形で、中央に一辺0.7cmの正方形の孔を穿つ。重さは3.477gである。銭文は時計回りに表記される。「通」字は緑青により確認できない。宋の第6代皇帝、神宗(在位1067～1085)により、元豊元年(1078)に初鑄された。井戸392の井戸枠内から出土した。

銭3は元祐通寶。直径2.4cmの円形で、中央に一辺0.6～0.7cmの正方形の孔を穿つ。重さは3.002gである。全体的に緑青が付着する。銭文は時計回りに表記される。宋の第7代皇帝、哲宗(在位1085～1100)により、元祐元年(1086)に初鑄された。井戸371から出土した。

銭4は景德元寶。直径2.4cmの円形で、中央に一辺0.6cmの正方形の孔を穿つ。重さは2.906gである。銭文は時計回りに表記される。宋の第3代皇帝、真宗(在位997～1022)により、景德元年(1004)に初鑄された。

銭5は寛永通寶。直径2.4cmの円形で、中央に一辺0.5～0.6cmの正方形の孔を穿つ。重さは2.899gである。銭文は上下右左に表記される。裏は無紋である。寛永13年(1636)に初鑄、幕末まで鑄造されており、江戸時代を通じて広く流通した。銭4・5は溝80から出土した。

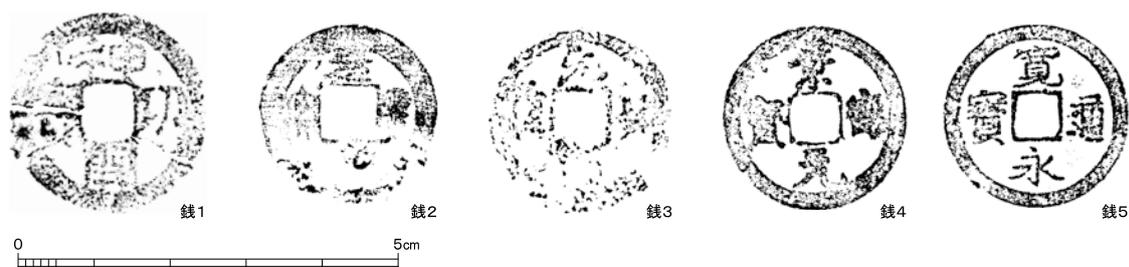


図37 出土銭貨拓影(1:1)

2) 金属製品 (図38-金1~3、図版12)

金1は銅製金具。ㄣ型を呈する。下半は欠損している。左先端が細くなっており、接合する際の差し込み部か。断面形は一辺0.2cmの面取りをした方形、左先端部の断面形は一辺0.1cmの方形である。地業155から出土した。

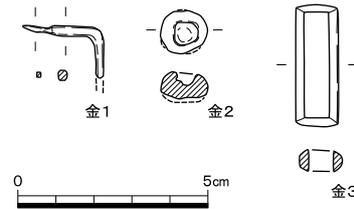


図38 出土金属製品実測図(1:2)

金2は金銅製玉。全体的に緑青が付着している。最大幅1.2cm、厚さ0.7cmで、中央に0.6cmの隅丸方形または円形の孔を上から半分まで穿つ。重さは2.1gである。ピット22から出土した。

金3は銅製金具である。長さ3.2cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmで、中央に長さ2.8cm、幅0.7cmの方孔を穿つ。重さは4.7gである。第2面直上から出土した。

(7) 木製品 (図39-木1~26、図版13)

木5は平安時代後期の整地層、他は御土居の堀(溝3)から出土した。

木1・2は竹製のコップ形の容器である。竹を横に切断し、節を底部としている。木1は体部・口縁部が内傾しており、口縁が底部より小さくなる。真竹を用いているが、のちに炭化している。木2は斜め方向に穿孔された痕跡がみとめられ、柄杓として使用されたと考えられる。口縁部は内側を斜めに削り、端部は丸味をおびる。外面は、縦方向に丁寧に磨かれており、全面に黒色の塗料が施されている。木1は復元口径3.35cm、器高5.2cm、復元底径4.0cm、木2は復元口径5.0cm、器高5.2cm、復元底径5.0cmである。

木3・4は漆器の椀である。木3は高台内外面に黒漆、他は赤漆を塗布している。高台径5.7cm、残存高5.0cmである。木4は外面に黒漆、内面は赤漆を塗布している。復元口径13.3cm、残存高5.4cmである。どちらもロクロ成形である。

木5~7はいずれも円形の薄い板で、曲物の底部と考えられる。木5の一面は側板と接合したような痕跡が認められ、一部赤漆が塗られている。他面は、赤漆を主に一部黒漆が乱雑に盛り上がった状態で残存している。周縁寄りに一箇所径5mmの孔が漆の上から穿たれている。曲物の底を漆製作工程で何らかの道具として再利用したものと考えられる。径7.6cm、厚さ0.04cmである。木6は復元径10.8cm、厚さ0.3cmで、表面に漢字が1字書かれている。木7は復元径16.5cm、厚さ0.85cmである。

木8~17は箸である。いずれも割木を粗く削って成形しており、断面は多面形を呈する。木17は一端を削って尖らすが、他は端面が平坦である。長さは、大別して7寸(21cm)前後のものとは8寸(24cm)前後のものがある。厚さは0.5~1.0cmである。

木18は棒につけた布などで叩いて回す不性(ぶしょう)独楽(こま)と呼ばれるものである。平面形は短径4.6cm、長径5.3cmの楕円形で、先端は擬宝珠状に削り出されている。上面は浅く内削りが入られている。高さは3.15cmである。

木19は組合せ式木槌の円筒形の頭である。側面の中央に柄を挿入するための、長方形の穴を開

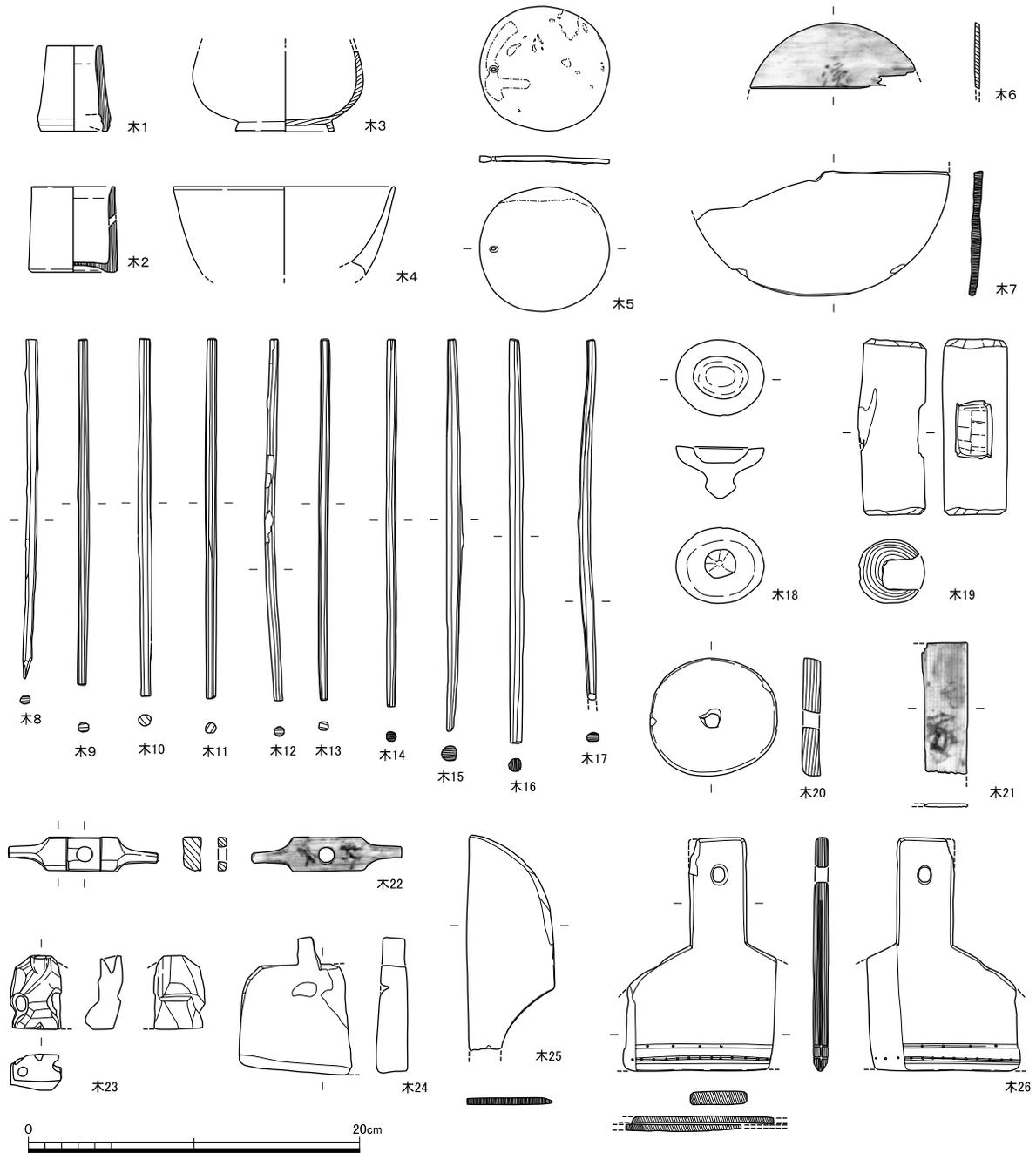


図39 出土木製品実測図（1：4）

けるが貫通していない。頭の両面には、面取りが施されている。柄の差込穴は鑿で粗く削り出されている。頭の長さ10.7cm、幅3.9cmで、差込穴は長さ3.4cm、幅2.3cm、深さ2.2cmである。

木20は円盤状の木製品である。中央に径1.1cmの孔が穿たれており紡輪の可能性はある。径7.2～7.7cm、厚さ1.1cmである。

木21は板状の木製品で、片面に文字が墨書されているが、判読はできていない。上面と左側面は加工面を残すが、他は欠損している。現存長8.0cm、現存幅2.75cm、厚さ0.2cmである。

木22は糸巻の横木である。2枚の横木を十字形にかみあわせるために、中央部に一辺2.1cm、深さ0.45cmの方形の切込みを設け、真ん中に径1.1cmの孔を穿っている。両端は棒状に削っている。上

面に2文字墨書されているが、判読はできていない。長さ9.1cm、幅2.1cm、厚さ1.1cmである。

木23は人形である。右側の一部を欠損しているが、着物を着て正座している人物を表現している。顔と両手は嵌込め式になっている。底面に2箇所計0.55cm、高さ2.1cmの円形の穴が明けられ、手の差込み穴と連結している。底面の穴は人形を台などに固定するためのものと考えられる。高さは4.1cmである。

木24は半分欠損しているが、露卯下駄の歯である。外側が内側より磨滅している。歯の高さは6.7cm、幅は1.5～1.9cm、差込み部は台形を呈し、長さは1.2cm、上辺の幅1.0cm、下辺の幅1.5cmである。

木25はヘラである。先端部は半円形で、片刃状に尖る。先端部の幅は6.3cm、柄部の幅1.9cm、厚さは0.4cmである。

木26は平刷毛である。胴部の両端は欠損している。先端は内側に削って尖らせている。先端から長辺に平行する割目をいれ、この割目が柄の部分まで及んでいる。下端に2条の溝があり、刷毛を固定するための糸を通す孔がある。長さ14.2cm、現存幅9.3cm、厚さ0.9cmである。その内、柄の長さは6.5cm、幅3.4cmで上方に径1.2cmの円孔が穿たれている。

5. まとめ

(1) 今回の調査区における歴史的変遷（図40・41）

今回の調査では、第1面から第3面の3つの遺構面で以下の遺構を検出した。

第1面では御土居の堀、素掘溝、多数の耕作に伴う素掘小溝を、第2面では建物4棟、塀2条、柱列3条、地業3基、井戸9基、土坑、ピットなどを、第3面では流路や整地層をそれぞれ確認した。これらの遺構は主に、9世紀初頭（第3面）、12世紀後半から13世紀前半（第2面）、13世紀後半から14世紀前半（第2面）、17世紀以降（第1面）の4つの時期に分けることができる。以下、時期ごとに詳述する。

9世紀初頭（第3面） 調査区の北東から南西にかけて幅8～13mの流路を確認した。この流路は、鴨川の洪水により形成された砂礫層（第Ⅲ層）の窪みを流れていた浅い自然流路と考えられる。この流路は、9世紀初頭の平安京遷都直後に人為的に埋め戻された。おそらく平安遷都に伴う宅地整備のための整地と考えられる。

しかし、今回の調査区では、9世紀から12世紀まで（平安時代前期・中期）の遺構を確認できなかった。これは調査区周辺のこれまでの調査でも同様である。

12世紀後半から13世紀前半（第2面） 調査区東半では12世紀半ばに大規模な整地土を確認した。整地の範囲は、主に流路501の上面と重なる。

その後、12世紀後半から13世紀前半（平安時代末から鎌倉時代前期）にかけて、地業155及び建物1、建物2～4、井戸314・394・494・392、土坑171・157を確認した。なお、建物3は、建物2と建物の南辺をほぼ揃えて東西に並び、建物4と東西の幅をほぼ同一にして、建物の中軸を揃えて南北に並ぶ。また建物2は、建物1と建物の東辺をほぼ揃えて南北に並ぶ。このことから、建物1～4は計画性をもって建てられたとみられ、同時期に存在した可能性が高い。

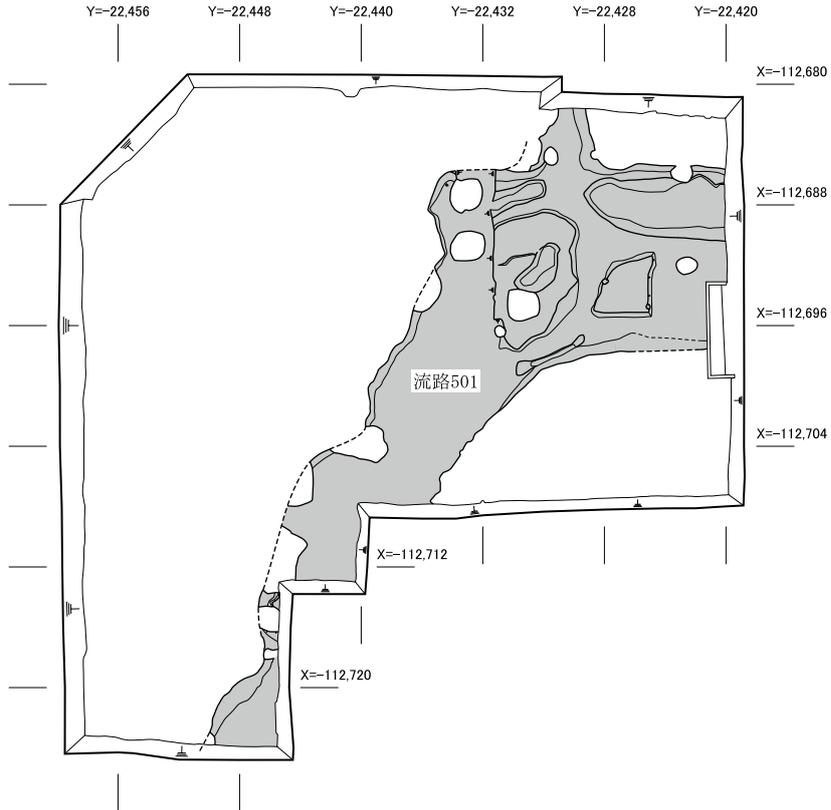
12世紀半ばに行った整地は、これらの遺構群を形成するための大規模造成と推測できる。今回の調査地では、掘立柱建物や井戸、大量の土器や羽釜などの食器や調理具の廃棄土坑を検出したことから、12世紀後半から13世紀前半は、宅地として利用されたようである。

13世紀後半から14世紀前半（第2面） 13世紀後半から14世紀前半（鎌倉時代中期から後期）にかけて、地業370・419・477、柱穴列7や井戸35・168・170・371、土坑42、312を確認した。出土遺物からみた地業の造営時期は、地業477がやや早く、地業370と地業419はほぼ同時期である。地業をもつ建物1は失われ、同位置に井戸35や土坑312が確認できた。13世紀後半から14世紀前半も、宅地として利用されたようである。

16世紀以降（第1面） 調査区西側で御土居の堀、調査区中央で素掘溝、堀より東側の調査区全体で多数の素掘小溝を検出した。

御土居の堀は、出土遺物から17世紀前半には徐々に埋まり始めていたようである。また堀の東側は御土居の外で、洛外にあたる。調査地周辺は、近世には田畑が広がっていたとみられる。

9世紀初頭



12世紀後半～13世紀前半

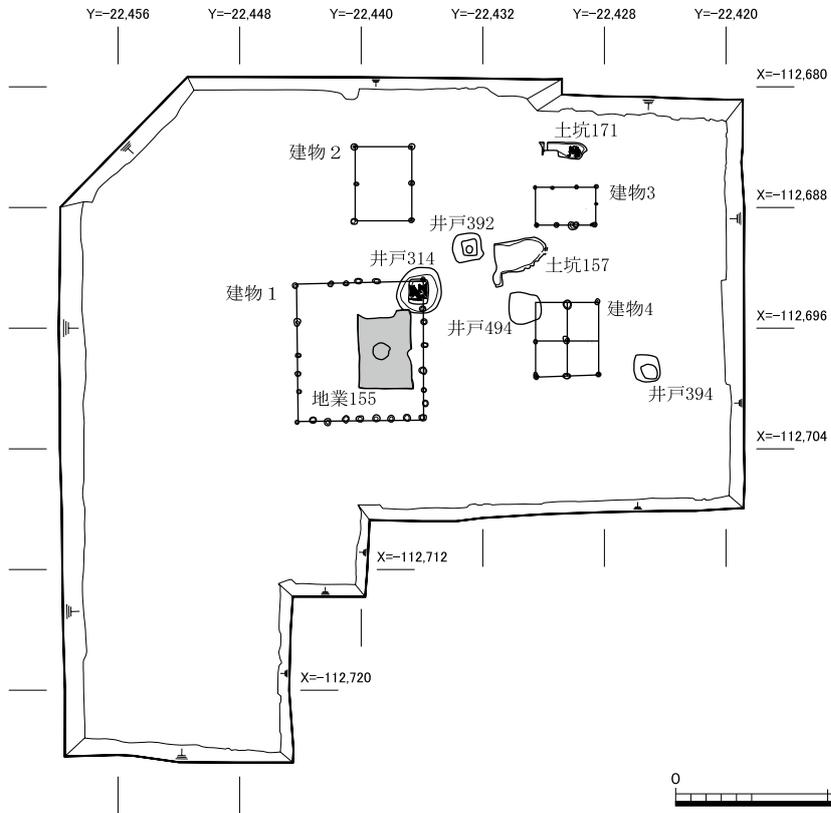
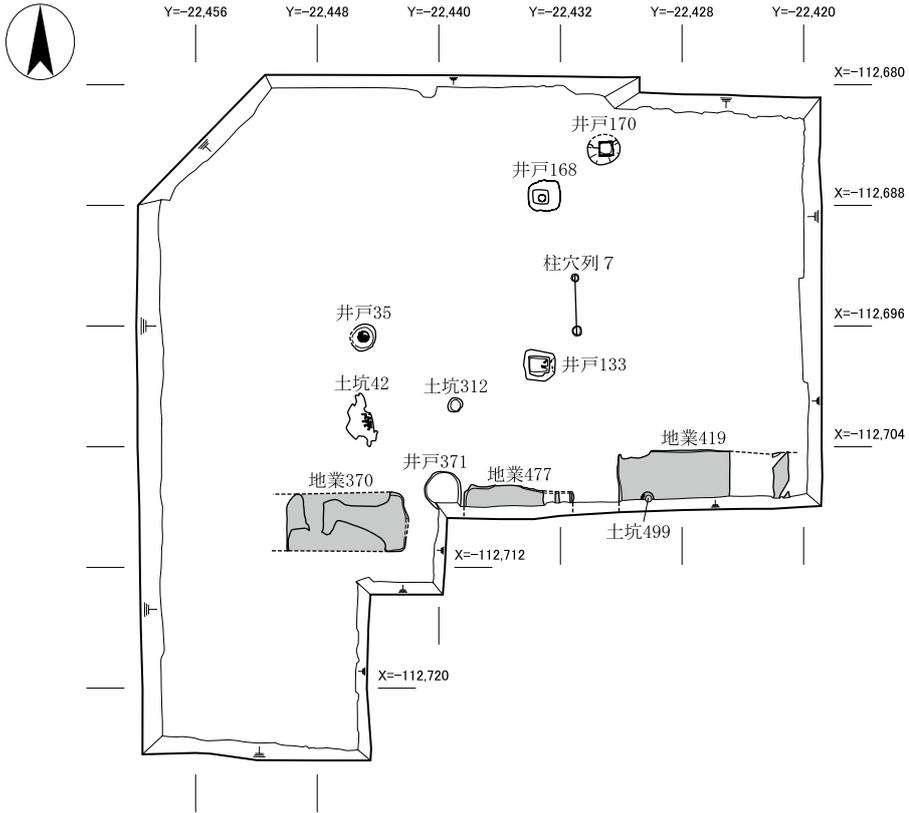


図40 遺構変遷図1 (1 : 500)

13世紀後半～14世紀前半



16世紀以降



図41 遺構変遷図2 (1 : 500)

(2) 建物1の上部構造と性格 (図42・43)

今回の調査では、第2面で建物基礎の痕跡である地業を4基(地業155、地業370、地業419、地業477)検出した。とくに、建物1は建物の一部分に掘込地業(地業155)を施す珍しい構造であることが明らかとなった。ここでは、この建物1の上部構造や性格を、検出状況や類例などから考察したい。

まず建物1及び建物1に伴う遺構について、「3. 遺構」の記述を基に整理すると、以下の通りである。なお建物1に伴う遺構は、地業155と地業155西側の整地土である。

建物1

- ・東西8間、南北9間の掘立柱建物、柱間は約1.0m。
- ・柱穴掘形は直径0.3～0.5mの円形。

地業155

- ・建物1内部の中央東寄りの東西約3.5m、南北約5.2mの範囲に確認。
- ・基盤層である第Ⅲ層(砂礫層)を掘り込み、底面に拳大の礫を2段に敷き詰める。
- ・上層の礫間には黄灰色砂混粘質土が入る。

地業155西側の整地土

- ・地業155西辺から西2.7mまでの範囲には基盤層(第Ⅲ層)の直上に、厚さ約0.1mのオリーブ黒色砂礫を堅固に突き固める。その上に黄灰色粘質土を確認。
- ・地業155西辺の西2.7mラインから西6.2mまでの東西3.5m範囲に、厚さ0.02～0.03mのにぶい黄褐色極細砂を確認。

以上より、掘立柱建物である建物1はその東半に礫を2段敷き詰めた地業をもち、その地業の上には黄灰色粘質土が積まれたことがわかる。この黄灰色粘質土と、地業155西側で確認した黄灰色粘質土とは類似することから、これらは一連のものとして推測できる。したがって、この粘質土は地業上及びその西側にかけての方形(東西6.2m、南北5.2m)に施されたとみられ、建物の建つ範囲に造成された基壇状の盛土、いわゆる亀腹状基壇と考えられる。なお本来の盛土部分は、後世の削平により残存しておらず、現在はその基部のみに粘質土が残存した状況といえることができる。このように、基壇状の盛土の上に建物(身舎)が建てられたとすると、盛土の外側にある四周の柱穴は、掘立柱の庇あるいは縁束とみることができる(図42)。また身舎の西側には極細砂が広がるが、これは礫や遺物などが含まれないことやその色調から、建物の前面に敷かれた化粧土のような役割を持っていた可能性がある。このことから、建物1は西を正面として建てられたとみられる。建物1の奥にあたる東半部には地業が施されたことから、重量物が置かれていたと想定できる。

次に掘込地業をもつ建物の類例から、建物1の性格について考える。

地業は、建物の地盤沈下を防ぐために行われた基礎固めであるが、礫を詰め込んだ地業は、これまで平安京や鳥羽離宮などの調査でも確認されている。表5には平安時代から鎌倉時代にかけての掘込地業の検出事例をまとめた。なお、室町時代以降にも地業は存在するが、今回は対象として

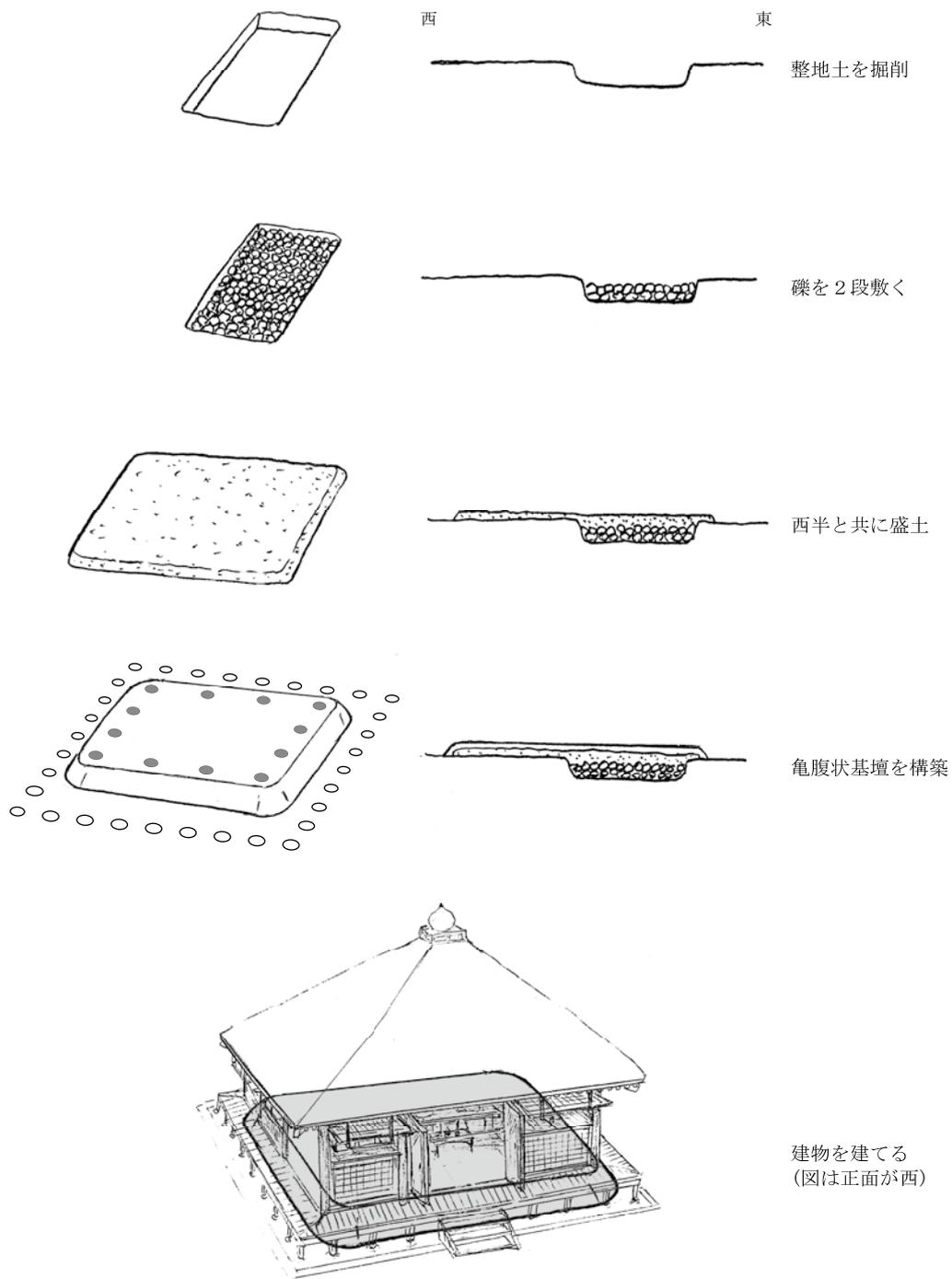


図42 建物1作業工程図

いない。

表5によると、地業検出事例は主に平安京の宅地内(表5-1~6)、白河街区(表5-7・8)、法金剛院(表5-9・10)、法住寺殿(表5-11~15)、鳥羽離宮(表5-16~23)の事例にみられる。

地業の規模は、鳥羽離宮では一辺10m以上、大きいものは一辺100mと大規模な範囲に施されるのに対し、平安京宅地内では大半が一辺6m以下と小規模である。調査区の規模や後世の削平によ

るところも大きいですが、宅地の大きさや施工者の違いが最も大きい理由であろう。

地業の工法は、地面を掘り込み、内部に礫のみを積む方法または、礫と土を交互に突き固める方法などが主にみられる。なお鳥羽離宮では、亀腹基壇が残存している事例の存在から、その他の鳥羽離宮や平安京の事例も、おそらく往時には基壇状の盛土がある程度の高さまで存在していたと考えられる。

地業の築造時期は、尊勝寺や鳥羽離宮、法金剛院では12世紀前半から中頃にかけて造営されるが、平安京宅地や法住寺殿では12世紀後半から13世紀前半にかけて造営されており、尊勝寺や鳥羽離宮、法金剛院でやや早くから取り入れられるようである。

このような地業をもつ建物の性格について、尊勝寺や鳥羽離宮、法金剛院、法住寺殿では、歴史的背景や文献史料、所在地などから、釈迦堂や阿弥陀堂といった仏堂をはじめ、門や築地に比定されている。

平安京宅地では、調査面積が小規模であるため、遺構の全貌が明らかとなっていない事例も多

表5 掘込地業の検出事例一覧表

No.	遺跡名	遺構名	地業の範囲 (東西×南北m)	地業の深さ (cm)	上部構造	時期	文献
1	平安京左京八条二坊十四町	石敷き遺構	11.5×12以上			12世紀後半	1
2	平安京左京八条三坊四町	地業106	6.8×4.7~5.7			13世紀前半	2
3	平安京左京八条三坊五町	建物146	6.3×2.6	24		12世紀後半	〃
4	〃	建物160	3.0×1.6			12世紀後半	〃
5	平安京左京九条三坊一町	地業SX132	4.7×1.5以上	60		12世紀後半	3
6	平安京右京六条一坊六町	SB79	5.7×11.7		礎石建物	12世紀末 ~13世紀前半	4
7	白河街区	建物地業跡	12以上×21以上	150		12世紀後半	5
8	尊勝寺観音堂	地業	亀腹基壇の一部		礎石建物	12世紀初	6
9	法金剛院南御堂	地業1	9.6以上×9.6以上	80以上		12世紀半ば	7
10	〃 東御門	地業	10以上×6以上	1.3以上		12世紀半ば	8
11	法住寺殿最勝光院	地業55	4.7以上×24.5以上	15~70		12世紀後半	9
12	〃	地業56	4×2以上か			12世紀後半	〃
13	〃	地業60	2.8以上×1.3以上	40		12世紀後半	〃
14	〃	地業62	1.2以上×1.9以上			12世紀後半	〃
15	〃	地業166	1.0以上×10以上	90~110		12世紀後半	〃
16	鳥羽離宮金剛心院釈迦堂	建物1	30×24	80	礎石建物	12世紀半ば	10
17	〃 阿弥陀堂	建物2	—	120	礎石建物	12世紀半ば	〃
18	〃 一間四面堂	建物7	14×10.5以上	30	礎石建物	12世紀半ば	〃
19	〃 門跡	建物8	13×17.5	50	礎石建物	12世紀半ば	〃
20	〃 西側築地	築地13	幅2~2.5	60~90		12世紀半ば	〃
21	鳥羽離宮北殿勝光明院経蔵	SB-01	43×50	40	礎石建物	12世紀半ば	11
22	鳥羽離宮田中殿	SB142	9.6×23以上			12世紀末	12
23	鳥羽離宮東殿無量寿院阿弥陀堂	石積み遺構	55×100	50~150		12世紀前半	13

※ 時期は報告書に準拠

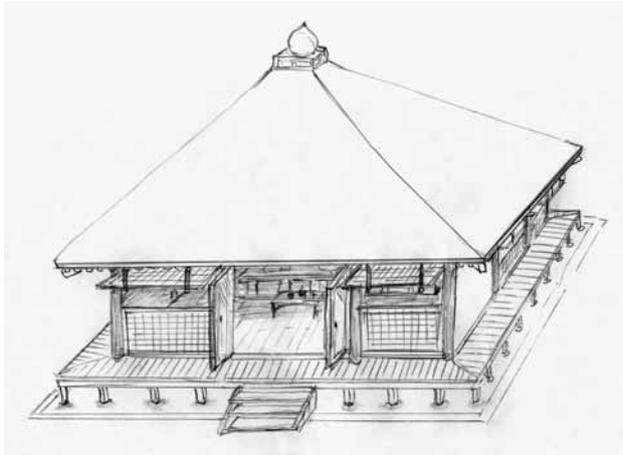


図43 建物1復元図（イラスト／梶川敏夫）

い。その中で、右京六条一坊六町（表5-6）で検出した地業をもつ建物は、上面に礎石が遺存していることから、上部構造は庇と軒を持つ礎石建物とされる。そして、その性格を邸宅内につくられた御堂と推定する。また今回は比較の対象としていないが、室町時代の石積地業には、上部構造が総柱建物であることや絵画などから、クラと推測される事例も存在する。

このように平安京宅地では、建物の性格を確定できる検出事例は少ない。しかし、地盤の基礎固めという地業構築上の目的から、地盤の軟弱な地に瓦葺建物などの重量のある建物を建てる際に地業が用いられたことは明確である。そのため、今回検出した地業の上部にも、堅固な建物が造営されたと考え。とくに地業155の上部構造（建物1）については、方形盛土の上に身舎が建てられ、周囲に軒がでる建物を想定した。身舎部分は、礎石などの遺存は確認できなかったが、他の検出事例から考えて、おそらく礎石建物であったろう（図43）。

この建物1の性格を確定することは困難ではあるが、上述した上部構造の想定及び類例から、西を正面とし、東半に須弥壇を置いた持仏堂（御堂）のような建物を可能性の一つとして挙げたい。調査地周辺では、平安時代後期以降、邸宅内に阿弥陀堂などの持仏堂（御堂）を建立した事例の多いことが文献史料からも明らかであり（「2. 位置と環境（2）歴史的環境」参照）、それも傍証となろう。しかし、これはこの建物の性格について、一つの可能性を提示したに過ぎない。今後、とくに平安京での類例の増加を待ち、さらに検討を重ねていきたい。

文献（表5 掘込地業の検出事例一覧表）

- 1 「平安京左京八条二坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 2 『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 3 「平安京左京九条三坊一町跡」『平安京左京内5遺跡 平安京跡研究調査報告 第22輯』財団法人古代学協会 2008年
- 4 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 5 「白河街区跡」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第23冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 7 「法金剛院境内（99UZ369）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年

- 8 「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 9 『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 10 『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 11 「第43次(田中殿Ⅶ)発掘調査」・「第45次(田中殿Ⅷ)発掘調査」『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年、「第65次調査」『鳥羽離宮跡調査概要 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 12 「鳥羽離宮跡第14次発掘調査概要-田中殿第2次発掘調査-」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅳ 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 13 「第110次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和60年度』 京都市文化観光局 1986年

圖 版



1 第1面全景（北東から）



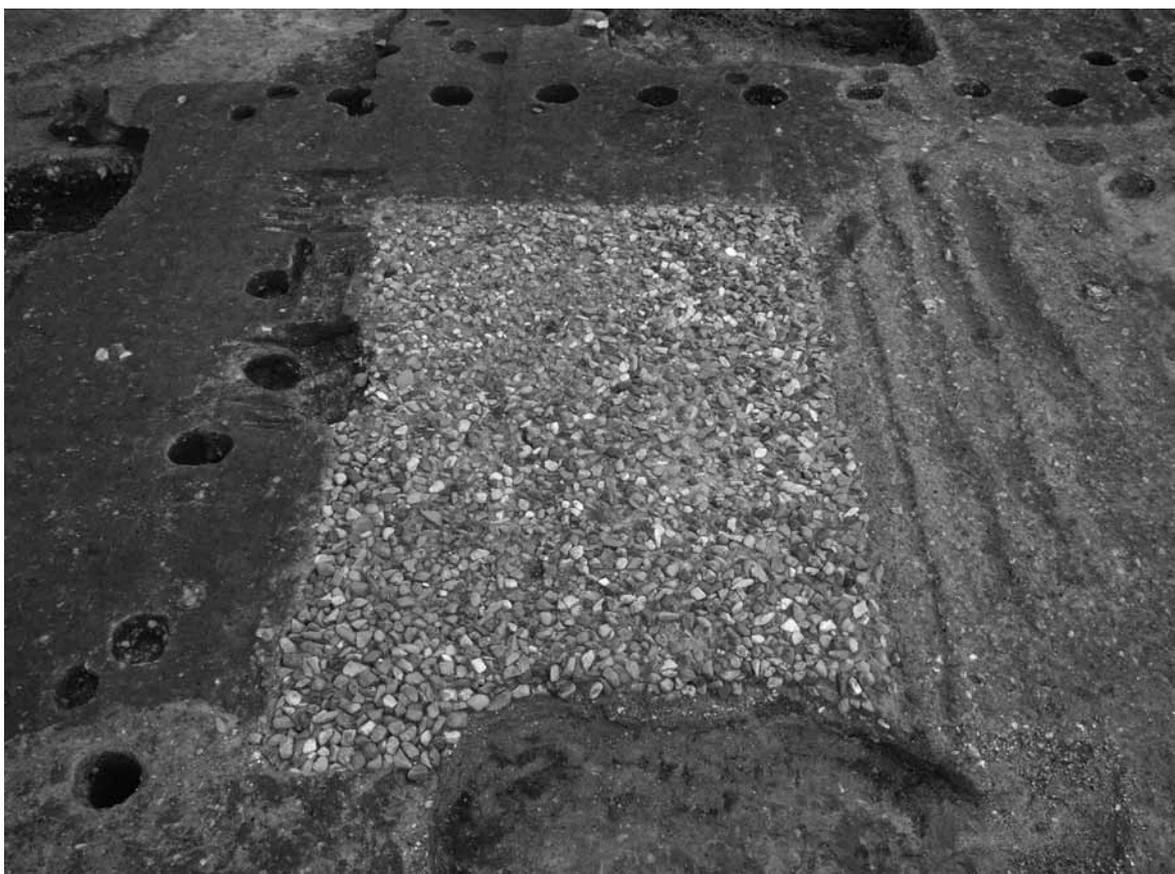
2 堀3完掘状況（北から）



1 第2面全景（東から）



2 建物1（東から）



1 地業155礫上層検出状況（北から）



2 地業155礫下層検出状況（北から）



1 地業155底面検出状況（北から）



2 礫上層遺物出土状況（北から）



3 土坑500検出状況（北から）



4 土坑500曲物内掘削状況（北から）



5 地業155石2（北から）



1 地業370検出状況（北東から）



2 地業419検出状況（北東から）



3 地業477検出状況（北東から）



4 井戸371検出状況（北東から）



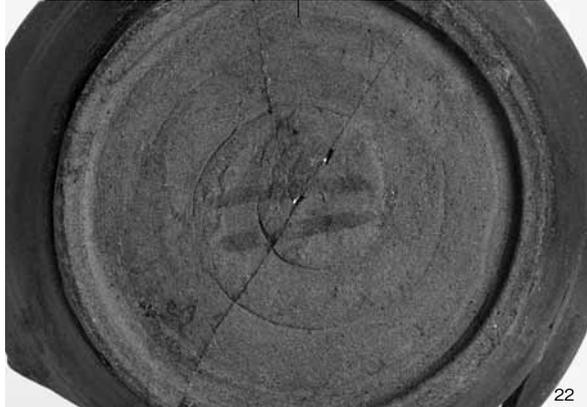
1 井戸35遺物出土状況（東から）



2 井戸170井戸枠内掘削状況（北から）



3 第3面全景（東から）



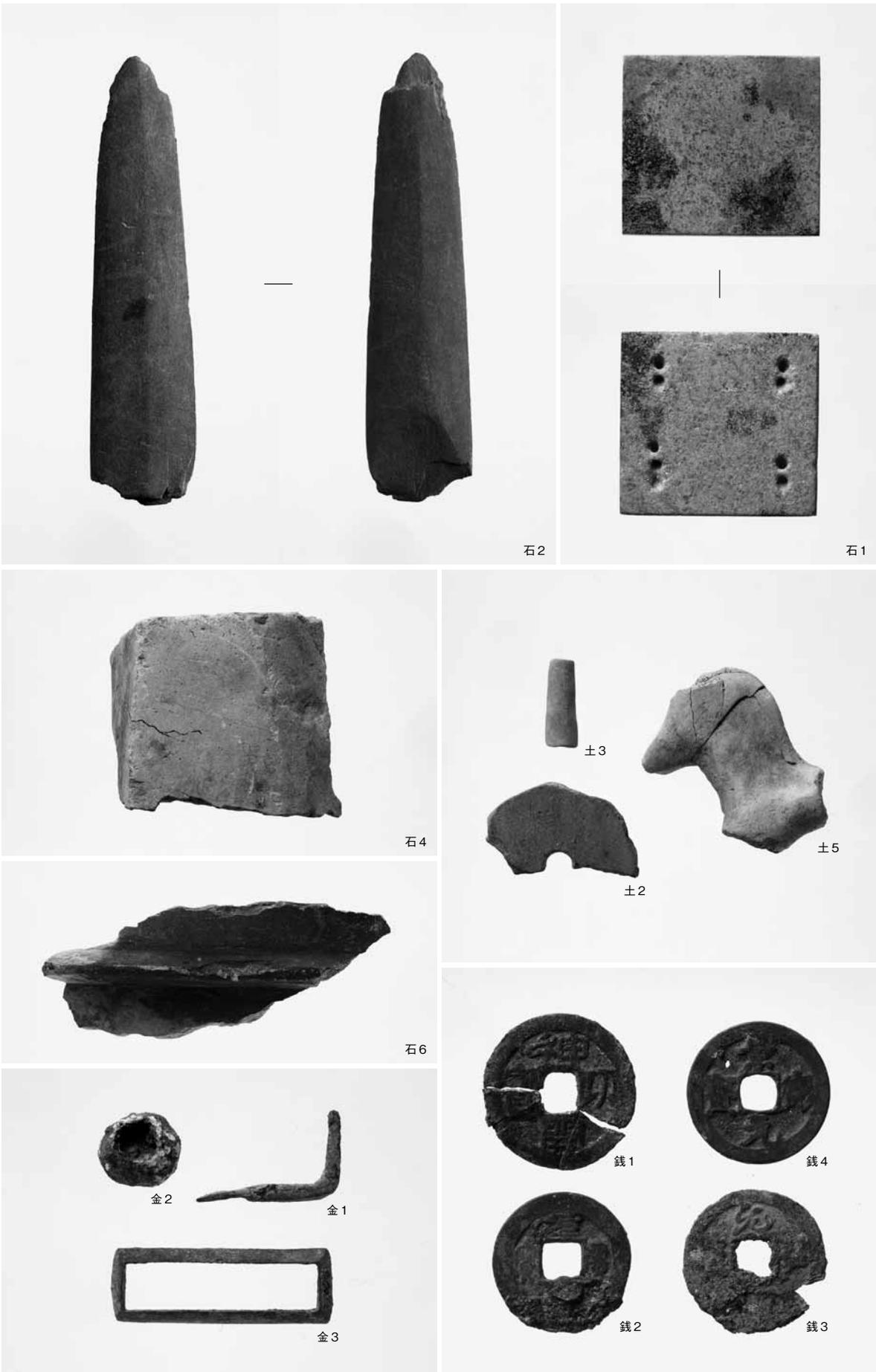
土器類 1











土製品・石製品・銭貨・金属製品



木1



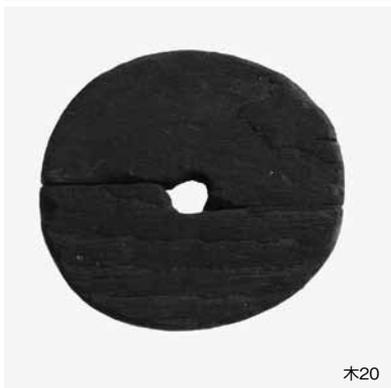
木2



木25



木5



木20



木26



木19



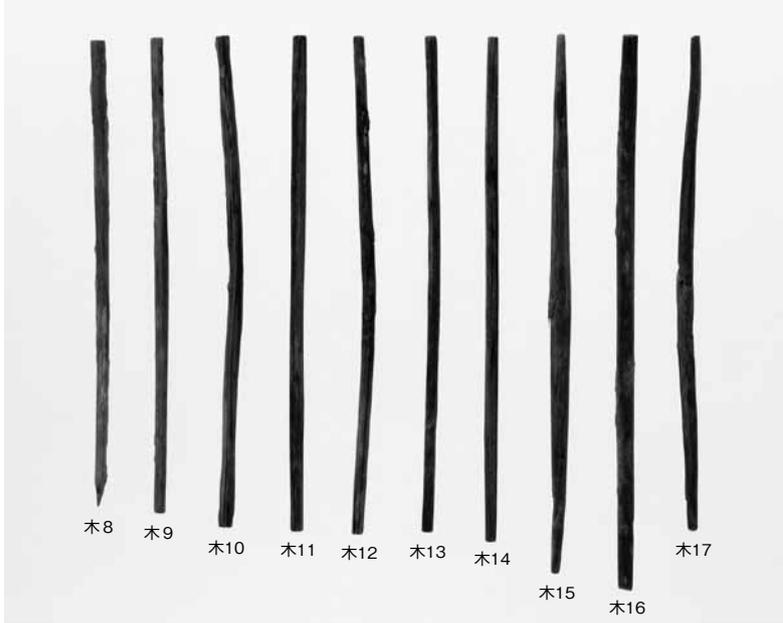
木24



木18



木23



木8

木9

木10

木11

木12

木13

木14

木15

木16

木17

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうくじょうにぼうじゅうろくちょうあと・おどいあと							
書名	平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-9							
編著者名	松吉祐希・木下保明							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 おどいあと 御土居跡	きょうとしみなみく 京都市南区 にしきょうきたのうちちょう 西九条北ノ内町 6・7・8-1	26100	1 149	34度 59分 02秒	135度 45分 15秒	2014年5月 21日～2014 年9月26日	1,521㎡	会社社屋 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	9世紀	流路	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器		建物の一部分のみに 地業を行った特殊な構造の建物を 検出した。		
御土居跡	土塁跡	12世紀後半 ～13世紀前半	建物、塀、地業、 井戸、土坑	土師器、須恵器、黒色 土器、瓦器、緑釉陶器、 輸入陶磁器、焼締陶器、 瓦、石製品				
		13世紀後半 ～14世紀前半	柱穴列、地業、井 戸、土坑	土師器、須恵器、瓦器、 緑釉陶器、灰釉陶器、 輸入陶磁器、焼締陶器、 瓦、石製品				
		16世紀以降	堀、素掘溝、耕作 溝	土師器、染付、焼締陶 器、銭貨、木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-9
平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡

発行日 2015年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961